

KH667-H72



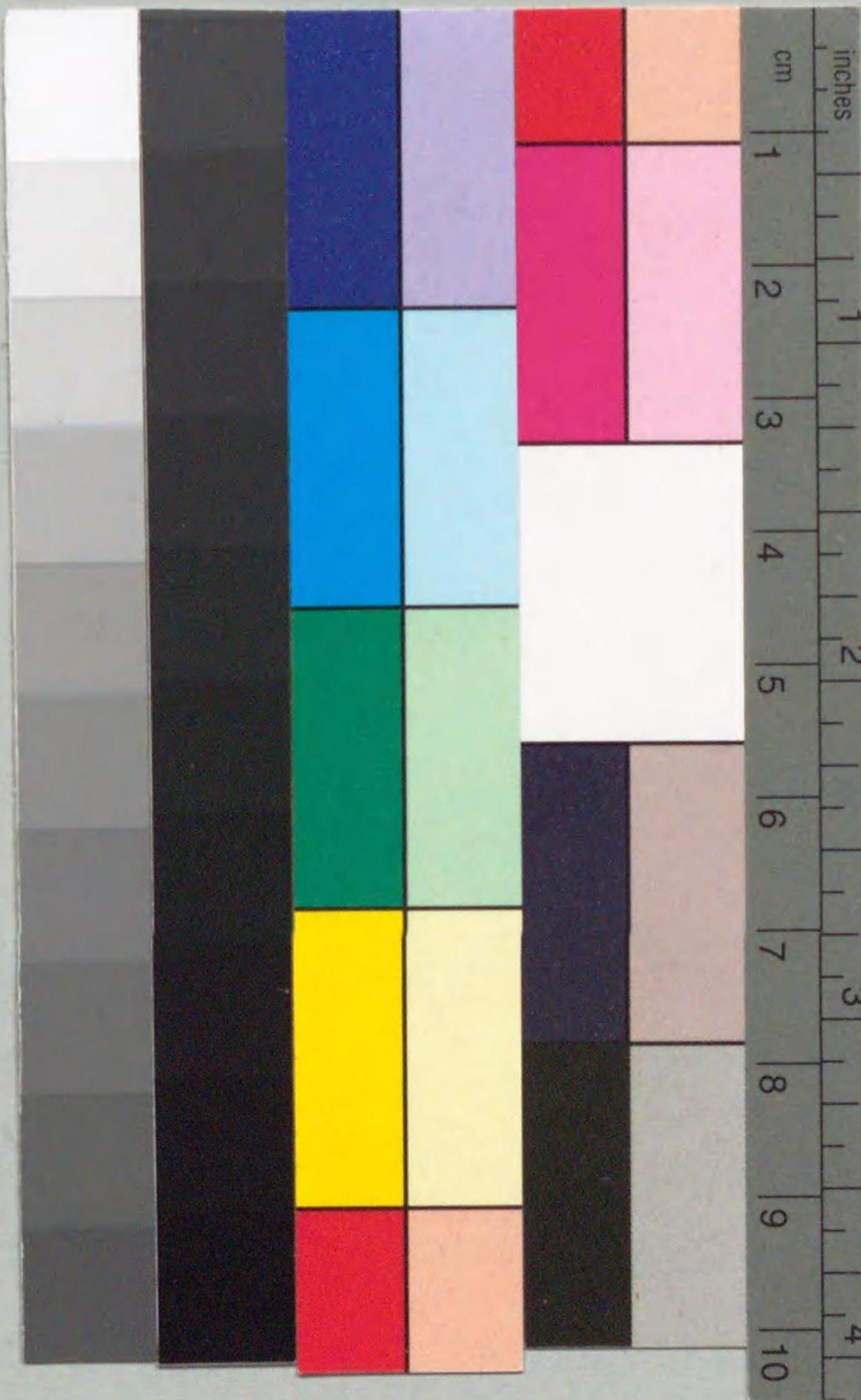
1200701566861

赤外線男

海野三十

307

春陽堂



庫文說小本日

— 307 —

男 線 外 赤

三 十 野 海

堂 陽 春

赤外線男

KH667

H72



I 種

W



1200701566861

目次

盗まれた脳髓……………一
 電氣看板の神經……………三
 幸運の黒子……………七
 夜泣き鐵骨……………八
 三角形の恐怖……………一四
 西湖の屍人……………一四
 赤外線男……………一七

盗まれた脳髓

1 不思議な學者病

「もしも案内なしに、いきなり此處の廊下に抛り出されたとしたら——」大學病院の薄暗い長廊下を獨りぼつち歩いてゐる帆村探偵は、こんなことを考へた。これが大東京の眞中だと云ひ當てる者は、先づ千人に五人と居ないだらうナ」

年に一度もカラリと乾いたことの無いやうな、そして何處までも長く續いて鍵なりに曲つてゆく此の病院の廊下だつた。商店の廂は一センチでも前へ伸びようとし、交通警官の合圖の笛が無ければ自轉車なんか一臺だつて街を横切れやしない様な、目まぐるしい切り詰めた大都會の、しかもその中心に近く、こんなに悠つたりとした陰氣くさい長廊下が在るなんて、考へてみると、凡そ建築物といふものは内部にどんな仕掛が隠されてあるんだか、まことに不思議な存在だつた。

盗まれた脳髓
 「やあ、此處だナ」
 幾曲りかした廊下の末に、河北診察室と名札のうつた室があつた。

「先生はおいでですかネ」ノックすると出てきた色の白い看護婦に、名刺を手渡すと、ぶつきら棒に尋ねた。

「はア。少々お待ちになつて下さい」

看護婦は『探偵』といふ肩書を讀むと、ツと固い表情になつて、白塗りの扉の内部に消えた。帆村は苦笑ひをしながら、廊下の窓に釣されてある涼しさうなイソレップスに眼を移した。

「どうかお入り下さい」見慣れるとなか／＼美しい看護婦の聲だつた。「いま御診察中ですから、すこしお待ちねがひたいと仰有いました」

帆村は、黙つて肯くと、クレゾール臭い室の安樂椅子に腰を下ろした。そして此の美しい看護婦が、眼を細くして物を視るところから、これは近眼で、かなり美貌に自信があり、日本趣味の家庭に育てられた娘だなと、暇潰しに餘計な觀察を拂つてゐた。

すると奥の診察室から、ガヤ／＼と聲高の會話が聞え、やがて硝子扉の向うに近づく人の姿が映つた。

「やあ、どうも世話をかけて、すまなかつた」上品なホームスパンの間着を着た三十四五歳に見える紳士が現はれたが、生憎後を向いてゐる。

「なあに、大したことぢやない。あまり氣にせんで居給へ」後から營養のいゝ肥えた手術衣の男が圓い顔を出した。それが内科長の河北博士だつた。

2 「ちや失敬。奥さんよろしく」

さう云つてホームスパンの紳士は、くるりと入口の方に向き直つた。

(おお、これは……)

帆村探偵は、出てきた紳士の顔を見ると、軽く駭きの目を見張つた。

(工學研究所の國寶的天才、白鳥理學博士ぢやないか！)

河北内科長の診察を受けてゐたのは、白鳥博士だつたんだ。

「やあ帆村君。こつちへ來給へ」

白鳥博士の後から、看護婦が出てゆくところまで、感心して見送つてゐた帆村探偵は、科長の聲に、はツと吾れに歸つた。

帆村と河北科長とは同じ讃岐出の同郷人だつた。尤も河北博士は、帆村よりもずっと大先輩で、帆村が探偵になつてからは、醫學上のことで此の親切な先輩の力を借ることが多かつた。

「今日は何の用かね。またプランクトンと日本人の疾病に就て——かな」河北科長は上機嫌で帆村を野次つた。

「プランクトンはもう判りましたよ、河北さん」帆村は手帛を出して額の汗を拭いた。「白鳥博士は何處が悪くて診察を受けに來たんですか」

「オヤ／＼君は白鳥君の後をつけて來たのかね」

「いやさうぢやないんですが、鳥渡……」

「ちよつと出来心といふところだね、はッはッはッ」

帆村はすつかり逆襲の形で頭を搔いた。それにしても、何が河北科長を朗かにしてゐるんだ——釣りこまれた笑ひの裏に、彼は頭をひねつたのだつた。

「醫者といふものはネ、君」と河北科長が改まつた調子で云つた。「患者の秘密については洩らせないことになつてゐるんだ。君も先刻御承知だらうと思ふがネ」

「それは失禮しました」

帆村は直ぐ謝つた。だが河北科長のこの言葉から、白鳥博士の病状といふのが、胃病や風邪ひきのやうな単純な病氣でないといふことを知る事が出来たと思つた。どうやらそれは、今日河北科長を訪問した一つの大きな問題と關係があるやうにも思はれるのだつた。チャンスを掴むのが上手な帆村は、そこで話題を自然に本問題の方に移していつた。

「ところで先生。最近容易ならぬ奇病が流行してゐるやうですが、あれについて御説明をねがひたいです」

「ナニ、容易ならぬ奇病だつて!?」河北科長は探偵の云ひ方が餘りに大袈裟だつたので駭いた風だつた。「そりや何のことだい、君」

「先生は御存じないのですか」

4 河北科長は眞面目くさつた帆村の顔を暫く眺めてゐるが、やがて微笑と共に云つた。「一向に知らな

5 いぜ。——一體、何處で流行つてゐる何病のことを云つてゐるのだい」

「これは近頃驚きましたね、先生が御存じないとは……」帆村はニヤリと笑つた。「その奇病は何病といふのだから、こつちから先生に御伺ひしたいのですが、流行つてゐるところは、極く一地方です」

「ほほう、地方病かね」

「そして同じ型の人間に限つて其の奇病に罹るんです」

「すると、小兒病とか婦人病とかの類だね」

「いえどうして、そんな単純なものではないのです。其の上に非常に突發的な病氣で、をさまるとケロリとして、まるで病氣を知らぬ健康體のやうなんです」

「間歇性の病氣なんだね。なるほどこれは見當がつかないね。もつと具體的に、地方のこととか、人間の型とか病状について詳しく話し給へ」

「ぢや申しませう。この奇病の流行について僕が氣が付いたのは、實は一昨日のことなんです。夕刊を見てゐますと、「本邦蓄電池學の權威、牧田正年博士重態に陥る」といふ記事が出てゐたんです。博士はまだ四十を二つ三つ越えたばかりの壯年學者です。その博士が其の日の朝、研究所の出勤を休まれ、自宅の書齋で讀書中、急に發病されたのです。なんでも家人が博士の愛用してゐるコーヒーを入れて持つて行つたところ、讀書をしてゐるとばかり思つてゐた牧田博士が、椅子の上に反りかへつた儘、呼吸づかひが唯ならぬのです。家人は吃驚して博士の後に廻り、名を呼ぶやら肩を叩くやらそれは大騒ぎをし

たのですが、どういふものか博士はウンともスンとも返事をせられない。それでゐて、脈搏も呼吸も、平常よりは数が多いが、とに角しつかりしてゐるんです。唯、知覚が全然無い。その内に、主治醫も証けつて、大體の症狀を聞くと、急性の腦膜炎になつたらうといふので、色々と診斷をしなり反應を調べてみたところ、腦膜炎ではないことが判つた。そこでこれは容易ならぬ症狀だといふことになつて、直様入院させて手當をしたところ、夕刊締切前になつて、始めて牧田博士の知覚が回復したといふのです」

「ほほう、さうか」河北科長は何か心中に思ひあたることがあるのか、大きく肯いた。

「話はそれだけぢやないのです。僕はこの牧田博士重態の記事を讀んだときに、それから三日ほど前に、「内燃機關の權威、山川廣助博士の危篤」といふ記事のあつた事を思ひ出したのです。それから又、更に五日程前に、「テレヴィジョン發明家として有名なる澤柳日大教授、奇病に苦しむ」といふ新聞記事のあつたことを思ひ出したのです。いやいやそればかりではないのです。僕は記憶の絲を元へ手繰つて行くにつれて、これは徹底的に調べて見ようといふ氣になり、上野の圖書館へ行つて過去一ケ年の新聞をすつかり引繰り返してみたのです。ところがどうです。今年の二月から始まつてこの九月までの八ケ月の間、學者の重病患者が非常に殖えてゐるのです。詳しく云ふと三十五名の學者——それも科學者ばかりに限り、殊にどれもこれも最高權威と謳はれる博士達が、云ひ合はせたやうに重症に陥つてゐるのです。しかも其の容態は殆んど似たりよつたりで、病名は奇病と呼ぶより外に仕方の無い種類のもの

らしいです。僕に云はせれば科學者病とでも名付けたいところですが。その奇病の治療や豫防は、貴方がたの領域として僕は首を突込まうとは思ひませんがね。僕の黙つてゐられなくなつたのは、この蔓延してゐる奇病が、果して單純なる病氣であるのか、それとも一種の犯罪による被害であるかといふ疑問が湧いて來たせゐるなんです」

「待ちたまへ帆村君。さういふ君の鋭い着眼點に敬服して、僕は敢へてお喋りをしたくなつたよ。今診察をうけに來た白鳥博士も、實は君が説明したと同じ奇病に悩んでゐるのだ。そして僕も治療上に大いに頭をひねつてゐるのだ。病氣か犯罪被害か？ よし僕も大いに研究して見る。ここ二十四時間の裡に……」

河北科長の面は、緊張にだん／＼と輝いて來た。帆村はホツと一息つくくと、火の消えた煙草に、ライターの焰を近付けた。

「先生」帆村は、紫の烟を、腹の底からフツと吹き出すと、やや云ひ憎くさうに云つた。
「先刻ここにゐた看護婦さんは、大變綺麗な人ですね」
「ウン。川邊千枝子のことかい」博士も居住ひを寛げながら云つた。「氣の毒だが、あれは思ひ切つた方がいゝぞ。先口があるからな」

「ははア、さうですか。僕が當てて見ませうかね、白鳥さんでせう」
「うむ。イヤ滅多なことを喋るんぢやないよ」

2 繙帯をした黒人

帆村探偵は、妙な癖の持主だつた。といふのは、彼は何か考へごとがあるといふと、よく上野の動物園へ入ることだつた。やがて三十歳に手の届かうといふ帆村探偵が五つ六つの子供の喜ぶ動物園を好むといふのだから實に呆れた次第だつた。然し内々彼が友人に洩したところによると、探偵上などで頭腦がうどんの玉のやうに疲れ切つたときは、猿の檻の前で子猿にキヤラメルをやつたり、駱駝の眠むさうな顔を見たり、猪を見て豚と違ふところは牙のある違ひなんだからうかそれとも肉の味に甲乙のあるせらだらうかなんて考へたりすることが大變頭腦の疲れを恢復する効能があるさうで、時には一歩進んで事件解決の素晴らしい鍵を見つけたことも二度や三度ではなかつた。

今日も帆村探偵は、科學者病事件を、どう解いてよいのかに迷つた末、ブラリと上野動物園の石門をくぐつた。残暑がまだ厳しい九月のことで、細かい白砂利の廣場には葉櫻の蔭が色濃く、帽子を脱ぐと樹の下を通つてくる涼しい風が帆村探偵の熱い額を冷やした。彼は蘇生したやうな想ひで、靜かな歩を拾つてゐた。

「おい、帆村君」

彼はイキナリ呼びかけられた。

8 「やあ、赤羽四郎君ぢやないか。妙なところで逢つたもんだね」

それは小腕に、茶色の大きな角封筒を挟んでゐる若い背廣服の男だつた。赤羽製作所と名乗る小さな眞空管工場を持つてゐる帆村の友人だつた。

「いや、駭きは寧ろこつちに有りと云ひたいところさ。猿が狸を喰つたといふやうな事件でも突發したのかなと思つたもんでね。はッはッはッ」

「それよりは君は何故こんなところを、うろついてゐるのだい」
「いや、いよいよ訊問とお出でなすつたね。だが其の不思議がるのも一應尤もだよ。實は今度、動物園から動物治療用の人工太陽燈の注文をいただいたのだ。ところがそれが六ヶ敷い條件がついてゐるのて、今まで有るものぢや役に立たない。どうしても新たに設計をしなけりやならないと云ふことになつた。それで今日は設計圖を園長さんに見せての歸途なんだが、それについて今度といふ今度は、苦勞をしたよ」

「苦勞て、一體どう苦勞したのだい」

「それがね、君に云つても判るまいが、こいつの設計なり製作は、とても六ヶ敷いのだ。先づ我國では、あの工學研究所の白鳥博士を除いては他にない」

「ナニ白鳥博士だつて？」 帆村は、昨日河北科長の診察室に見かけた例の奇病患者の一人である白鳥博士の名が出て來たので驚いた。

「さうだ白鳥博士に限るんだ。ところで僕はその太陽燈の設計を博士におねがひに上つたんだ。博士は

承諾して下すつたので安心してゐたところ、昨日の朝になつて急に断られちまつた。僕は感情でも害したのかと思つて恐る／＼御尋ねしたところ、さうではなくて、博士はひどい神経衰弱に罹られて、當分一切頭腦を使ふことはやらないから、設計も出来ないといふ御挨拶さ。園長と契約の期限もあるし、僕はどうしたらよからうかと途方に暮れちやつた」

「餘り途方に暮れてゐる顔でも無いやうだね」と今度は帆村が揶揄つた。

「そりや今は途方に暮れてなんか居ないさ。もう設計圖は園長さんに見せてきたのだからね」

「すると——」

「うん、捨てる神あれば拾ふ神ありて、白鳥博士の外に、もう一人非常に立派な設計者があることを發見したんだ」

「なアんだ」

「ところが其の設計者——南瀉吾平先生といふのだがね。たつた一日で設計して呉れて、しかも、それが白鳥博士に設計して貰つたら、かうも行くだらうと思はれる位、非常に素晴らしい設計なんだ」

「ほほう、實に立派な學者だね」

「いや感心するのはまだ早いのだよ、帆村君。南瀉先生は科學に關する設計ならば、何でもやるんだ。物理のことでござれ、化學でも、電氣工學、機械、土木と云はず、何でもやるのだ。南瀉科學設計事務所の評判は大したものだ」

「一體其の南瀉先生といふのは、どんな人なのだ」

「先生は白鳥博士などの先輩にあたる人だといふ事だ。大學を出ると大學院に五年居て、それからインドのカルカッタ大學へ自費研究生として行かれ、今年の正月、二十年目で歸朝せられた風變りの學者だ。先生は小石川音羽臺にある印度志士ガラ・アパラシヤ氏の城廓のやうな邸宅を、そつくり買つて其處で毎日設計をしてゐられる」

「なるほど變つた學者だね」

「變つてゐるのはそればかりではない。先生は未だ無妻で、あとは助手や召使が十五六人も居るさうだが、それが悉く黒ン坊ばかりなんだ」

「なに、黒ン坊といふと」帆村はあんまり友人の話が突飛なので、思はず聞きかへした程だつた。

「黒ン坊は、黒ン坊さ。二三人は印度人だがその他は全部阿弗利加の土人ださうだ」

「ほほう、阿弗利加土人を集めて何をするのかしらん」

「そりや知らぬが、先生の助手になつて、設計をやつてゐるらしい」

「阿弗利加の土人なんて、日本人に比べて頭腦は頗る劣等なんだらうが、人種にもよりけりて、何故阿弗利加土人なんか使つてゐるのだらうね」

「さあ、僕に聞いたつて返事が出来ないがね……」と赤羽四郎は帆村の熱心な追究に會つて、遂に壁際へ押付けられた形で、それを脱れるために、ポケットからエアースリッパを一本摘まみ出して火をつけ

た。

帆村は友人が落着かぬ様子で、紫の煙を吐きだすのをちつと見詰めてゐた。二人の間に、紙のやうに眞白な沈黙が流れていつた。

「おお、あいつだッ」

突然叫んだのは、赤羽四郎だつた。

「あいつだ、あいつだ。帆村君あの檻の前を見給へ」

帆村が指された方を見ると、カムリヅルの檻の前に、見るも悍猛な雲をつくやうな黒人が二人、眞白い服を着て何か熱心に話し合つてゐた。

「あれが、南瀉事務所の黒ン坊なのかい」

「さうだよ、確かに見覚えがある。あんな怖ろしい面は、東京中に珍らしいよ」

こつちの會話に關係なく、向うの黒人は赤い顔と白い冠毛をもつ、カムリヅルを指して話を續けてゐたが、その内に急にツルの方を向くと、兩腕を頭上に高く痺擧を起したやうに打振り、ガツ！といふやうな不思議な懸聲と共に大地に跪いて、白服の汚れるのも氣の付かぬ様子で、カムリヅルに禮拜するのだつた。

「おお、あの黒人の一人は、兩手に大きな繻帶をしてゐるぢやないか」と帆村が叫んだ。「なるほど、ひどい怪我をしてゐるね」

そこへ入園者たちが、この思ひがけない奇妙なレビイウを聞き傳へて、ドヤドヤと押寄せてきた。黒人はヤツと氣が付いた風で、今度は大慌てに慌てて、動物園の門の方へ逃げ出した。

帆村は別に追ひ懸ける氣持でもなかつたのに、何故か黒人の身體から出てゐる眼に見えぬ絲に、引かれるやうに、いつの間にか熱心に追跡の仲間に加はつてゐた。だが黒人は大きな股でスタコラ逃げ出したので、一同が門前まで出たときには、待たせてあつたらしい自動車に飛び乗つて、二百メートルも前方に、水色のガソリンの煙をあげながら、遁走する黒人の後姿をチラリと見ただけだつた。

生憎門前には、一臺の自動車も無く、帆村探偵は遂に惜しい獲物を逃がしたことになつたのだつた。振りかへつてみると、一緒に來た筈の赤羽四郎の姿までが、何處にも見當らなかつた。

3 谷中墓地事件

それから一時間ほど経つた後のこと、怪黒人の姿を見失つた帆村探偵は、淋しい谷中の墓地を道灌山の方へ急いでゐた。それは道灌山に白鳥博士の邸宅があるので、一度博士の病狀を見舞ひ、序に事件に對する彼の豫感が當つてゐるかどうかを確かめたい氣もあつたのだつた。

厭になるほど廣い墓地がやつと切れて、そこから初音町寄りへ流れだした草深い小路へ帆村がつと曲つたとき、彼は思ひ懸けない光景にぶつからなければならなかつた。この小路は中央に長々と石臺が敷かれ、左右の道傍には月見草が黄色い蕾を持つてゐた。荒れ果てた教會の庭だの、何とか様といふ華族

の裏畑だつたといふ空地だのが、路から一段高いところに無暗に廣い面積をとつて兩側を塞いでゐた。それは明治三十年の頃と、大して違はない忘れられた露地だつた。しかし、帆村が駭いたのは、そのやうな露地の荒涼たる有様では無かつた。實は其の小路の三町ほど先を、繪に畫いたやうな若い一對の男女が、たいへん睦じさうに歩いてゐる姿を發見したことだつた。二人はお互の身體の半分を、相手の身體の中に填めてゐるやうに、ピタリと寄り添ひ、靜かに歩を搬んでゆくのだつた。

(何者だらう?)

帆村はこの二人に氣付かれて、彼の方をチロリと振りかへられるのが無下につらく感ぜられた。出来るなら此の儘で氣付かれず、曲り角のあるところまで出てゆきたいと思つた。男は長身で銘仙らしい紺の單衣を着てゐた。それから女の方は、淡い藤色の細らしい薄物を着、鮮かな緋色の帯を締めてゐた。その裡に、どうした弾みだつたか、背の高い男の方が立止つて、急に苦しみ始めた。女は吃驚してゐるらしく、仆れようとする男の身體を懸命に支へてゐたのであるが、男は一向お構ひなしに、盛んに咽喉のあたりを掻き撚り、揚句の果は兩手で頭を抱へ込むやうにして、ドツと道傍の草叢に轉がつた。

「呀ッ、あぶない！」

駭きのあまり、帆村は遠方から、たうとう聲を懸けてしまつた。それに氣のついたらしい若い女は、ハツと帆村の方へ眞正面の顔をむけた。

(オヤッ)

といつたやうな表情が、その女の顔に浮かぶと、彼の女は男を其場に捨てた儘、裾をヒラ／＼と離して逃げ出した。そのときの女の顔を、帆村は何處かで見たりやうな氣がしたことだつたが、思ひ出す違もなくその怪しい女の跡を追ひ懸けた。

しかし帆村の足は、仆れた男の前で一度立停らないわけに行かなかつた。

「おお、白鳥博士だッ」

草叢の中に仆れてゐるのは、疑ひもなく白鳥博士だつた。博士は酒に酔つたやうな赭い顔をしてゐた。そして息づかひが非常に荒くそして不規則だつた。痙攣する臉、ぼかんと開いた口、どうやら博士は生きてゐるらしい。この國齋學者の應急手當が先か、怪しい女を追ふのが先か、帆村はどつちとも決し兼ねて其の場に立ち竦んだ。

だが遂に、彼は自分の職業意識に侮蔑の言葉を吐きながら、若い女の後を追ふことにした。まだ息のある博士の耳に口をつけると、

「白鳥さん、今直ぐ介抱に歸つて來ますから、それまでしつかりしてなくちやいけませんよ」と叫んだ

しかし博士はまるで氣がつかないやうであつた。女の跡を追うて辻まで出てみたが、今其の邊へ走り込んだと思ふ女が居ない。帆村はその先のいくつかの露地を、一々覗いてみたが、どの露地も森閑として、ポブラの生垣がいたづらに亭々と聳えてゐた。帆村は諦めかねる心を強ひて諦めて引撥りこむやうにして、白鳥博士の仆れてゐる元の場所へ歸つ

てきたのだつた。

だが其處にも、彼の思ひ設けぬことが起つてゐた。たつた五分かそこいらの短い間のことなのに、白鳥博士の仆れてゐるところには、どこから来たのか五十歳近い、モーニングを着た西洋人のやうに身體の大きい紳士が、地上に踞んで白鳥博士の脈をとつてゐた。

「オーイ君、手を貸して下さい」

紳士は帆村の姿を認めると、差し招いた。

帆村は鳥渡 逡巡しないわけに行かなかつた。しかし自分で名乗る機會が來てゐるとも思はれないので、暫くは黙つて様子を見ようと思つたのだつた。

「さあ、私は肩の方を持ちますから、君は足の方を持つて下さい。町角まで行つて自動車に乗せませう。重病らしいから、ソツと擔いでいつて下さい」

彼の紳士は、訥辯ながら齒切れのいい聲で筋道の通つた指揮をした。辻のところまで白鳥博士を擔いで行くと、運よく一臺の圓タクが流して來たので、それを呼び止めた。

「失禮ですが、貴方は此の病人の住所姓名をご存じなんでしょうか」帆村がつい怵へかねて、連れの紳士に訊いた。

「ええ、知つてますから安心なさい。この人のうちは道灌山なんです」

「近いんですね。ちや僕も一緒にお送りませう」探偵はチャンスを掴んだ。

自動車がゴトンゴトンと動き出すと、帆村は頃合ひを測つて第二の質問を放つた。

「貴方は御親戚の方なんですか」

「いや親類ぢやありません。同じ學校を出た兄弟のやうにしてゐる男なんですよ」

さう云つて彼は懷中から名刺を出すと、帆村に呉れた。其の上には「南瀉吾平——南瀉科學設計事務所 所々主」と書かれてあつた。帆村は、もう少しして呀ツと聲を出すと、その友人赤羽四郎が、太陽燈の設計のことで大いに褒めていつたばかりの噂の主、南瀉吾平先生が、眼の前に腰をかけてゐるのだ。

帆村は餘程思ひきつた質問を、南瀉氏にしようかと思つたが、變なことを聞いて南瀉氏自身や、ひいて白鳥博士の心持を悪くしては、此の後の捜査が困難になる虞れがあると思つたので、もつと外から材料を集めた上でなければ、この化物みたいな科學的天才に尋ねることを見合はせた。

車が白鳥博士邸につくと、書生と女中が飛んで來た。そして南瀉氏の姿に氣がつくと、鄭重な敬禮をした。異變を聞き傳へて、母堂が玄關まで出て來た。

「どうも南瀉さん、濟みませんでした」母堂は面目なげに云つた。「あの病氣が出てからは、貴方様の仰有つて下さつたとほり、外出しちやなりませんねぞと、きつう云うて置いたのに、今日もついで何時の間にやら飛び出して仕舞うて、貴方此のやうな大變なことが……」

「いやお母アさん。あまり厳しく云はれると若い者は氣に障りますから、よく事を分けて自重を望みな

さるがいいです。そして當分、どんなことがあつても、先づ一週間位は、絶對安靜にさせ、外に出さぬことですねア」

「承知いたしました」母堂は大きく肯いた。「あの子の容態は、いつもあれてございますか。電話をかけましたから、直ぐ醫者が参りますが……」

「いつものあれですよ。困つたものですね」南瀉氏は、鳥渡眉を顰めてみせたが、直ぐと思ひ出したやうに「ああ、お母アさん。私は今日は非常に忙しい日なので、いづれお見舞に上るとして、これで失禮を……」

さういふなり彼は其の儘帆村をも促して、門外へ出ていった。帆村は想ひを白鳥邸に残さないわけにゆかなかつたが、飽くまで路傍の人を装ひ、誰にも怪しまれないで、登場人物の様子を観察するために、南瀉氏の意に逆らふことは不利だと思つた。

「ちや途中まで送つて差上げませう」

さういつて呉れる南瀉氏の申出にも、彼は素直に應じて自動車に乗りこんだ。

「今日は飛んだ御迷惑でしたね」南瀉氏は帆村に話しかけた。

「ときに鳥渡お尋ねしますが、さつき君が横町を曲つて白鳥君が仆れてゐる方へ來られるとき、若い婦人に逢ひませんでしたかね」

帆村はあべこべの審問に遭つてギョツとした。この人はそれを訊きたい許りに自分を自動車の中へ引

張りこんだのだつた。なるほどこれは容易ならぬ相手だ。

「逢ひませんでしたでしたが、どうしてそんなことを仰有るのです」

「白鳥君の仆れてゐた傍に、こんなものが落ちてゐたので、婦人の連れがあつたのではないかと考へたんです」

さう云つて彼は帆村の前に、小さいコンパクトを差出した。手にとつて見ると、C・Kといふ頭文字が彫つてあつた。――すると帆村が遠方から見懸けた婦人が、これを落として行つたのかしら。C・K C・K!

そんなことを話してゐる裡に、車は本郷上富士前へ出た。そこは帆村が豫め降りたいと申出て置いた場所なのであつた。

南瀉氏は彼を下ろすと、車を音羽と思はれる方面へ馳せてゆくのであつた。

4 恐ろしき謎

大學病院の廊下を苛々しながら、音のせぬやうに走つてゐる帆村だつた。

河北内科長の部屋に飛び込んでみると、科長は廣い机の上に、堆高く外國雜誌の合本を積みあげて、何やら讀み耽つてゐた。

「先生、いま白鳥博士が、例の病氣で苦しんでゐるところです。直ぐ行つていただけませんか」

「ナニ白鳥君、またやつてゐるのか」

「今日は道傍へ仆れたところに、運よく行き合はせたんです。早速博士邸へ擔ぎこみましたが、意識不明です」

「さうか」科長は頭を斜に傾けて何やら考へてゐたが、「よし行つてみよう」

さう云つて、読みかけの頁に、赤鉛筆を挿んで、パタリと閉ぢた。

「それはいいが、うちの看護婦のところへ、いま電報が來てゐるので、早く渡してやらなきやならないが、あいつまだ歸つて來ない。弱つたな」

「ああ、この電報です」帆村は無意識にその宛名を讀んだ。

「カワベ、チエコー」

「おや、どうしたといふのだらう。カワベ、チエコの頭文字はC・Kだぞ。先刻のコンパクトのC・Kと一致してゐるが、これは偶然かしら？」

と帆村は首をひねつた。

「先生、唯今。遅くなりまして……」

そこへ若い女の聲がした。

「……………」

帆村が振返つてみると、それは兼てこの病院で見覚えのある美しい看護婦だつた。それと同時に、も

つと外で見掛けたやうな顔だつた。

「川邊さん、電報が來てるよ」科長が帆村の手の方を指した。

「まア電報ですつて！」

看護婦は、帆村の手から電報を貰ふと、急ぎ足で室外へ出て行つた。

「先生、あの川邊千枝子といふ看護婦と白鳥博士との關係は、どうなんです」

「たうとう嗅ぎついたね。これは君の關係すべき問題ぢやないよ。あの二人は潜伏性戀愛病患者なんだ」

科長は「戀人同志」といふところを醫學者らしい言葉をつかつたのだつた。成程さうなると、谷中で

白鳥博士と歩いてゐた若い女といふのが川邊千枝子だとすると謎はとける。C・Kの頭文字のあるコンパクトを落したことも、又いま看護婦姿の彼女を見たときに病院外の何處かで見つたやうな女だと思つた

ことも共に解けて別に不思議ではなくなるのだ。しかしこれで果して百パーセント不思議ではなくなつたであらうか？

そのとき扉がコツコツと、稍々氣ぜはしくノックされた。

「應！」と科長が答へると、扉がパツと開いて、千枝子が蒼い顔をして駆けこんできた。

「まあ先生、私どうしませう。父が危篤なんでごさいますつて」

「なに、貴女のお父さまが……」科長は同情のある視線を送つて云つた。「それは氣の毒だねえ。前から

悪かつたのかね」

「いゝえ」と看護婦はつよく首を左右にふつた。「とても丈夫なんです。二三日前も、今西瓜の世話で一日中畑に詰めて働いてみると、自分で手紙をくれたんです。それが急に病氣で危篤になるなんて、信じられせんわ。でも、いく度読みかへしたつて宛名は自分なんです。ああお父さま、お父さま」

「そりや實に氣の毒だ」科長は立上り千枝子の肩を軽く撫でながら云つた。「なにを置いても、すぐに歸省り給へな」

「はア有難うございます。では先生、これから行つて参ります」

「あのウ、もし……」帆村がこのとき横合から不意に聲をかけた。「貴女はどこまでお歸國になるんですか？」

「……………」

千枝子は何とも答へず、少し頭を下げたきり、動かない。どうやら帆村を餘程警戒してゐるやうに思はれるのだつた。

「貴女、先刻コンパクトを落しましたネ」

帆村はもう一つの、とつて置きのことを云つた。

「あッ——」千枝子はハツと狼狽した。

「だが僕が拾つたものではありませんよ。拾つたのは別のひとです」

「誰方なんでしょう？」千枝子は觀念の臍をきめたものと見えた。

「それは南瀉吾平といふひとです」

「南瀉吾平——ああ、あの人に拾はれたんですか」

看護婦は悲痛な面持を、ちつと平面に向けた。それは能面に似た美しい容貌だつた。しかし或る種の秘密に浸透されてゐる顔だつた。

「川邊。では早く行つて來給へ」

河北科長は、彼女を庇ふやうに、聲を懸けた。川邊千枝子は、救はれたやうにホツとして、スルリと室を抜け出していつた。

それから三十分ほど経つた後のことだつた。河北科長と帆村探偵とは、重態の白鳥博士の枕頭に見出された。帆村はこのとき始めて、探偵としての名乗りを家人たちに對して擧げたのだつた。

河北科長は、人事不省に陥つてゐる白鳥博士の身體について、綿密な診斷を試みた。その結果は面白くない方らしかつた。科長のチョイト傾けた首が、なか／＼元へ戻らないところを見ても判ることだつた。

「オイ、帆村君」科長は帆村だけに聞えるやうな低い聲で云つた。「どうやらこれは新しい病氣のやうだ」

「ほほう、先生もさうお考へですか」

「うん——今までの文献をすっかり引繰りかへして調べてみたんだが、駄目だった、こんな顕著な容態でありながら病氣としての記録がすこしも無いんだ」

「すると先生が仰有つたやうに、二十四時間のちになつても、解決の見込みが無いといふわけですね」

「どうも遺憾ながら、君の云ふとおりだ」
科長は斷然として聲を呑んだ。白鳥博士の頭は、ボイラーのやうに眞赤に熱し、苦しうな呻り聲をあげた。

「先生」帆村が今度は河北科長を呼んだ。「さうなると僕の方の話を申し上げますが、實は少し許り見當をつけてみたんです」

「ナニ君は見當をつけたといふのかい。ほほう面白い。それはどういふのだい」

「僕の考へとしては、先生が笑はれることでせうが、これを病氣と見ずに、犯罪だと睨んでみたんです。先生は唯今も、これは病氣としては始めて醫學史上に現れた病氣だ」と仰有つたやうですが、始めて現れた病氣——といふ點は、僕の假定の犯罪論とよく一致する様です。つまり病氣ではないから、今迄の醫學史上に記録がなかつたのです」

「さう簡単に肯けないが」と科長はちよつと首をひねつて「これを犯罪事件とすると、君は何か確證を握つてゐるのかい」

「確證とまでは云ひ切りませんが」と帆村は頭腦のなかには今までに蒐めた雜然たる？をずつと眺め

まはしてゐるやうだつた。「とにかく色々材料はありますよ」

「ほほう——」

「ことによると、先生」帆村はそこでグツと聲に力を入れた。

「この犯罪事件は、今日までに僕の取扱つた事件のうちで、一番恐ろしいものかも知れません。イヤ、世界犯罪史上に最も重大なる一頁を加へることになるかも知れないのです」

さう云ひ放つた帆村の顔は、いつもよりは一段も二段も青褪めてみえた。噂の高い青年探偵帆村莊六が、それほどまでに恐ろしがつてゐる犯罪とはどんなものだらうか？

また、其の犯人といふのは、何者なのであるか？

自身が呪ふべき被害者となつてゐるのであるとも知つてか知らでか、白鳥博士は二人に空しく見守られたまま、混沌として人事不省を續けてゐるのだつた。

5 白鳥博士の奇病？

工學界の權威、白鳥博士の奇病について、大學病院の内科長河北博士は、まだ醫學史上にもない病患と歎じた。これに反して、青年探偵帆村莊六は大膽にも、此の奇病を指して、犯罪事件——それも前代未聞の恐ろしい事件のやうな氣がすると思見を述べた。

さてかうなると、白鳥博士の病氣は、博士一人の問題ではなく、後から後へと罹病者を出す科學者界

にとつても大問題だし、世界中の醫學者と犯罪學者の注目するものとなつた。これから、どうなるのだから。

病床に人事不省で呻吟する白鳥博士を圍んで、河北内科長と帆村探偵とは、ちつと睨み合つてゐた。

「犯罪事件だと君は云ふのだね」河北内科長は呻るやうに云つた。

「さうとしか、僕には考へる餘地がないのです」と帆村は青い顔をして云つた。

「犯罪事件とする、一體誰が怪しいのだ。そいつはどんなことをやつてゐるのだ。早く聞かせ給へ」

科長は思はず膝を前に進めて、帆村の答を俟つた。

「それはまだうっかり云へないのです。もつと確實な證據を握らにやなりません」

そのとき病床で悶えてゐた白鳥博士が、

「おお、これは……」

と夢から醒めたやうに兩眼をパツチリ開き、あたりを物珍らしさうにキヨロキヨロと見廻したのだつた。

「やあ氣がついたね。白鳥君」

科長の聲に、博士は愕然と顔をあげた。

「ああ、貴方は……」

そのときの白鳥博士の顔は、實に記憶すべき有様を呈してゐた。その顔といへば、炎天下に十里の路

を歩いてきた人のやうに逆も疲れきつてゐたが、それとまるで別に、博士の瞳だけは、今が今まで意識不明の病人だつたとはどうしても見えない程、正常な光を放つてゐたのだつた。

内科長が調査して薦める一杯の藥湯に、白鳥博士は漸く元氣をとりかへしてきたやうだつた。

帆村といふ探偵が、いつの間にか枕頭に控へてゐたことも、河北科長の執成で、案じたほどのことも

無く、諒解して貰ふことができたのだつた。

「そこで甚だ無駄ですが、白鳥さんにお伺ひいたします」と帆村は恐る恐る博士の顔色を心配しながら口を切つた。「ご病氣のお苦しみは、どんな風でしたか」

「さうですね」博士は疲れきつた眉を八字によせたが、素直にポツ／＼應へた。「實は病中の苦しみといふのが私にハッキリと判らないのです。發病の直前には腦貧血のやうに、何かいやに心細い氣持になる

んです。そして物音が急にずつと遠方へ行つてしまふんです。(あ、起るな)と氣がつくと、次の瞬間に

は吸ひこまれるやうに、何もかも判らなくなつてしまふのです。そして次に氣がついたときには、全く

豫期しない皆さんの御介抱をうけてゐる。何といひますか、頭痛がしていやいな氣持です。六ヶ敷い數

學式の入つた厚い本を二冊も三冊も讀んだあのやうな、疲れ切つた氣持です」

博士はポツ／＼語ると、乾いた唇をピク／＼と痙攣させた。河北科長が小さい氷片を摘んでその

口に入れてやつた。

「すると僕達が側から拜見して大變苦しんでいらつしやると思つてゐる間のことは、博士御自身何の御

髓

記憶もないのですね」

「さうなんです。悪夢を一つ見ては又次に一つ見てみるといつた氣持です。科學者の悪夢です。まるで繚れ糸を丹念にほぐさうと努力してゐるやうな苦しみです」

「すると博士は悪夢の内容について或る程度まで御記憶があるのですね」

「どんな夢だつたか——といふ質問ですか」

「さうです。今日のお苦しみの裡に、どんなことを御覽になつたか、お話し下さるわけには参りませんでせうか」

帆村は、優しい言葉の裡に、溢れるやうな熱意を籠めて云つた。

「さあ其の夢ですがねエ——」博士はすこしづつではあるが眼に見えて元氣を増しながら「その夢といふのが、お話ししても判るかどうか、極めて専門的内容のものなんですがね」

「えッ、専門的な夢！」帆村は緊張のあまり、サツと青褪めた。「それだ、それだッ」

彼は呻るやうに、小さい聲で叫んだ。

「丁度いま目が醒める前まで見てゐたのは、なんでも液體水素を入れた容器がありましたネ。それから少しづつ、液體を厚い硝子管の中へ、ポツリ／＼と垂らしこんでゐるところなんです」

「ははア、液體水素ですか。それは零下二百度を越える極寒の液體ですね」

「さうです」と博士は頭を動かした。「その液體水素を、細い硝子管を通して、下に垂らすのだから、な

かなかうまくゆかないで苦しんでゐるところを夢に見てゐるんです。實際、そんなに冷いものだから、例へば手などに懸ると、そのところが急にひどく熱を奪はれて霜腫の重いのおこすことがある。それを心配しながら、まるでお飯事のやうなことをやつてゐるのです」

「液體水素といふと、液體空氣と同じやうなものです」

「いや、液體水素の方が、更に冷いのです。製造の技術から云つても、ずっと六ヶ敷いしその取扱ひ方も一段と面倒なんです」

これでみると、白鳥博士は、この世の中で一番冷いものを取扱つてゐる夢を見てゐたといふことが判つた。われ／＼は、六ヶ敷い宿題のことなどを考へながら寝につくと、その宿題を夢にみることもある。しかしこの場合は、夜に限るのだが、博士の場合は、白晝夢を見てこのハッキリした問題を考へたといふのであるから、これをわれ／＼の簡単な夢とは一緒に出来ない。この點に、或る一つの謎が隠されてゐるのではないかと帆村探偵は疑つた。これはもう少し探求の必要がある！

「この前の御發作のときには、また何か夢を御覽になつたでせうか」帆村は重大なる質問を打込んだ。

「さうですね」考へてゐた博士は、科長の與へた葡萄酒に刺戟されたか、それとも何か外のことと興奮してゐるのか稍々紅潮してきた。

「さうですね、さう云はれると思ひ出しましたが、この前は何でも、液體水素を硝子管の中へ入れ、それに火を近づけて爆発させるやうな考へをもつて、どうしてそれを實現すればいいか、と苦心してゐる

夢を見ましたよ」

「ほう」帆村は思はず膝を乗り出して、「面白いお話です。——もうその前はありませんか」

「さうさう。何しろ明瞭な夢であるので、思ひ出しましたが、始め見た夢といふのは、何か一生懸命に複雑なりンデの空気液化機の設計のやうなものを考へてゐるところだつたんです」

「ああ、それも液體水素に關係のあることなんですね」

帆村は呆れるやうに云つた。液化機といへば、液體水素とか液體空氣とかを製造する器械ではないか。白鳥博士の見た夢には、どれにもこれにも、液體水素に關係のあるものばかりだつた。これは果して偶然の出来ごとなのであらうか。

「博士はいつもそんな問題に頭腦を使つていらつしやるんですか」

「さうですね。どういふものか、液體水素に因んだ夢ばかり見てゐるやうですね。だが私としては、なるほど液體水素については可也研究をしたことがありますけれども、それはもう、ずつと、ずつと以前のことです。此頃は全くそんなものに關心を持つてゐないのです」

「しかしその夢のお話を綜合してみますと、なんのことはなく、貴方は液體水素に取憑かれてゐるとしか思はれませんね」

「これは一體、どうしたといふのでせう」

博士も頭を振つた。

「最後に一つお訊きたいことがあります」帆村はポケットの煙草を探り探り云つた。「この液體水素の爆發實驗を夢の中で考へていらつしやるやうですが、それは實際出来ることなんですか」

帆村は煙草に火を點けながら、この重要な質問への應答を俟つた。

「それは出来ない相談でもありません。液體水素を小さい容器に填めてこれに火を近づけると、液體水素は急激に水素瓦斯に氣化するため、非常に強力な爆藥となるだらうとは前に考へたこともあるのですが、現在の私にはそんなことを研究するよりも外にもつと重大な研究問題があるので、爆藥の方は手をつけなかつたんです」

さう云つた白鳥博士の顔には、アリ／＼と疲勞が浮びてた。

「いや有難う存じました。大變お疲れのところを御無理させまして……」

帆村は心から此の眞面目な學者に感謝したのだつた。彼はこの會話によつて、事件の輪廓を更にハッキリさせることが出来たと思つた。

「白鳥君」さう云つて病床の博士を呼んだのは、最前から黙々として、ただ二人の問答を聞いてゐた河北内科長だつた。

「……………」

博士は努めて、顔を科長の方へ曲げた。

「この帆村君はねえ、君」と科長は探偵の方を殊更指しながら云つた。「お手のものの犯罪論でもつて、

押してゆかうといふ意見なんだよ。つまり、かうやつて君が憔悴してゐるのは病氣のせゐではない、何者か恐ろしい犯人が居て、君を故意に苦しめてゐるのだ。——いや、彼奴は君の脳髓を盗んで、君を苦しめてゐるのだといふんだ。それで帆村君は、どこかで君の脳髓を盗んでゐる奴を探し出さうといつてゐるのだよ。はッはッはッ

「脳髓を盗む」といふ文句が自分でも餘程可笑しかつたと見えて、科長は引續きニヤニヤと微笑を漂はしてゐた。

6 音羽臺の怪館

帆村探偵は、やつと搜索の端緒を掴んだやうに思つた。

白鳥博士が人事不省に陥る毎に、必ず夢を見てゐることが第一不思議だ。次に、その夢といふのが、いつも決つて液體水素に關係のあることばかり、そしてこの液體水素のことは、博士が覺醒してゐるときに正しい氣持からいふと、もう別に興味もなにも持つてゐないことなのだ。

帆村はもう一つ、南瀉科學設計事務所の所主吾平氏について、もうすこし認識を高める必要があると思つた。別にどこがハッキリ怪しいといふ譯ではなかつたが、兎に角、この科學者病の大流行の時機に於てうまく當つたとは云へ、あまりに多くの多種多様な設計を引受けて、一氣呵成に素晴らしい設計

を纏めあげてしまふ。そこには何やら、天才といふよりも、超人的といつた方がいゝやうなものが感ぜられる。その上に怪奇的なものまでがチラ／＼閃いてゐるやうに考へられてくるのだつた。それに又、得體の知れないあの黒人どもは、一體何のために養つてゐるのであるか？

「おい、須永」帆村は彼の愛してゐる部下を呼んだ。

「なんですか」顯微鏡に嚙りついてゐた血色のいゝ若者が顔をあげた。

「これから音羽臺へ偵察にゆく。一緒に行くんだ。仕度をして呉れ」

「O・K」

帆村はこの際、どうしても南瀉吾平氏に會つて、話を聞く必要があると考へた。須永は壁の中の隠し戸棚の中から、二人分の商賣道具をとりだした。ピストルが大小二挺、ナイフ、簡易合鍵、指紋器、ロップ、小型煙火、擬指、救急薬、小型望遠鏡などと必要なものが、器用に集つてゐた。それを取りあげると、二人は物慣れたスピードで、手取り早く身體の諸々方々へ收ひこんだ。——

纏て二人を乗せたクーペは、スル／＼と路面を滑つて、音羽臺へ迫つて行つた。

さてこの南瀉設計事務所は、陸軍火薬庫の廣々とした草原の隣りに連る音羽臺の上にあつた。印度風の城塞に似た見るからに奇怪なる建築物だつた。まるで天に向つて呪文を稱へてゐるやうな感じのするビルディングだつた。

二人は暫時遠方から、この薄氣味わるい建物を注視してゐた。城のやうなこの事務所は啞のやうに黙

赤
りかへつてゐた。忍んでゆくに手頃な窓もなく、どうしてもこれは計略を用ゐて入りこまねばならぬ。

男 線 外
「オイ須永」と帆村は助手をよんだ。「僕はこれから單身出かけて、一面識あるところを利用して、所主の南瀉氏に會つてくる」

「僕が行きませう」

須永は早くも危険を見てとつて、身代りに立たうと申出た。しかし帆村は言ふことを聞かない。咳拂ひ一つ残すと、事務所の正門へノコノコ歩いていつた。須永は物蔭から、眼を離さずその後姿を見つめてゐた。イザといふときに役立つやう、右手はポケットの中のピストルに懸つてゐた。

近づくに従つて、この事務所の建物がいよいよ嚴重な警戒の下におかれてあることが判つた。門があり、扉もあつた。しかしベルに續くべき押釦もなければ、扉に指をかけるべき溝もない。

トン、トン、トン。

34
帆村はその鐵扉を叩き鳴らした。しかし誰もこれに應じて出てくるものも無い。聞えないのかと思つて、いろ／＼と叩き方を變へてみたが一向利き目がない。この巨大なる建物には人つ子一人棲んでゐないのでないかと疑ひたくなるほど、森閑としてゐた。全く城廓のやうに、人を寄せつけないのが、此の事務所の掟と見えた。そして越えてゆくには、白晝あまりに嚴かな壁體だつた。取りつく鳥がないとは此のことだらう。

ケ、ケ、ケ、ケツ、ケツ。

頭の上で、怪鳥が鳴いた。仰いでみると、建物の天頂にある時計臺のやうなものの上を名も知れぬ鳥がフハ／＼舞つてゐた。帆村は斷念してスゴ／＼引返していつた。

「先生、駄目ですか」須永がホツと息をつきながら、勞はるやうに云つた。

「この調子ぢや駄目だね。だが此の嚴重な警戒は何を意味するのだ。古い屋敷を買つたといつても、大した秘密のない者ならば、かうは嚴重にする必要はない筈だ。よオし、かうなれば、どうしても此の化物屋敷を覗かなくてどうするものか」

帆村は背後を振り返りつゝ、決心の程を示した。

「そこで第二の計畫だ」

二人は公衆電話の函の中に入つていつた。南瀉事務所に電話のあることは、兼ねて調べがついてゐた。これを利用して、南瀉吾牛を引張り出さうといふのである。幸ひに電話はうまく懸つた。

「もしもし、南瀉さんは、おいでですか」

「アナタ、タレ、アリマシユカ？」

怪しい日本語を喋る男が出てきた。

「僕は、先日南瀉さんから、御名刺を頂戴した者なのですが、佐藤といふ者です」

「サトウ？ サトウ、タレ、アリマシユカ」

「佐藤と仰有れば分りますよ」

佐藤といふ名の人は、世間に最も数が多い。佐藤といつておけば、どんな交際の狭い人でも、二三人の佐藤といふ知合がある筈である。そこを利用した。そいつは成功した。

「ヨージ、ナニ、アリマシユカ」

どこまで行つても、アリマシユカだつた。

「お願いしたい設計があるので、鳥渡そつちへ、これから伺ひたいのですが」

「ソレハ、コチラカラ、オウカガヒ、イタシマシユ。アナタ、オウチ、ドコ、アリマシユカ」

これでは相撲のとりやうが無かつた。聞きしに勝る警戒の嚴重な事務所だつた。帆村は氣分を腐らせる代りに、反動的に元氣をとりかへして云つた。

「須永、第二の方法も駄目だつた。残るは何んな攻撃法だ」

「夜を待ちませう」

「残念だが、ひと先づ出直すでしょう」

二人が公衆電話から出ようとする途端、須永が低く、

「呀ッ」

と叫ぶと、帆村の腕をグツと引いた。

「ごらんなさい。あすこに、黒人が居ますよ」

須永の指す方を見た帆村は、

「おお、——」

と呻つて、化石のやうに突立つた。

それは偶然の收獲だつた。事務所とは丁度反對の方向の小日向臺町寄りの細道に、一軒の薬局があつた。その店内から二人の黒人が立現れるところだつた。見ると其の内一人は意外にもいつか動物園でカムリヅルを禮拜してゐた黒ン坊だつた。それは、あの日にも見たとほり、両手に一杯繙帯をしてゐるところからそれと判つたのだつた。

幸ひに黒人は、何事も氣付かない様子だつた。何だか二人はベチャクチャ喋るのに夢中になつてゐる。

「お前は奴等を追跡するんだ」帆村は須永の身體を肘で突くと低聲で命令した。「僕は黒ン坊の出で来た薬局を調べて、直ぐに追ひつくからナ」

「ようがす、先生」

黒人の姿が横丁に消えるのを待ちかねて、二人は電話函から脱兎のやうに飛び出した。帆村は何喰はぬ顔をして薬局の日蔽ひをくぐると、要領よく主人に、いまの黒人達が何を買つていつたのかを尋ねた。ところが其の答は、俄然帆村の心を打つ重大なるものだつた。

「あの黒い人は、デスネ」と藥劑師は語る。「いつも霜焼の妙薬といふのを買ひにくるのです。盗るのが

ちよつと面倒なものですから、私がいつもやつてあげるのですよ」

「霜焼の薬といふお話ですが、此の暑い最中に、なにがなんでも、霜焼はをかしいですね」

「いや、ところが本當に霜焼なんです。それもひどい霜焼なんです。私もこの暑いのに變だナアと思つて、幾度も訊いてみましたが、どうしてさうなつたか云はないんです」

薬局の主人にも、一向に黒人の霜焼が腑に落ちぬらしい。

帆村は、繻帯を手に捲いてゐる黒人は、大怪我をしてゐるのだとばかり考へてゐた。しかし今聞けば、霜腫だといふ。この暑さに霜腫はどうしても可笑しい。

では、どうして霜腫になつたのか？

帆村は、今度の白鳥博士の奇病となにか連絡を見出さうとして、いままでに知り得た全ての材料を、頭腦の中で高速度に掻きまはしたのだつた。

「はてな！」と帆村は思はず聲を出した。(さういへば、白鳥博士が重態に陥ると見るといふ悪夢の中には、必ず液體水素の實驗がある。その液體水素は人間の手足にかかるひどい霜腫を起すといふ。――

ところが怪事務所の黒ン坊は、この暑い時候のなかに、霜腫を拵へてゐる。これは偶然の暗合だらうか？)

帆村は呻つた。

白鳥博士の奇病、それから病氣のときに限つて見る液體水素や液體空氣の夢、霜腫の黒人、その黒人

の居る南瀉事務所、――警戒の嚴重なその事務所、それから科學者が續々斃れてゐる今日一人で大繁昌を極め、六ヶ敷い設計を鶏が卵を生むやうな手輕さで拵へるその人間業とも思はれない不思議さ……これ等のすべての秘密は、黒人の手の霜腫が曝露されたことから、互に關係のあるものだといふことが云へるやうになつた。

一大発見だ！

しかし後にもう一つ、關係が有るのやら無いのやら判らない問題が残つてゐる。それはあの川邊千枝子といふ看護婦のこと。川邊千枝子のことは南瀉氏に自動車の中で聞かれたことがあつたが、やつぱりこの事件に關係があるのか。あるとしたら彼女の役割は、どんなことだらうか。そこへ須永の方が、あべこべに、薬局の前で懊惱してゐる帆村を探しに來た。

「どうした、須永」

「黒ン坊は入つてしまひました。あの扉の前に立つて、隠し電鈴らしいものを探すと、暗號を内部へ送つてゐたやうです。するとギイツと入口が開きましたが、なかはエレベーターのやうに小さな室があるつきりです。扉は二人を吸ひこむと直ぐにパタリと下りる。それでお終ひです。符號を盗んでやらうと思つたんですが、駄目でした」

「さうか。では一先づ引上げることとしよう」

「残念ですね」

そのとき二人の頭上で、ケ、ケ、ケツと、いやな怪鳥の鳴聲がした。帆村は顔をあげて、鳥の飛び交ふ姿を見てゐたが、

「うん、こりやいゝぞ！ こりやいゝ考へだ。おい須永、素晴らしいことを思ひついた」

「先生、どんなことですか」
「道々話さう。あの馬鹿鳥が福の神とは誰も気がつかないだらう」
帆村は急に目立つて、元氣になつた。

7 氣球偵察隊

帆村の其の素晴らしい思ひつきの準備が出来上つたのは、それから二日後のことだつた。彼は河北内科長に電話した。

「先生、帆村です」

「やあ、仕度はうまくいつたかね」

「どうやら出来ました。白鳥さんの様子はどうですか」

「今日はまだ発作が起らない。今夜はきつとやるだらうと思ふよ」

「ではどうかあの器械でお知らせ下さい」

「よし承知した。白鳥君もどうやら君の説に耳を傾けてきたよ。液體水素を使ふ爆薬の實驗の夢はいよ

いよ進んでゐるさうだ。大分大きい容器に封入することが出来るやうになつたらしい記憶があるといふことだ。若しこれが事實だとすると恐るべき陰謀が完成することになると心配してゐる」

「さうですか。さうなると一日も早く事件の解決をつけなけりやなりません」

「ところで僕は君の説を裏書きするやうな文献を一つ見出した。これは今から二十年程前のイタリヤ醫事新報に出てゐたことだが、シシリ島にロッシ家といふ家族があつて、二人の姉妹が居た。姉は北イタリーのガルダ湖畔のリバの農家へ嫁ぎ、妹は島へ残つてマルラサの大工の妻となつた。この姉妹は大變仲の善い間柄だつたので、三百五十里も別れ別れに住まねばならぬことになつて共に慟き悲しんだ。ところがマルラサの妹の方が或る日姉を想ふあまり、記念に貰つた姉の衣裳に着かへ、頭飾も姉のものをつけ、さてどんな姿になつたらうかと姿鏡の前に立つた。ところがまるで姉が鏡の向うに立つてゐるとしか考へられない。そのとき不思議な聲に呼びかけられたやうな氣がした。姉が（街に買ひ物に出たところ美しいレースを賣つてゐる店があつたので、これを妹のところへ送つてやらう）と云つてゐる聲が聞えた。これは氣のせるだと思つてゐたところ、程經て姉から同じ文句の手紙と紛ふかたなきレースとが届いた。これがきつかけとなり、姉と妹とは三百五十里距つて、互に相手の心が讀めるやうになつた。不思議な心靈現象であるが、これを當時の學士院長カピタニ氏が解説して、マクスウェルの電波説に隨ふべきものだと言つてゐる。つまり君が云つてゐる、人間の頭腦の働

盜まれば腦髓

きを、或る人から他の人へ吸ひ取ることが出来るといふ説とよく似てゐるぢやないか」

「なるほど面白いですね」と帆村は嬉しそうに云つた。「それから川邊千枝子は、まだ歸つて来ないんですか」

「うん、まだ歸つて来ない。今日あたり何か云つてくるだらう」

「ああ、さうですか。ではこれで先生」

「ちや、しつかりやり給へ」

そこで電話は切れた。

帆村の説といふのは？

帆村は科學者の間に頻々と流行する病氣を犯罪による被害と見た。それは科學者中の著名なる者ばかりに起る病氣であり、記録にも無い同じやうな不思議な症状を呈する點から思ひついた。そこへ南瀉吾平氏の設計事務所までしつ解決してゆく設計があまりに非凡で早く出来るところを怪んだ。所員は氏の外、無智に近い黒人だけであることが一層帆村の頭腦をひねらせるに至つた。彼は大膽なる假定を置いた。それは南瀉氏が、あの著名なる科學者の頭腦を無断で盗んでゐるのではあるまいかと。

腦髓を盗むといふことはあまりに突飛な話であるけれど、この大膽な假定を置くと、不思議にもいろいろの疑問が氷解してゆくのだつた。南瀉氏はその盗んだ腦髓の力を借りていろいろな科學上の問題を解き、その結果を比較的やすい金で賣つてゐるのだ。帆村の友人赤羽四郎が、太陽燈の設計を頼んで、南瀉吾平から非常に立派な設計書を受取り、こんな優秀なものは白鳥博士を除いては出来る筈がないの

だと歎息したが、これも道理で、これは盗んだ白鳥博士の腦髓に鞭打つて拵へ上げさせたものだと思へると、別に不思議でなくなるのだつた。

さうだとすると、一體どうして、人間の腦髓が盗めるのか？

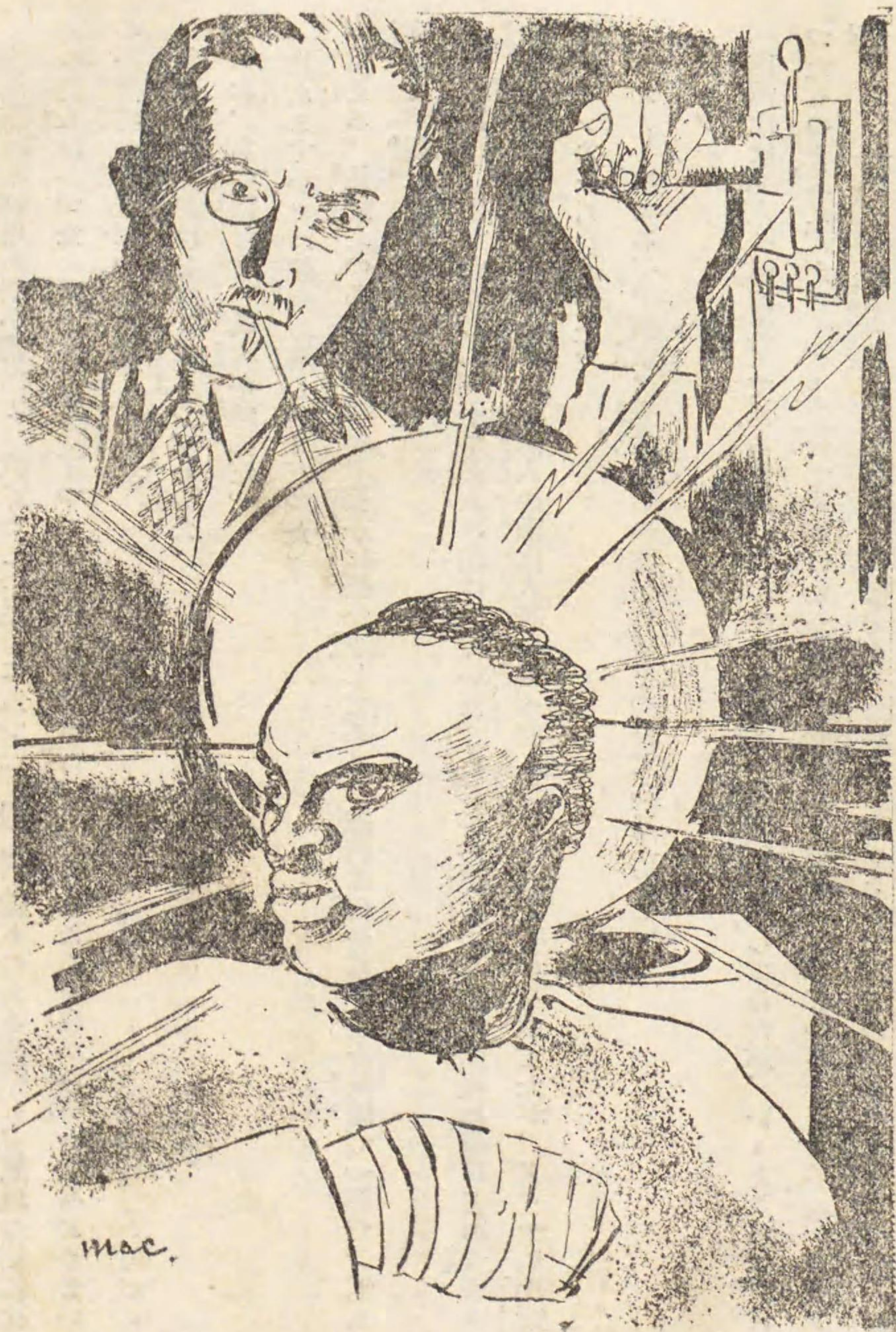
それは理學畑を出た帆村莊六にもハッキリ判つてゐないことだつた。だが彼は想像した、人間の頭腦は電波を出すのである。まア特殊な放送局のやうなものだ。白鳥博士などの頭腦から出る電波を、別な場所に特殊な受信機でもあつて、その受信機が非常に強力な性能をもつて居り、博士の頭から出る電波を悉く吸取るものとしたらどうだらう。それが出来たとしたら博士の腦髓の實質は、博士の頭蓋骨の中に收つてゐるにしろ、全然働きは他へ吸ひとられるために、其のときの博士自身は無感覺に陥り「生ける屍」となると考へられるではないか。それがあの不思議な病狀なのだ。

この手で、誰も彼も、やられてゐるのだ。

だが實際、どんな方法でやつてゐるのか、それを見付け出すことは帆村の任務であつた。彼等科學者は國寶に等しい人々である。悪人の自由を委ねておくことは、國防上からいつても、まことに由々しい大事である。帆村はこの事件の解決に、自分の身を抛つても努力しなければならぬと決心した。

そこで彼の計畫がいよいよ實行に移されたのだつた。

其の夜、音羽の護國寺の眞暗な境内へ、一臺の幌を被つたトラックが、スル／＼と入つて行つた。兼ねて手筈が整つてゐるものと見え、四五人のものがバラ／＼と現れると、そこで協力の仕事が始まつた



赤 外 線 男

三十分経ち、一時間過ぎてゆくにつれ、彼等のとりまく中心に、なにやらブク／＼した眞黒いものが、圓味を帯びた頭をだん／＼と高めていった。そしてたうとう宙にフハリと浮び上つたところを見ると、それはちよつとした大ききの氣球だつた。あの廣告氣球といふのがあるが、あれを四倍にした程のものだつた。

懸てこの氣球の下には、籠が釣され、それに二人の男が乗りこむと、ふら／＼と揺れながら中天へ昇騰して行つた。なにしろ闇の夜のこととて、東京市民の誰も、頭上を流れてゆくこのユーモアたつぷりの乗物に氣のつく者が無かつた程だつた。

この怪しげなる氣球に乗組んでゐる者は、讀者も既にお察しのやうに、帆村探偵と助手の須永の二人だつた。

氣球は折からのやや強い風に吹き流され、巧妙にも東南の方へフ／＼と飛んで行つた。双眼鏡を持つて遠方の明り窓を覗んでゐる船長格が帆村探偵。帆を引いたり、バラストを氣にしてゐるのが須永助手だつた。

「うまいぞ須永。もう其の邊ですこしづつ下へ降りてゆかう」

「ちや瓦斯を抜いてゆきますよ」

「風が生憎ひどくなつたね」

「どこかへ氣球をぶつつけると、爆發するてせうね」

南瀉設計事務所の廣い構内は、直ぐその足許にあつた。嚴しい締りのある高壁も、氣球の前にはなんの力もなかつた。天上から舞ひ下つて、南瀉が秘密に行つてゐるところを窓から覗いてみようといふのが帆村の計畫だつた。

氣球は大體思ひどほりに下つていつた。

「おお、あの窓だッ」帆村が叫んだ。

「見えますかッ」須永も嬉しさうだつた。

「見える。見覚えのある黒ン坊が、椅子に腰を下してゐる。室内は何やら複雑な装置で一杯だ。ああ、南瀉氏が現れた」

「南瀉氏は、ゆつたりした調子で黒人の前に近付いた。それから黒人の身體の前後に疊ほどの大きさの金屬板を二枚立てた。それから黒人の頭に火箸を並べた冠のやうなものを立てたが、どうやら小型の特殊アンテナらしかつた。

「いよ／＼始まるぞ。須永、先生からの通信に氣をつけてゐるんだぜ」

「はいッ」

南瀉氏は黒人の傍に立ててある眞黒い函のやうな器械の目盛板を廻してゐたが、いゝところは見付かつたものと見え、(エッ!)と氣合でもかけたらしい姿勢となり、搗粉木ほどのスキツチの把をグツと引くと、ピカ／＼と大火花が出て黒人の身體をとりまいた。はッとしたほどの凄慘な光景だつた。

二三分すると、火花は止められた。南瀉氏は黒人の身體を包む金屬板をガチャリと作した。椅子に腰を下ろしてゐた黒人は、靜かに立上つた。その眼は人形のやうに前方に釘づけられてゐた。

「先生、通信が來ましたよ」

「さうか、どうしたつて」

「河北さんの聲です。白鳥博士が人事不省に陥られたさうです」

「よオし。いよ／＼思つたとほりだ」

帆村は双眼鏡を、握み壞さんばかりに握りしめて、尙も室内の光景を注視してゐた。

黒人はヒヨロ／＼と立上り、室内を歩きはじめた。室の中央に臺があつてその上に煙火の尺玉位の球があつた。その傍へ黒人は近づいて耳をあてるとしばし何事かの物音を聞いてゐるやうだつたが、次に又動いて大きな液體空氣のコックをひねり、硝子管を通じて、水色の液體を其の球の中に送りこんでやるのだつた。するとあの大きい球は、爆烈彈なのだ。もしあのやうな大きい球が爆發したら、と考へると、帆村は思はず脊筋が寒くなつた。

これで南瀉吾平の秘密は判つた。彼は無智なる黒ン坊の頭腦が自由になりやすいのに眼をつけて、あの装置で白鳥博士などの腦髓の働きを、黒人の腦髓へ吸ひとつてゐたのだつた。これを日本人などの、相當文化程度の高い腦髓を、受信機代りに使ふといふことになる、どうしても自由にゆきかねるのだ。それは睡眠術をかけるにしたつて同じことで、インテリには中々懸らないが、子供には懼りやすいのと

同じである。

白鳥博士の頭脳から出す電波は、すべて此の黒ン坊の形のわろい受信機の中へ吸ひとられてゐたのだ。ああ、何といふ恐ろしい實驗をする男だらう！

しかし又、何といふ素晴らしい發明だらうか！ われ／＼は、多少この種のことを夢想したことはあつたが、このやうに美事に實行してみせるものが出て來ようとは、全く考へたことがなかつた。考へ得られなかつたのだ。南瀉吾平の頭脳は、悪人ながら、實に驚歎に値するものだつた。

「ああ、これはいけない」

突然須永の聲がした。

「どうした」

「風で緊留索が切れましたナ」

「ナニ綱が切れたつて！」

帆村が問ひかへす間もあらばこそ、氣球は風に煽られて、ヤツと持上げられた。

「呀ッ、重錘のバラストが切れて落ちます。氣球は騰る一方です」

「そりや大變だ。すこし瓦斯を出せッ」

喧嘩のやうに二人が叫び合つてゐる裡に氣球はドン／＼吹き流されて、上野の森の近くまで來た。

そのときだつた。

實に其の時だつた。思ひ設けぬ一大事變が発生した。

「パーッ」

と目が眩むほどの大火焰が、背後に光つた。すると押被せるやうに、ひどい風が二人の頬を打つた。

と思ふ間もなく、

「ひゅーン。ぱり／＼ッ」

氣球は一瀉千里の勢ひで、まるで挽ぎとられるかのやうに、横なぐりに吹きとばされた。

「呀ッ」

ドドドーン。萬雷が崩れ落ちるやうな響。

チラリと見たのは、更に火勢を加へたらしい大爆發の現場。

二人は籠の中に打重つた儘、降下索を引く力もなく、聲を出す氣力さへもなく、大爆發の空氣の波濤

に叩きのめされて氣息奄々、流れゆく氣球の内部に身を托してゐた。

8 結 末

幸運な帆村探偵と須永とが、千葉縣下に降下して早速東京へ引返して來たときには、もう夜が白々と明け放れてゐる頃だつた。道灌山の白鳥博士邸にかけつけてみると、其處には博士も元氣な姿で居たし、河北内科長は眼に涙を浮かべて二人の方に駆けよつてきた。

河北内科長から、あの南瀉設計事務所の大爆発の詳報を聞くことが出来た。あの建物全體は後方もなく吹き飛ばされて、その跡は火口湖のやうに、大きく抉りとられてゐるさうである。附近十町の民家は殆んど被害をうけないものは無いといふ話だつた。

すべては帆村の想像どほりだつたのだ。

爆発の原因は？

それは川邊千枝子だつた。

といふと腑に落ちないかも知れないが、白鳥さんの發病したところへ、川邊千枝子が郷里から歸つて來て駈けつけたのだつた。博士のいたましい病態を見ると、彼女は怵へかねて河北先生の停める違もなく、愛人白鳥博士の胸にとりすがり、聲を限りに名を呼んだのであつた。

千枝子のことを深く想つてゐた博士の頭腦の一部は、その戀しい人の聲に遂に引展されてしまつた。博士の頭腦は、千枝子の聲のために奪ひかへされた。南瀉氏の器械よりも、千枝子と博士の愛の力の方が強かつたのだ。そして彼等二人は最後の勝利を得た。

ここに哀れを止めたのは、白鳥博士の腦髓を吸取つてゐた。黒人だつた彼は忽ち還元して、唯の黒ン坊となつてしまつた。さうなつた彼には、爆発物の危険も何もなかつたのだつた。呀ッといふ間に、あの大きい爆裂球は引火されて、ここに前代未聞の大爆発が起つたのだつた。無論、南瀉吾平はじめ、この館の住人たちは、一人も残らず、一瞬の裡に燃え失せて、あとには一片の肉塊も残らなかつた。

南瀉氏は、は實はこんなこともあらうかと思つて極力千枝子を敬遠したのであつた。千枝子がうけつた「チチキトク」の電報も、本當のところ、この爆発完成の曉まで、邪魔になる千枝子を白鳥博士から引離して置かうといふ南瀉吾平の奸計だつたといへば、讀者も肯かれることであらう。

そして初秋の空が麗しく晴れた或る日、河北科長の媒妁で、白鳥博士と川邊千枝子との盛大なる華燭の典が擧げられた。その主賓のうちには、頭を一杯繃帯で捲いた二人の若い紳士が、一座の注目をひどく集めてゐたが、それは言はずとしれた勇敢なる青年探偵帆村莊六と、その助手須永との姿だつた。

電氣看板の神經

冒頭に一應断つておくがね、この話では、登場人物が次から次へとジャン／＼死ぬることになつてゐる——といふよりも「殺戮される」ことになつてゐるといつた方がいゝかも知れない。さういふ點に於て「グリーン家の慘劇」以來、血に乾いてゐる探偵小説の讀者には、きつと受けることだらうと思ふんだ。しかし小説ならば兎に角、いやしくも實話であるこの物語に於て——たとひそれが祕話の一つとして大事にしまつて置かれてあるものにせよ——あまりにも、次から次へと死ぬ奴がでてくるもんで、馬鹿馬鹿しいモダンチャンバラ劇をみてゐるやうな氣がしないのでもないのだ。だが、そんな氣で、この祕話を聞き、今日の世相を甘く見てゐると、飛んでもない間違ひが起らうといふものだ。たとへば今日アメリカに於ける自動車事故による惨死者の數字をみるがいゝ。一年に三萬人の生靈が、この便利な機械文明に喰はれてしまつてゐる。日本に於ても濱尾子爵閣下が「自動車轉殺取締をもつと峻嚴にせよ」と叫んで居られる。機械文明だけでは無い。あらゆる科學文明は人類に生活の「便宜」を與へると同時に、殺人の「便宜」までを景品として添へることを忘れはしなかつた。これまでの日本人には大變科學知識が缺けてゐたし、今でも科學知識の攝取を非常に苦しがつてゐる。だが、若い日本人には、科

學知識の豊富な者が随分と澤山できてきた。少年少女の理科知識に驚かされること、しばしばある。若い男子や女子で、工場で科學器械のお守りをしながら飯を食つてゐるといふのがたいへん多くなつてきたやうだ。若い人々にとつて科學知識は武器である。彼等はなにか事があつたときに、その科學知識を善用もするであらうが、同時に、また悪用の魅力にも打ち勝つことができないであらう。實際彼等のあるものから見れば殺人なんて、それこそ赤ン坊の手をねぢるより樂なことなのだ。しかし彼等のさうした科學的殺人事件が、あまり世間に報道せられないわけは、一つには彼等は殺人の容易なることは知つてゐても、殺人の興味が無いし、その味も知らないことに原因する。また二つにはその方法處置が完全で、犯行の全然判らない點もあるし、たとひ判つたにしても犯人たるの證據が全然残されてゐないことにも原因するのだ。……

いや、莫迦に「論文」を述べたてちまつたが、實は、この論文の要旨は、僕の頭の中に浮びあがる以前に、これから話さうといふ「電氣恐怖病患者」の岡安巳太郎君が述べたてたものなんで、その聽手だつた僕は、爾來大いに共鳴し、この論説の普及にとめてゐるわけなんだが、全くその岡安巳太郎といふ男は、科學的殺人が便宜になつた現代に相應しい一つの存在だつた。岡安はいまも言ふとほり、今日人殺しなんて容易に出来る、ところが自分は小學校時代から算術と理科がきらひで、中學生時代には代數、平面幾何、立體幾何、三角法と物理化學に過度の神經消耗をやり、遂にK大學の理財科を今から三年前に出た「お坊ちゃん」なのだ。科學知識とはまるで正反對の側に立つてゐるといふ人間で、科學を

呪ふこと連もはなはだしく、科學的殺人の便宜を指摘する夫子自身はいつか屹度この「便宜」の材料に使はれて、自分もつと天壽を俟つ迄もなく殺害せられてしまふに決つてゐると確信してゐるのだから、實に困つたものだ。この先生は、機械文明にも一應恐怖心を表明してゐるが、更に始末のわるいのは電氣文明に對する絶對的の恐怖心である。機械文明の方は自動車にしても、汽車にしても、トロツコにしても（彼は一度郊外で、赤土を一杯積んだトロツコに轢かれ損つたことがある）音響なり、速度のある車體の運動なりが、一應耳なり眼なりの感覺に危険を訴へて呉れるから、比較的安全だ。それに反して、電氣文明の方は、電氣の流れてゐることが、眼にも見えなければ、耳にも聞えやしない。そして誤つて觸れると、ビリ／＼と来て、それでおしまひである。電氣の來てゐることが判つた次の瞬間には、感電死で、自分の心臓はもうハタと停つてゐる。一度停つた心臓は時計とちがつて二度と動いてくれない。電氣を意識したときには、既に己が生命は絶たれてゐる。これほど、人情のない慘酷な存在が外にあらうか。しかも警視廳は、電氣の來てゐることについて何等の表示手段をとつてゐない。電線なるとものは皆鼠色か黒色で、銅が錆びた色とあまりちがはない。かうした眼に立たない色だから、ついで氣がつかないで電線を握つちまつたり、トタン塀を帶電させたりするのだ。その危険きはまる電線が生命の唯一の安全地帯である住家の中まで、蜘蛛の巢のやうに縦横無盡にひつばりまはされてゐる。スタンドだ、ヒーターだ、コーヒー沸した、シガレット・ライターだ、電氣行火だ、電氣ごてだと、電氣が巢喰つてゐる道具ばかりが出来て殺人の危険は、いよ／＼増加してきた。それに最も戰慄を禁じ得ない

のは、さうした電氣器具がほとんど全部といつていいほど、金屬で出来てゐることだ。金屬ほど電氣をよく傳へるものはない。それになにをわざ／＼、危険きはまる金屬を選んで使用するのであるか、警視廳の保安課なんて、一體どんな仕事をやつてゐるのかと言ひたくなる。——岡安巳太郎は、色蒼ざめた顔を上下にふり乍ら、よく憤慨したものだ。

岡安の電氣恐怖病症状については、この上述べると際限がないので、この邊でよしたい。俺は電氣に殺されるに違ひないんだ。」と彼は口癖のやうに言つてゐたもんだ。その度に春ちゃん——これが例のカフェ・ネオンの女給で「カフェ・ネオンの慘劇」の一花形であるわけだが——から「またオーさんのお十八番よ。そんなに心配になるんなら、岩田の京ぼんに頼んで、いつそ一と思ひに、感電殺しをやつてもらへばいいぢやないの、オーさんツ」と、尻上りの黄色い聲を浴びせかけられてゐたものさ。この岩田の京ぼん、本名京四郎といふのは、カフェ・ネオンから一丁ほど先にある電氣商の若主人で、ネオンの新築當時、電燈や電熱器の配線工事をやつた關係があつて、それからこつち、客になつてはウキスキーを舐めに來たり、また出入の電氣屋として配電の擴張工事や、問題のネオン・サインの電氣看板の取付けにやつて來たりなどして、どつちかと言ふとカフェ・ネオンの特別客といふわけだつた。尤も若い男のことだから、美しい女給の誰かにお思召のあつたらしいことは言ふだけ野暮である。話がどうやら脱線の模様だが、京ぼんに電氣で殺して貰へなど言はれると、岡安先生は眼を一ぱい見開いたまゝ、一同から身を遠ざけるために、隅つこの羽目板へペタンと身體をへばりつけてしまふ。そのと

き春ちゃん「ホラ懐中電燈！ ホラ、電気よ！」と言つて岡安の横腹を、ちよいと突つくと彼はキヤツと言ふやうな聲をあげて三尺ばかり飛び上る、その恰好がとても面白いといふので、春ちゃんが、退屈さましにとき／＼用ゐる、外の女給も人の悪いのばかりで、めいめいの客をほつたらかして置いてわざ／＼これを見に来るといふ騒ぎさ。その騒ぎが大きくなりすぎたと思はれる頃になると、鈴江といふ半玉みたいな女給が青い顔をして皆のところへやつて来る。「あたい、氣味がわるいから、キヤツキヤツ言はせるの、よしてよ。」さういふと春ちゃんが、鈴江をぎゆつと睨んで、何か嘔鳴りたらしいんだが、そいつをモグ／＼と口の中に押しかへして黙つちまふ。この氣勢に一同もくさつちやつてそれ／＼元の客席へ退散といふ段取りになるのが例だつた。この光景を、見てゐて見ないふりをしてゐる奴に、オウンター兼給仕長の圭さんといふのが居る。これは本名を鳥居圭三といふ三十五にもなる男でカフェ・ネオンの現業員の中でも最年長者なのだ。こいつは、内々春ちゃんに氣があるらしい。もつとも春ちゃんはネオンのプリマドンナだから、お客といはず、従業員といはずなかなるものなら是非一度は桃色のチャンスを持ちたいものかと願つてゐなかつたものは無からう。給仕長の圭さんは、白く上着を酒瓶の蔭にかくしてなにか整頓に夢中になつてゐるやうに見せて置いて、然るのち、その蔭に鈴江を上びこむと、春ちゃんの機嫌をわるくするやうなことを言つちやならねえぞと、薄氣味わるい表情と口調とで、訓戒を與へるのだつた。面白いのは、訓戒を與へてゐるのに、春ちゃんが氣付くと、彼女は燕のやうに忽ち圭さんの前にとんで行き、餘計なおせつかいだよ、すうちやん、あつちへ行つといで：

「と逆に圭さんに喰つてかゝる。圭さんはなにも言はないで、ニヤ／＼笑つてゐるところで幕になるのが、毎度のことであつた。その圭さんは、この幕切れには納りかねるものと見え、それから舞臺裏のコツタ部屋へ入りこんで、コツクの吉公と無駄口を叩きはじめる。吉公といふのは祖父江春吉が本名で、本来なら春公とか何とか言ふのがあたりまへなんだが、彼がこのカフェに来る前に既に春ちゃんと呼ばれる女給が居た關係上、春吉の方は春公とは言はないで、吉公とよばれてゐた。圭さんと吉公とはまあ仲のいゝ方で、そして二人はカフェ・ネオンに於ける正しく男子現業員の全部で、そして氣の毒にも一階受持ちの女給八人、二階受持ちの女給七人、合計十五人の娘子軍に對し、名實共に頭が上らなかつたのである。

かうした風景が、カフェ・ネオンに於て表面は案外平凡にくりかへされてゐるうちに、突如として大惨劇の黒雲が、この家の上に舞ひ下つた。それは月も氷るといふ大寒が、ミシミシと音をたて、廂の上を渡つてゆく二月のはじめの夜中の出来ごとだつた。カフェ・ネオンの三階の寢室で、春ちゃんが慘殺されてしまつたのである。その寢室には春ちゃんの外に四人の女給が、思ひ思ひの方向に枕を置いて寢てゐたのであるが、不思議なことに、彼女達は、春ちゃんの殺されたことを朝の十一時まで全く知らなかつたのである。丁度その時刻のすこし前に給仕長の圭さんが出勤して来て、階下のコツタ室に獨寢をしてゐた吉公を叩き起すと、その勢ひで三階の娘子軍の寢室までかけ上つたところ、蒲團をまくられても寢てゐる方がましたといふ頑強な反抗に遭ひ、溫和しく階下へおりて彼女の代りに店の窓をあけた

りしてゐると三十分も経つてから、この三階建のビルディングが崩れるやうな音をたて、四人の生残り女給が悲鳴と共に駆け下りて来た。その恰好は話にも繪にもならない。滑稽と悲惨とが隣り合はせに棲んでゐたことにはじめて気がつくやうな異常な光景だつた。その四人の女給は鈴江、ふみ子、お千代、とし子でみんな古くから居る連中ばかりである。

三階へ行つてみると、表の窓隣に床をとつて寝てゐた春江が、仰向けに白い胸を高く聳かして死んでゐた。その左の乳下には一本の短刀が垂直に突つ立ち天の鯨鋒のやうな形に見えた。どす黒い血潮が胸半分は擴がりそれから腋の下へと流れおちてゐるらしかつた。右の乳房はどうしたものでか、彼女の右手で堅く握りしめてゐた。しかし全體の姿勢から言つて、彼女は即死を遂げたものゝ如く、蒲團の中に行儀よく横たはつてゐた。彼女の死後、犯人は蒲團を頭の上からスポーと被せて行つたので、一層發見がおくれたものらしい。だからその朝一度その室を訪れた圭さんにも気がつかなくなつたものと考へられる。

警視廳の活動ははじまつた。死體は即刻大學へ廻され、剖檢された。結果としてその早曉二時と三時の間に殺害されたことが判明した。死因は刺殺で、刃物は美事に心臓に達してゐる。尙死の前後に暴行をうけた形跡が存在してゐるが、被害者の肢勢から考へて死後に於て加へられたものとする方が理窟に合ふ。勿論、兇行原因は痴情關係によることは明かである。しかしながら殺人犯人の見當は中々はつきりついては來なかつた。第一、證據が全くのこされてゐない。短刀の柄にも指紋はない。被害者は無抵

抗て即死したやうな譯だから、犯人の著衣の一部をもぎとつてもゐない。死體の右手は右の乳房から離され、一應掌の中を改めてみたが、此處にもなんの異常もなく、春ちゃんは單に乳房を握りしめてゐたといふに過ぎないと觀察された。圭さんと吉公は、嚴重な取調べをうけたが勿論ボロを出さずにすんだ。しかし二人の現状不在證據法はすこし根據が薄弱であるといふのが、圭さんの方は當時、裸夫暮して、二人のよく睡る子供と一緒に睡つてゐたといふし吉公の方は一時就寢、十時起床で、その間、寢てゐたには相違ないが、それを證明するに途のない獨り者だつた。女たちも調べられたが、皆々晝間の疲れで熟睡したと申立てるばかりで、春ちゃんが殺された前後についての陳述に、これぞと思ふ有力な事實が判明しなかつた。たゞふみ子といふ皆の中では一番年の多い女給が申立てたところによると、店がひけてから三丁ほど先に在るカフェ・ネオンの別荘(といふと體裁がいゝが、その實、このカフェの持主の喜多村次郎の邸宅にして同時に五人ばかりの女給が宿泊するやうに出來てゐる家で、實は彼女等の特殊な取引が行はれるために存在する家だともいふ)へ着物のことで行き、その用事がすんでカフェへ歸つて寢たのが一時半だつた。そのときに春江はじめ四人の女給はもう寢てゐたが春江の寢すがたが莫迦に細つそりしてゐるので不思議に思ひ、側によつてよく改めて見ると、春江の身體は無く寢衣や枕が身體の代りに入つてゐたと述べた。これは警視廳にとつて唯一の參考材料となつた。春江はどこかへ行つて一時半には寢床にゐなかつた。春江はその時刻、どこでなにをしてゐたらう。春江の客や情人の探索が、虱つぶしに調べられて行つた。岡安巳太郎や、岩田の京ぼんも、調べられ

た一人だつた。これも自宅に於て睡眠中だつたさうで、格別材料になるやうなものが発見せられなかつた。事件は文字どほりに、迷宮へ陥つて行つたのである。

春江の初七日が来た。その夜、カフエ・ネオンの三階に於て、またく惨劇が演ぜられた。不幸な籤を引きあてたのはふみ子といふ例の年増女給だつた。殺害状況は、前の春ちゃんの惨殺の時と、まるで寫眞にとつたやうに同じ状況を再演した。強ひて相違の箇所を擧げるならば、こんなことになる。

一、同室に就寝してゐた女給は、前回と同じ顔觸れの鈴江、お千代、とし子の三人と外に清子、かをるの二人の新顔が加はつてゐた。

二、被害者ふみ子の身體には暴行の跡が発見されなかつた。

三、被害者ふみ子は、春江の場合の如く右手で右の乳房を握つてはゐず、右手は正しく伸ばされてゐた。

四、被害者ふみ子の寢床は、春江の場合に於けるが如く、表向きの窓際にはなく、それと九十度だけ右廻りに廻つた壁ぎはに寝てゐた。

(因に、春江の位置に寝てゐたのは、鈴江であつた)

この外の點は、皆おなじ事で、不思議なことに、殺害の時間も、短刀の大きさも、致命傷の位置も同じで、たゞ創痕の深さが、すこし深いやうに報告されてゐた。

60 第二の惨劇の日につく一兩日の間に、僕の耳に入つた特殊事項について二三のことを述べて置かう。なに、君はこの事件に、どんな役目をしてゐたのだから言へといふのかい。それは判りきつてゐるぢやな

いか。どうせ終りまで聞けば、判るにきまつてゐることなのさ。僕が誰だつて、この物語の進行には一向差支へないわけぢやないか。

鈴江が、捜査係長に訊ねられた一事がある。それは第二の犠牲者たるふみ子の肩のところに貼つてある絆創膏について生前ふみ子が、おできが出来たとか、傷が出来たとか言つてゐなかつたかといふ質問である。鈴江は知らないと言へた。同じ質問が次にお千代に發せられた。お千代は細い引き眉毛をしかめながら何か思ひ出さうとしてゐるやうだつたが「ふうちゃんの首のところには、おできも傷もなかつたやうですわ、あの日のおひるところ、ふうちゃんと蛇骨湯へ一緒に入つたんですがそのときお互様に、洗しつくらしたんですのよ。わたしはふうちゃんの首のところに小さい黒子があるのを見付けたものですから、ちよいとおイタをしてやれと思つてふうちゃんの頸んとこをギユウ／＼こすつてやつたんです。ふうちゃんは、あんた痛いわよ、血が出るぢやないのといひましたから、でもこの小ぢやい黒子が、どうしてもとれやしないのよと言つて笑つたんですの、そのときによく注意してゐたと思ひますが、別に傷もおできも見えなかつた、やうな氣がしますけれど……」と陳述した。清子、かをる、とし子の三人も知らない、順々に答へた。

この訊問が終つたあとで、係官の間に、こんな會話が行はれるのを聞いた。
「ふみ子の首の絆創膏をとつて見たが、穴が相當深くあいてゐた。沃度丁幾をつけてあるが、おできのあとともすこしちがふやうな氣がするんだが、大學の鑑定事項の中へ、穴ほこが意味する病名を指摘す

るやうに書き加へて置いて呉れ給へ。」

「不思議ですな、前の春江の場合にも、やつぱり首のところに絆創膏が小さく貼つてあつたぢやありませんか？」

「なに、それは本當か。——ウーンすると、ことによると犯行に關係のある穴ぼこかも知れない。だがさうなるとあの絆創膏は犯人が貼布したことになるわけだ。さあ、失敗つた。あの絆創膏を捨て、しまつた。あれを顕微鏡にかければ、たとひ犯人が手袋をはめてあれを貼りつけたものとしても、ゴムがベタベタしてゐるために、手袋の繊維をすくなくとも數十本は喰はへこんでゐる筈だ、それから手懸りが出るかも知れなかつたのだ。莫迦なことをしてしまつた。」係長のなげきは、なか／＼と通りではないうやうにみえた。

もう一つの面白い事實は、ふみ子の死んだといふ日のお午下りに、岡安巳太郎が、ヒョックリとカフェの扉をおして入つてきたことだ。警視廳では、相續いて起つた殺人事件に證據材料があまりに貧弱で、考へやうによつては、犯人の容易ならぬ周到ぶりが浮んでみえるやうなので、なにか手懸りを得るまでは、このカフェ・ネオンに營業を休んではならぬと言ひ渡してあつた。そしてふみ子の死體は、別荘の方で葬儀萬端を扱ふこととし、カフェ・ネオンにはいつものやうに晝間から、桃色の薄暗い電灯が點つてゐたのである。なにも知らぬ岡安は、はりこんでゐる刑事の間を、すれ／＼にくぐりぬけてきたことも知らずに、いつもの常席に腰を下した。すると奥から鈴江があたふたと出て來るなり岡安の前へベタ

ンと坐つて、「オーさん、大變よ。きいても大きな聲を出しちやいやあよ。今晩方、また、ふうちゃんが殺されちやつたの、え、三階でね、もうせんのと同じ手で……。だもんで、うちの外も（とあたりを氣を配りながら特に聲をひそめて）中にも刑事が張りこんでゐるわ、あんた、變な聲なんか出さないでちやうだいね。」と、やさしく睨んだ。一體、鈴江といふ女は、春ちゃんの死後そのいゝひとだつた岡安と馬鹿に仲がよくなつたやうだ。この女は、半玉みたいな外觀を呈してゐるかと思ふと、年増女の言ふやうな口をきくことがあつた。恐らく顔や身體の割には、ずるぶん年齢をとつてゐるのぢやないかと思はれた。今のところ、岡安も春ちゃんのこと、夢のやうに忘れちまつたらしく、鈴江と肝膽相照してゐる様子は、側から見えてゐて此のやうな社會の出來ごととしても餘り氣持のよいことぢやなかつたのである。

「すうちゃん。けさ、ふうちゃんが殺された時間は、いつ頃だつたの。」

「さあ、よくはわからないけれど、二時と三時との間だといふ話よ。どうしてサ。」

「ちや二時二十分——たしかに、あれだ。」と岡安は急に眼を大きく目開いたまゝ、ふるふる細い手を額の上へ持つて行つた。「すうちゃん、このカフェは呪はれてゐるんだよ、君も早くほかへ棲かへをするといふ。僕は見たんだ。たしかに此の眼で見たんだ、しかも時刻は正に二時二十分——丁度ふみちゃんが殺された時間だ。」

「オーさん。あんた知つてんの、言つてごらんさい。言つてよ、なにもかも、さ早く。」

「いや、怖ろしいことだ。君、このカフェ・ネオンの三階に懸かつてある電気看板は、たゞの電気看板ぢやないんだぜ。あいつは生きてる！ 本當だ、生きてる。あの電気看板には人間の魂がのりうつつてゐるのに違ひないんだ。きつと、あいつだ。」

「なにを寢言みたいなことを言つてんのよ。早くおきかせなさいな、けさがた、あんたの見たといふことを……もしかしたら、オーさんは、けさがた此處の家へ……。」

「あの電気看板は、早く壊してしまふがいぞ。おいすうちやん、あの電気看板はいつも桃色の線でカフェ・ネオンといふ文字を畫いてゐる。あれは普通の仁丹廣告塔のやうに、點いたり消えたり出来ない式のネオン・サインなのだ。そしてあの電気看板は毎晩、あのやうにして點けつばなしになつてゐる。僕んちはこゝから十三丁も離れてゐるが、高臺に在るせるか、家の屋上からあのネオン・サインがよく見える。それは朱色の入墨のやうに、無氣味で、ちつとも動かない。また動くわけがないのだ、それなのに、けさ方、二時二十分にあの電気看板が、ほんの一秒間ほどパツと消えちまつたのだ。その後は又元のやうに點いてゐたが……。停電なら、外に點つてゐる澤山の電燈も一緒に消えるはずぢやないか。ところが、パツと消えたのはこゝの電気看板だけさ。二時二十分にふみちやんが殺される。電気看板がピクリと瞬く——氣味があるぢやないか。僕は、はつきり言ふ。あの電気看板には神経があつて、人間の殺されるのが判つてゐたのだ。そして僕にその變事を知らせたのに違ひないんだ、あんな怖ろしい電気看板は、今日のうちに壊してしまはなくちやいけない。」

「オーさん、そのことは黙つてゐた方がいゝことよ。」とこの話をきいてから死人のやうに蒼青になつてゐる鈴江が、變枯れた聲を無理に咽喉からはき出すやうにして叫んだ。「その話はオーさんの舉動にある疑ひを起させるばかりに役立つわ。あたいは、なにもかも知つてゐるのよ。たとへば、死んだ春ちやんとあんたが、密會の打合せをあの電気看板の點滅でやつてゐたこともよく知つてゐるわ、さア今更驚くに當りやしない。春ちやんは、毎晩十二時になると、あの電気看板のスイッチを切つたり入れたりして、電信のやうな信號をすると、ご自分の家の屋上でその信號を判斷しては、その夜更け、こゝのうちの裏梯子から三階の屋根裏の物置へあんたが忍んで來るのだつたわネ。電気看板の信號なんかは使はないけれど、其外は丁度このごろ、あんたとあたいが繰りかへしてゐる深夜のランデヴウみたいにな、まあ、くやしい。どうして忘れるもんか、あの春ちやんが殺される日、あたいは屋根裏の物置の中に鼠かなんかのやうに蠢いてゐるあんた達を見せつけられて、あたし……。オーさん。今の話をするとんだ騒ぎができますよ。黙つてゐるのよ、わかつて」

「春ちやんを殺したのは、僕ぢやない。ふうちやんを殺したのも、亦僕ぢやないんだ。」

「そんなことを訊いてゐるぢやないぢやないの。いやあなひとね。こゝの中にはそりやとても怖ろしい人が居るのよ。人間の生血でも吸りかねない人がネ。今にわかるわ、畜生！」

「すうちやんは、人殺しをやつた奴を知つてゐるのかい」

新しい客がドヤ／＼と扉のうちへ流れこんで來て、岡安の隣のボックスを占領してしまつたので、き

はどい話も先づそれまでだつた。
その日の午後四時になつて警視廳へ大學からの報告が届くと、捜索方針が一變した。朝から拘引されてゐた給仕長の圭さんと、コックの吉公とが、夕方になつて一先づ歸宅を許され、これと入れかはりに電氣商岩田京四郎が、檢舉られてしまつた。調べ室は金モールの眩しい主腦警官と、人相のよくない刑事連中の間に、京ぼんを挿んで場面はいとも緊張してゐる。

岩田京四郎はなかく白狀しない。しかしそれはもう時間の問題であると係官の方ではたかやく、つてゐた、といふわけは、大學の報告で初めて判つた新事實によると、第二の犠牲者ふみ子の死體剖檢の結果、兇器を刺しとほしたため出来た傷口の外に、それと丁度相重つて兇器によるとは思はれない皮膚と筋肉との損壞状態を發見したことにある。その部は、鋭い爪でひきさいたやうな形になつて居て、尙そのうへ、皮膚と筋肉の一部に連續的な黄色い燃焼の跡のやうなものがある。これはをかしいと更に解剖をすゝめかところ、遂にふみ子の死因が、短刀による心臓部刺傷であると判断せられてゐたのは大間違ひで、實は高壓電氣による感電死でありその高壓電氣は、ふみ子の乳下と、絆創膏の貼りつけてあつた首の後部とに電極を置かれて放電せられたもので、相當強い電流が心臓を刺し其の場に即死をとげたことが判明した。この驚くべき事實が報告されてみると、警視廳では、第一の犠牲者の春江慘殺事件に於ても同様の手段がとられたものと確信をもつやうになつた。それは、春江の場合には頸部に、小さい絆創膏が貼りつけられてあつたのを覚えてゐる係官が居たことから判つて來たのである。こゝに電

67
電氣商岩田京四郎は非常な不利な立場となりカフェ・ネオンの頻繁な電氣工事の詳細について手厳しい訊問が始まつた。無論、女給殺しの電氣は、何萬ヴォルトといふ高壓電氣を使つてゐる三階のネオンサイン電氣看板から、被害者の身體へ導かれたものであり、さうした思ひ付きや、高壓電氣の取扱ひは、岩田京四郎を除いて外の誰もが出来さうにないことから當然、二回に亙る電氣殺人の犯人として彼が睨まれたのも致方のないことであつた。

電氣商の京ぼんが翌日の取調べ續行のため冷い留置場の古ぼけた腰掛の上に、睡りもやらぬ一夜を送つた其の翌朝のことだつた。事件急迫のために、宿直室で雑魚寢をしてゐた係官一同は「カフェ・ネオンに第三の犠牲者現る。」といふ急報に叩き起されて、夜來の睡眠不足も一時にどこへやら消しとんでしまつた。第三の犠牲者は、眉毛の細いお千代だつた。捜査係長は、喪心の態で、宿直室の床の上

に起き直つたまゝ、なかく室から出て來さうは氣色もみせなかつた。
第三の犠牲者のお千代の殺害慘狀はあまりにも悲惨だつた女給一同は、第二の慘劇以來といふものは、カフェ・ネオンに宿泊するのをいやがつて、みな別荘の方へ行つて寝ることにしてゐた。たゞ氣づよいコックの吉公だけは、このカフェを無人にも出來まいといふので、依然として階下のコック室に泊つてゐた。しかし室の内部からしんぼりがかつたりして晝部女給たちから小心を唾はれたものだ。その夜、お千代は當番で、最後まで店にのこつてゐたものらしい。勿論彼女は別荘へ歸つてゆくに違ひなかつたのだが、たうとう其の夜は別荘に姿を見せなかつた。事件以來、他へ泊りに行くこともちよいとある

ので大して問題にされなかつたが、朝になつて女給たちが、昨夜の疲れを拭はれて起き出でた頃には、お千代が昨夜かへつて来なかつたことについて不吉な問題が一同の間に燃え擴つて行つた。

「あら、すうちやんが見えないぢやないの」と叫んだ娘が居る。

「昨夜こゝへ泊つたわよ、ほら、その蒲團があの人ぢやないの。お小用にでもいつたんぢやないかしら、だけど、かうなると、一々氣味がわるいわねえ」

鈴江の行方については兎も角も、一方お千代の惨死體が、又もやカフェ・ネオンの三階に發見されて大騒ぎが始まつた。またしても言ふが、お千代の最期は酸鼻の極だつた。彼女はとうしたものが、夜中に開かれた表向きの窓から、半身を逆の外へり出し、丁度窓と電氣看板との間に挿つて死んでゐた。だから曉け方になつてやうやく通行人が、電氣看板の上端からのぞいてゐる蒼白い脛や、女の着衣の一部や、看板の下から生首を轉してもしたかのやうに、さかさまになつてクワツと眼を開いてゐる女の首と、その首の半分にふりみだれた黒髪とを發見して大騒動になつた。お千代は晴着をつけたまゝ殺されてゐた。矢張り心臓には短刀がブスリと突きたてられ、警視廳で眼をつけてゐた絆創膏も肩のあたりに發見せられた。すべて同一手法の殺人である。そして電氣殺人たることは判つてゐるのにもかゝらず、それを瞞著しようとしてか短刀を乳房の下に刺しとはしてゐるではないか。係官は犯人の嘲弄に悲憤の泪をのんだ。そして即時、このビルディングの徹底的家宅搜索の命令が發せられた。

69 その取調べの最中に、フラ／＼とやつて来た岡安巳太郎が苦もなく刑事の手にとり押へられたのは、氣の毒にも滑稽であつた。

「ゆうべ、誰かゞカフェ・ネオンで殺されたでせう、刑事さん、僕は知つとる。だから、こんな化物のやうな電氣看板は壊してしまへと僕は忠告しといたのです。それにひとの言ふ事を信用しないものだから、又誰かゞ殺されちまつたぢやないか。今度は誰です。え、お千代、千代ちゃんか。すうちやんはまだ生きてゐますかネ。可哀いさうな千代ちゃん。あの子の死んだのは、やつぱり今朝の二時二十分です。僕はちやんとこの眼で、現在みてゐたんだから。この看板のやつ、また瞬きをしやがつた、この化物め！」刑事がこの厄介な半狂人を制する間もなく、岡安は路傍の大きな石を拾ひ上げると、パツとネオン・サインを目がけてうちつけた。恐ろしい物音がして、サインの硝子が碎け、電氣看板が壁體からグツと右の方へ傾くと、まだその儘にしてあつたお千代の屍體がぬつと白日のもとに露出してきたもんだから、見て居た係官や群衆は、わつと聲をあげると共に、顔の色を眞蒼にしてしまつた。その隙に岡安はとび上つて何だかわけのわからぬことを嘯鳴りちらしては暴れてゐた。「春公の怨靈め、電氣看板に化けこんだつて、僕はちやんと知つてゐるぞ。僕が殺せるんなら、サアこゝまでやつて来て殺してみろ！」彼は電氣看板を春ちゃんの死靈と思ひ誤つてゐるのであつた。警官は、この本物の狂人になつてしまつたらしい岡安を手どり足どり連れて行つてしまつた。騒ぎがますます大きくなつてゆく内に、女給の鈴江と、コックの吉公とが、全く行方不明になつてゐることが報告された。それ以來、今日に至る

まで二人の消息は、警視廳にとどかないのである。警視廳では、その夜電気商の京ぼんを釋放し、圭さんの嫌疑も晴れた。岡安已太郎は氣がすこし鎮まつたところで、色々と訊問をうけたが、電氣的知識に乏しいばかりか、大きい恐怖さへ感じてゐる岡安に、電気殺人ができる筈はないといふので、犯人たるの嫌疑は薄くなつた。それに係官は彼のために、電気看板が瞬くやうに見えるのも、その途端に電気抵抗のすくない人體の方へ電氣が流れるため、電気看板の方には電氣が通らぬこととなり、それで一寸消えるのだと説明してやつても、彼にはサツパリ理解がつかなかつた。兎も角も春江惨殺の夜の岡安の行動には、尙いくぶんのうたがひが残されてゐる。又、彼が、何故に、この寒い二時三時といふ深夜にひとり起きていて屋上に立ち、カフェ・ネオンの電気看板を眺めくらしてゐるものか、これについて岡安の語るところによると、春江と電氣看板の點滅を合圖に逢瀬を楽しんでゐたことが忘れられず、今は鈴江と仲のよくなつた今日も、毎晩のやうに十三丁も遠方から、あの桃色のネオン・サインをうつとりと見詰めてゐたさうで、さうした生活が、なにより彼にとつて楽しい時間であり、寒さもなにも感じないと答へた。

そこでいよく取つておきの話をするが、實はカフェ・ネオンの惨劇の犯人と目せられる春吉と鈴江の關係について、僕が知つてゐることがある。鈴江は自分の惚れてゐる岡安と情人たる春江とのよい仲に極度の嫉妬をおこし二人の逢瀬が度々屋根裏の物置で行はれてゐるのを知つたもので、たうとうたまりかねて、春江を殺す決心をした。彼女はだれにも洩らさなかつたが昔、××電氣會社で高壓係の女工



だつた關係で電氣の取扱ひ方を知つてゐたので、それを利用したといふわけだ。兇行前、同室に熟睡中の同僚を麻酔薬を嗅がせてよく睡らせてしまひ、兇行後には自分もみづからこの薬の力を借りて熟睡に陥り巧みにみんなの眼をごまかしてゐたものである。

コツクの春吉は、實は殺された春吉の從兄にあたる男だがその關係を隠してカフェ・ネオンにやとはれてゐた。春吉が鈴江に覬はれてゐることを感付いてはゐたが、たうとう彼の注意の届かないうちに春吉は殺されてしまつた。鈴江は春吉を殺したただけではなく、春吉の情人たる岡安を完全に手に入れ、岡安も春吉のことなどを忘れてしまつたかのやうに鈴江と喃喃々々々の態度をとつた。それでコツクの春吉はすつかり憤慨し、この復讐を計畫したわけなのだ。彼は元々、極端な享樂兒で、趣味のために、いろいろな低級な職業を選び、轉々として漂泊を續けてゐる男なのだ。その間にも電氣の職工にもなつて高壓電氣の取扱ひも知つてゐた。更にゐることは、從妹の春吉の感電死に遭つたために、彼の享樂主義は、怪奇趣味にめらめらと燃え上つた。復讐手段としては、鈴江を直ちに殺さずに鈴江のやつたと同じ手段で、次から次へと若い女を殺して行き、だん／＼と嫌疑が鈴江の方に向いて来るやうな途をとらせ、思ふ存分、鈴江を脅迫し恐怖させた上で、最後に慘殺してやらうと思つたのである。ところが、その手はじめとしてふみ子を殺してゐると、鈴江はたちまち犯人が彼であることを感付いてしまつた。二人は睨み合ひの状態となり、お互に持つ兇狀は、二人を奇怪きはまる共犯關係に結びつけてしまつた。第三の慘劇もコツクの春吉の手で行はれたが、それは鈴江への脅迫材料になると共に、又自分の重荷に

もなつてしまつた。二人はお互の行動について極度の注意を拂つた。一方が、その筋へ一方を訴へて死刑臺へ送れば、次の日には自分も必ず捉へられて死刑臺へ送られねばならなかつたのである。二人は、別々に、この點について理解し、相手から脱れる方法に苦心し合つた。その結論は、唯一つあつた。相手の生命をとつてしまふことだ。この外に、生きる途はないと知つた彼等は、お互に相手の隙を覗ひ合つた。だが第三の慘劇で、いよいよこれ迄の犯跡が曝露しさうになつたのを見てとつた彼等二人は、朝の太陽が東の地平線から顔を出す前にこのカフェから手をたづさへて遁走してしまつたのである。いや、この市街から永遠に去つて行つたのである。敵同志の不思議な旅が始まつた。怪奇に充ちた生活がはじまつた。彼等は、外から見れば、羨しいほど仲のよい、そして慎みのある若い男と女とであつた。しかし人目を離れて二人つきりの世界になると、瞋恚のほむらは天に冲するかと思はれ、相手の兇手から脱れるために警戒の神經を注射針のやうに尖らせた。若い彼等二人は、仲睦しさに、一つ蒲團に抱き合つて寝た。相手の腕が自分の肢態にしつかり、からみついてゐる間は、安心して睡つた。

「劍を抱いて寝る」

と春吉は或る夜ふとさうした文句を口の中で言つてみた。彼は只今の生活に、彼のあらゆる精力と神經とを消耗しつくしてゐた。恐ろしい生活、しかし今日までさまざまの享樂を求めてきた身にとつて、一面に於て、これほど異常なエクスタシーを興へてくれるものはなかつた。これほど生命の價値を感じたことはなかつた。これほど神を想つたことはなかつたのである。

「劍を抱いて寝る」といつたわね。機嫌のわるいと思つてゐた鈴江が、細い聲で彼の耳元にしづかに囁いた。鈴江の顔の下に重つてゐた彼の頬に、ポタリ／＼と、なま暖いものが落ちて来てくすぐるかのやうに、彼の唇の下をとほつて枕の下におちて行つた。

彼は鈴江の腕がギョツと身體をしめつけて来るのを感じた。彼はいつもとはまるで反對の氣持で、鈴江の強い握力に、かぎりなき愛着を感じてゆくのであつた。

と、まアかういふ話なんだがね、そのうちに、妻もお湯から歸つてくるだらうから、さうしたら、晩食でも御馳走することにしようよ。

もう今日がお別れになるかも知れないんだゆつくりして行きたまへ。

幸運の黒子

「どうして、俺は、かう不運なんだらう」

病院の門を出ると、怵へ怵へた鬱憤を、アスファルトの路面に叩きつけた月田半平だつた。

院長は、なアに大丈夫ですよ、こんな病氣なら、注射の五十本もやれば、造作なく癒りますよ、但し五十本が一本缺けても駄目ですよ、それをお忘れのない様に——と云つた。一回三圓として、百五十圓の金があるわけだ。ああ、これが、タツタ一度の代償なんだ。

たつた一度——といふのは、すこし説明を要するが、この半平は、元來、貞操堅固の男だつたのを、友人達が引つぱりだして、東都名物の私娼窟玉の井へ、連れて行つたのだつた。これは、友人にも多少の悪企みはあつたにしても、主たる動機は、半平といふ男が細君に死別してから、まる二年この方、空闘を貞淑に守りつづけてゐるのを見ちやゐられなかつたせゐだつた。そして半平は、飽くまでも、亡妻への貞操を死守するつもりだつたのであるが、彼のエネルギーな敵娼の理解を得ることが出来ず、遂に暴力を以て征服されちまつたのである。

そして、數日後に、半平は身體の一部に異常を發見したのだつた。彼にとつて、それは、踏んだり蹴

たりの不運だった。

いや、それよりも、さしあたり大問題なのは、あと四十九回の治療代を、どうして捻出すべきか、といふことだった。

これが五年前なら、五千圓の貯金があつた。だが、その年の暮に、三千圓といふものを費つて、新妻を持つた。その細君は、更に次の年に、慢性病になり、轉地療養をすることになつて、残額の二千圓は、バターと無くなつてしまつた。そして貯金通帳から、最後の五十錢までが、綺麗に拂ひ出されると、間もなく、細君の壽命も、天國に回收されてしまつた。彼は全く無一文になつたのだつた。

(四十九回の注射をやらなければ、此の身がだん／＼腐つてゆく！)
かうなると、半平は、泣いてばかりも、居られなかつた。

三日三晩、考へぬいた揚句、やつとの思ひで、彼は案外手近に、一つの案を發見したのだつた。

「どうだつたね。貸して呉れたかい」

半平は下宿の二階の部屋に待つてゐてくれた友人、川原剛太郎の顔を見るが早い、かう聲をかけたのだつた。その友人は××生命へ出てゐる男だつた。

「うん、貸しては呉れたがネ」友人は、煙草の煙を、忙しさに吸つた。「君の云ふほどは駄目だつたよ」「ぢや、いくら貸したい。二百圓か」

「うんにや、その半分。百圓だア」

「チエツ、百圓ぼつちか、それぢや、治療代にも足りやしない」

半平は、川原の××生命へ、一萬圓の保険を懸けてゐるのだつた。此の際、拂込金の一部を、低利で貸して貰はうと思つて、川原に交渉を頼んだのだつたか、それが最高百圓では、すつかり豫想を裏切つてしまつた。

「どうも氣の毒だがネ、どうにも仕様がなないよ。これが君の細君の保険だつたらここんとこで、君は一萬圓の紙幣束を擱んでゐる筈だつた。」

「さう云へば、なるほど。どうして俺は、かう不運なんだらう！」

「不運といへば、思ひ出したがネ」友人の川原は、改まつた口調で、語りだした。

「神龍子といふ觀相家の話を聞いたんだが、君、幸運の黒子といふのがあるんだ。顔に出來てゐる黒子といへば普通、鼻筋を中心として、左側にあるに決まつてゐて、右側にあるのは非常に稀なんださうだ。」

さう云はれて、氣をつけて人の顔を覗てゐると、なるほど顔の黒子は、皆左側にあるネ。ところで、右側に黒子のある人間が全然居ないかといふと、さうでもないのだ。極めて稀だが、あるにはある。そして右側に黒子のある人は大變幸運なんださうだよ。君も、いつまでも嫁夫でゐずに今度は、幸運の黒子のある若い女でも探しあてて、再婚してはどうかネ」

大變、耳よりな話だつた。

自分の顔に、幸運の黒子を植ゑつけるわけに行かないが、鮮かな幸運の黒子をもつ若い女を、女房に持てば、相當運が向いてくるだらう。

「そりや本當かい」半平は、問ひかへさずには居られなかつた。

「神龍子の云ふことだもの、絶対に信用が置けるさ」

友人は、半平の懷疑を嘲るやうに、云つた。

「それでも五分間ほど、この儘、安静にしてゐて下さい」

院長は、注射器とアンプルの殻とを、看護婦に手渡しながら、云つた。

「最初のうちは、どうしても注射の反應は、強いですよ。これで、まだ二回目だからな。では、お静かに」

さういつて、院長は室を出ていつた。あとには、看護婦が残つて、手術器械をカチャカチャと片付けてゐるばかりだつた。

「あ、そんなに——」頓狂な聲をあげて、看護婦が、飛んできた。「お動きになつては、いけません。痛みますか、もし……」

眼を閉ぢてゐた半平の顔のあたりに、若い女の體臭が、ムンムン匂つてきた。彼は胸の興奮で、締め

つけられるやうだつた。狡く眼を閉ぢたまま、嗅覺で、若い看護婦の全身を舐めまはしてゐる半平だつた。

「聲を出しちや、いけませんよ」看護婦の熱い呼吸が、イキナリ半平の耳許でしたかと思ふと、彼の一方の手首は、ギユツと握られてしまつた。「これを、あとでお讀みになつて下さい！」

「!?」半平は、ことの意外に驚いて、看護婦の顔を見上げた。

「おお、……」彼は、も少しで、大聲を出すところだつた。逃げるやうに急ぎ足で室を出てゆくその看護婦の、肉付のいい頤の右側に、黒大豆をソツと貼りつけたやうな黒子が明らかに認められた。おお、幸運の黒子！

往來へ出ると、半平は、若い看護婦から、掌のうちに握らされたいくつにも折り疊まれてある紙片を、開いてみた。そこには、鉛筆の走り書で、こんな文面が認められてあつた。

「失禮ごめん遊ばせ。病院で一回三圓かかる注射を、あたしの下宿へ午前八時二十分までにおいで下さい。半額でいたします。

小石川區××町つぼみアパート七號室

半平の顔が、だらしなく解けた。行人の巷に、曝すのが苦しいニコニコ顔だった。

「幸運の黒子を持つた女を、一目で見ただけで、かうも運がよくなるものか！」

注射料は半額で済むことにはなるし、幸運に恵まれた若い女は探しあてるし、それに、あの唐崎さんといふ看護婦の、素晴らしい性感はどうだ！

彼は、直ぐにも、飛んで歸つて、唐崎さんと握手をしたくてたまらなかつた。

筋書どほりに、唐崎さんと、いつしか同棲するやうになつた半平だった。新婚旅行も、唐崎さん——ではない新妻みどりの稼ぎためた財布のお蔭で、南伊豆まで遠出をし、温泉氣分と夫婦生活を満喫することができた。

だが、東京に歸つてくると、半平は重病になつて、ドツと床についてしまつた。高熱が、いつまでも下らなかつた。食物も碌々口へ入らなくなつて、たうとう、新婚後、三十日と経たないのに、

「ナナナ、ナニが幸運の黒子だッ！」と呻りながら、半平は鬼籍に入つてしまつたのだつた。哀れな半平だつた。話はこれでお仕舞である。

x

蛇足を加へるならば、半平の考へは、間違つてゐた。幸運の黒子は、やつぱり幸運の黒子だつた。なぜなら、半平の死と共に、一ヶ月で未亡人になつたみどりは、x x 生命から、現金で金一萬圓也を受取

つた。それは亡夫の懸けてゐた生命保険だつたことは、讀者諸君のよく御承知のところである。

幸運の黒子は、みどりにあつたので、半平にあるのではなかつた。

半平の認識不足が、この物語を生んだのだつた。

夜泣き鐵骨

1

眞夜中に、第九工場の大鐵骨が、キーツと聲を立てて泣く——
といふ噂が、チラリと、わしの耳に、入つた。

「そんな、莫迦な話が、あるもんか——」
わしは、検査ハムマーを振る手を停めて、カラカラと笑つた。

「さう笑ひなさるけどナ、組長さん」その噂を持つてきた職工は、怯えた眼を、わしの方に向けて云つた。「昨夜のことなんだよ、それは……火の番の、常爺が、兩方の耳で、たしかに、そいつを聞いたよつて、蒼い顔をして、此のおいらに話したんだ。満更、偽りを云つてゐるんだア、思へねえ」

いつの間にか、わし達の周りには、大勢の職工が、集つてきた。

「組長さん、それア本當なんだ」別の聲が叫んだ。

「なんだとオ——」おれは、その聲のする方を見た。「てめえは、雲的だな。雲的ともあらうものが、輕

卒なことを喋つて、後で笑はれんな」

「大丈夫ですよ——」雲的は大いに自信ありげに、言葉をかへした。「それについちや、ちいつとばかり、手前の恥も、曝けださにやならねえが、もう五日ほど前のことでさア。徹夜勝負のそれが、十二時を過ぎたばかりに、スツカラカンでヨ、場に借してやらうてえ親切者もなしサ、やむなく、工場の宿直、たあさんのところへ、眞夜中といふのに、無心に來たといふわけさ、その無心を叶へて貰つての歸るさ、通り懸つたのが今話しの第九工場の横手。だしぬけに、キーツといふ軋るやうな物音を聞いた。

(オヤ、何處だらう)と、あつしは立停つた。暫くは、何にも音がしねえ。(空耳かな?)と思つて、歩きたさうとすると、そこへ、キーツとな、又聞えたぢやねえか。物音のする場所は、たしかに判つた。第九工場の内部からだッ。(何の音だらう? 夜業をやつてんのかな)さう思つたのであつしは、顔をあげて、硝子の貼つてある工場の高窓を見上げたんだが、内部は眞暗と見えて、なんの光もうつらな。い。(こりや、變だ!)俄に背筋が、ゾク／＼と寒くなつてきた。そこへ又その怪しい物音が……。恐いとなると、尙聴きたい。重い鐵扉に耳をおつつけて、あつしア、たしかに聞いた。キーツ、カンカン、硬い金屬が、軋み合ひ、噛み合ふやうな、鋭い悲鳴だつた」
「大方、工場に、鼠が暴れてるんだらう」わしは、不機嫌に云ひ放つた。
「どうして、組長!」雲的はハツキリ輕蔑の色を見せて、叫びかへした。「あつしにア、あの物音が、どこから起るか、ちゃんと見當がついてるのでサ」

「ンぢや、早く喋れツてことよ」
「かう、みんなも聴けよ」彼は、周囲の南瓜面を、ズーツと睨みまはした。ありやナ、クレーンが、動いてゐる音さ！」

「なに、クレーンが!?」
一同が、思はず聲を合はせて、叫んだ。

クレーンといふのは、格納庫のやうに巨大な、あの第九工場の内部へ入つて、高さが百尺近い天井を見上げると判るのだが、そこには逞しい鐵骨で組立てられた大きな橋梁のやうな形の起重車が、南北の方向に渡しかけられてゐる。それが、クレーンだつた。その橋梁の下には、重い物體をひつかける化物のやうに、つかい鉤が、太い撚り鋼線で吊つてあり、また橋梁の一隅には、鐵板で圍つた小屋が載つてゐて、その中には、このクレーンを動かすモートルと其の制動機とが据ゑてあつた。制動機を動かすと、この鐵橋は、あたかも川の中で箸を横に流すやうに、廣い第九工場の東端から西端まで、グオーツと音をたてて横に動くのだつた。

「おい、政ツ！」わしは、クレーンの運轉手をやつてゐる男を、人垣の中に呼んだ。

「へえ——」政は、紙のやうに、白い顔をして、おづ／＼と、前へ出てきた。

「クレーンが、眞夜中に動き出すのは、本當かな」

「わたしは、ナなんにも、存じませんです。しかし、クレーンのスキツチは、必ず切つて歸りますで、

眞夜中に、ヒヨロヒヨロ動き出すなんて、そんな妙なことが……」

そこまで云つた政は、狂人の發作みたいな様子となり、言葉のあとをブツブツ口の中で呟いて、それから急に氣がついたかのやうに、ワナワナ慄へる兩手を、周章で背後に隠したのだつた。

「よオし、今夜は、一つ正體を確かめてやらう。いゝか、みんな夜中の十二時を廻つたら、裏門前に集るんだ！」

2

合宿所の、三階の、廊下を、バタ／＼と音をさせて、近づいてくる登音があつた。

「組長さん、おいでですか——」

その登音は、「舎監居間」と書いた木札を、釘で打ちつけてあるわしの室の入口の前で停るが早いか、さう、聲をかけたのだつた。

「おう。誰かい」

「栗原です。倉庫係の栗原ですて」

「栗原？ 栗原が、なんの用だツ」

「へえ、ちよつと工場の用なんで……」

「なにツ。工場の用で、どんなことだか云つてみる」

「へえ、實は——」栗原は、言ひ洗んでゐる風だつた。「先日お持ちになりました乙型スウキツチが、急に入用になりましたんで、いただきに参つたんですが……」

「スウキツチなんか、明日にしろ」

「ところが生憎、工場にて至急使ふことになつたんで、直ぐ持つて行かないと困るんでして、實にその……」

「よオし、いま入口を開けるから、ちよつと待て」
暫くして、わしは、入口の扉を、サツと開けた。

「どうも相済みません」栗原は、わしの顔を見るなり、ペコリと頭を下げた。

「お前、この間、さう云つたぢやねえか。このスウキツチは、當分不用だから、いつまでもお使ひなさい、とな」

「申譯がありませんです」栗原は、ひどく恐縮してゐる態で、ペコリと頭を下げた。「組長さんは、スウキツチの圖面を書きたいから御持ちになるといふので、そんな簡単な御用ならと、栗原は帳簿に書かないで、御貸したんです。ところが、今急に、擴張工事係の方から、在庫になつてゐる乙型スウキツチは全部數を揃へて出せといふ命令なんで。どうも已むを得ず、ソノ……」

「文句はいゝや。さア、早く持つてゆけ」

わしは、抱へてゐた乙型スウキツチを、彼の前に、さしだした。

乙型スウキツチといふのは、長さ一尺五寸、幅七寸の、細長い木箱に收められた大きなスウキツチ

で、硝子蓋を開くと、大理石の底盤の上に幅の廣い銅リボンでできた骨氣斷線用の刃がテカテカと光り、エポナイト製の、しつかりした把手がついてゐた。このスウキツチ一つで、鳥渡としたモートルの開閉は充分できるのであつた。

「栗原さん、俺が持つてゆくよ」

横の方から、思ひがけない、違つた聲がして、頭髪をモシヤモシヤにした若い男が、姿を現した。

「だツ、誰だ。手前は……」

わしは、戸口の蔭から、イキナリ飛び出した男に、駭いた。

「こいつは、横瀬といひましてネ。若い男の代りに栗原が解した。この栗原の遠縁のもんです」

「何故ひつばつてきたんだ」

「いまお願ひして、倉庫で、私の下を働かせて、いただいでるのです。といふのは、下町の薬種屋で働いてゐたのが、鹹首になりましたナ、栗原のところへ、轉りこんできたのです」

「ふウん、お前さん、薬屋かア」

珍らしさうに、スウキツチの表や裏を、眺めてゐる若い男に、わしは、聲をかけた。

「薬屋だつたんです」その横瀬は、ぶつきら棒の返事をした。

「どうだらうな。わしは、お前さんに、ちよつと頼みたいことがあるんだが」

「骨の折れねえことなら、手傳ひますよ」

「これッ——」栗原が駭いて、横瀬の汚い職工服を、ひつばつた。

「骨は折れねえことだ。ちや、栗原、お前の若い衆を、ちよいと借りたせ」

「へえ、ようがす」

栗原は、若い横瀬から、スウキツチの箱をうけとると一人て歸つて行つたのだつた。

「さあ、こつちへ、入んねえ」

「はあ——」

「わしは、鳥渡、お前さんに、見て貰ひてえものがあるんだ」

「俺に、判るかなア」

「ものは、これなんだ」わしは、机の抽斗しの奥から、新聞紙にくるんだものを出してきた。

「この硝子で出来たものはなんだね」わしは、それを横瀬に手渡した。

「これは、注射器の一部分ですよ」

「注射器？ さうだらうな、わしも、さう思つた。それで、何の注射器か、お前さんに判らないかい」

「さア——」横瀬は、モシヤ／＼頭髮を、指でゴシゴシ搔いた。「注射器は判るが、尖端についてゐる針

が無いから、見當がつかねえ」

「ちや、此處んところを見て呉れ。この注射器の底に、ほんのり茶つばいものが附いてゐるが、これは、

なんて薬かい」

「うん、なんか附いてはゐるが——」若い男は注射器を、明り窓の方に透かして、その茶色の汚點に眺め入つた。「電燈は點きませんか」

「生憎、この合宿ぢや、六時にならないと、點かないんだ。まだ三十分も間があるよ」初夏の夕方は、

五時半を廻つても、まだ大分明るかつた。

「さあ、わかりませんね。こんなに分量が少くちや見當がつかない。薬品のやうでもあり、血痕のやう

でもあり……」

わしは、グツと唾を呑みこんだ。

「もう一つ、見て貰ひたいものがある」わしは、新聞紙包みの中から、もう一つの品物を取りだした。

「これは何かね」

「こんなもの、どつから持つて來たんです」横瀬は、ピカ／＼光る、その外科道具のやうなものを手に

取上げ、ニヤ／＼笑ひだした。

「何に使ふ品物かね」わしは、横瀬の質問には答へようとせず、同じことを、聞きかへしたのだつた。

「一口に云へば——」と、わしの顔をシロリと見て「子宮鏡といふ、産婦人科の道具だね」

「よし、判つた。」わしは、ピカ／＼するそれを、横瀬の手から、ひつたくるやうにして、元の新聞紙の

中に、包んでしまつた。

「いや、御苦勞だつた」と、わしは挨拶をした。「ところで、もう一つだけ、お前さんに見て貰ひたいも

のがあるんだが」

「あるんなら、早く出しなせえ」

横瀬は、面倒くささうに、云つた。「ここには、無いんだ。ちよつと、近所まで附合つてくれ」

「ようがす、ドッコイショ」

横瀬は、「ひびき」を一本、衣袋から出して口に銜へると、火も點けないで、室内をジロジロと、眺めまはした。

「何を見てるんだ」わしは、訊いた。

「マツチは無いのかね」と彼は云つた。

3

合宿の門を出ると、溝くさい露地に、夕方の、氣ぜはしい人の往來があつた。初夏とは云つても、遅れた梅雨の、濕りがトツブリ、長板塀に浸みこんで、そこを毎日通つてゐる工場街の人々の心を、いよ

いと重くして行つた。

道では、逢ふ誰彼が、挨拶をして行つた。

向うから、見覚えのある若い女が、小さい風呂敷包みを抱へてやつてきた。

「お前さん」と其の女は、わしの連れを、チラリを睨みながら云つた。「これから、何處へゆくんだい」

「お前こそ、どこへ行くんだい」

「ふん、見れば判るぢやないか。今夜は、徹夜作業があるんだよ」

「夜業か。まアしつかり、やんねえ」

「お前さんの方は、どこへ行くのさア」その女は、一歩近づつて、云つた。

「ちよいと、この仁と、用達しに」

「さうかい。あのネ」女は、口を、わしの耳に近づけて、連れに聞かせたくない言葉を囁いた。

「……」わしは、黙つて、肯いた。

女に別れると、後から、附いてくる横瀬が、わしに聲をかけた。

「今の若いひとは、なかなか、美しい女ですネ」

「さうかね」

「何て名前です」

「おせい」

「大將の、なにに當るんです」

「馬鹿！」

露地を二三度、曲つた末に、わし達は、目的の家の前へ來たのだつた。

わしは、雨戸を引かれた、表の格子窓に近づいて、家の内部の様子を窺つた。幸ひこのところは、露

地裏の、そのまた裏になつてゐる袋小路のこととて、人通りも無く、この怪しげな振舞も、人に咎められることがなかつた。とにかく、家は留守と見えて、なんの物音もしなかつた。わしは、連れを促して、裏手に廻つた。

勝手元の引戸に、家の割には、たいへん頑丈で大きい錠前が、懸つてゐた。わしは、懐中を探つて、一つ鍵をとり出すと、鍵孔にさしこんで、ぐつとねぢつた。錠前は、カチャリと、もの高い音をたてて、外れたのだつた。

わしは、後を見て、横瀬に、家の中へ入るやうに、目くばせをした。

障子と襖とを、一つ一つ開けて行つたが、果して、誰も居なかつた。若い女の體臭が、漂つてゐた。

壁にかけてあるセルの單衣に、合はせてある桃色の襦袢の襟が、重苦しく艶めいて見えた。

「いいのかね。かう上りこんでも」

横瀬は、さすがに、氣が引けてゐるらしかつた。

「叱ッ——」わしは、睨みつけた。

わしは、逡巡するところなく、押入をあけた。上の段に入つてゐる蒲團を、靜かに下ろすと、その段の上に登つた。そして、一番端の天井の板を、ソツと横に滑らせた。そこには、幅一尺ほどの、長方形の、眞暗な審がポツカリ明いた。そこでわしは、兩手を差入れて、天井裏を探つたが、思ふものは、直ぐ手先に觸れた。手文庫らしい古ぼけた函を一つ抱へ下ろしてきたときには、横瀬は泉氣にとら

れたやうな顔をしてゐた。

わしは、急製の薄つべらな鍵を、紙入の中から取出すと、その手文庫を、難なく開くことに、成功したのだつた。その中には、貯金帳や、戸籍謄本らしいものや、徴の生えた寫眞や、其他二三冊の繪本などが入つてゐたが、わしが横瀬の前へ取出したものは、手文庫の一隅に立ててあつた二〇〇〇入の硝子壺だつた。それには、底の方に、三分の一ばかりの黒い液體が残つてゐた。

「さア、こいつだ」わしはソツと壺を横瀬に渡した。「最後に、お前さんから、教へて貰ひたいのは」

「さうだね、これは——」横瀬は、十燭の電燈の光の下に、小さい藥壺を、ふつてみながら、いつまでも、後を云はなかつた。

「判らねえのかい」

「うんにや、判らねえことも、ねえけれど」

「ちや、何て藥だい」

「そいつは、云ふのを憚る——」

「教へねえといふのだな」

「仕方が無い。これア藥屋仲間で、御法度の藥品なんだ」

「御法度であらうと無からうと、わしは、訊かには、唯では置かねえ」

「脅かしつこなしにせませうぜ、組長さん。そんなら云ふが、この藥の働きはねえ、人間の柔い皮膚

を侵蝕する力がある」

「さうか、柔い皮膚を、抉りとるのだな」

「それ以上は、言へねえ」

「ンぢや、先刻みせた注射の底に残つてゐた茶色の附着物は、この薬ぢやなかつたかい」

「さア、どうかね。これは元々茶褐色の液體なんだ。ほら、振つてみると、硝子のところに、茶つぼい色が見えるだらう」

「それとも、やつぱりあれは血のあとか。いや大きに御苦勞だつた。こいつは少ないが、當座のお禮だ」

「さう云つて、わしは、十圓紙幣を、横瀬の手に握らせ、今日のことは、堅く口止めだといふことを、云ひきかせたのだつた。」

いよいよ、夜は更けわたつた。

月のない、眞暗な夜だつた。風も無い、死んだやうに寂しい眞夜中だつた。

かねて手筈のとほり、工場の門衛番所に、柱時計が十二の濁音を、ポーン、ポーンと鳴り終るころ、組下の若者が、十名あまり、集つてきた。わしは、一と通りの探檢注意を與へると、一行の先頭に立ち靜かに、構内を第九工場に向つて、行進を始めたのだつた。地上を匍ふレールの上には、既に、冷たい

夜露が、しつとりと、下りてゐた。

「電纜工場は、夜業をやつてゐるぜ」

「満洲へ至急に納めるので、忙しいのぢや」

誰かの聲に、そつちを見ると、電纜工場だけが、睡り男の心臓のやうに、生きてゐた。高い、眞黒な大屋根の上に、鉛を踏かす爐の熱火が、赫々と反射してゐた。赤ともつかず、黄ともつかぬ其の凄まじい色彩は、湯のやうに沸つてゐる熔融爐の、高温度を、警告してゐるかのやうであつた。

「組長さん」組下の源太が云つた。「おせいさんは、もう身體は、いいですかい」

おせいには、實は、わしの妾だつた。だが、世の中の妾とは違つて、晝間は、この工場で働かせ、わしの顔で、電纜の紙捲きといふ軽い仕事をやらせ、日給は、女工として最高に近いものを、會社から拂はせてあつた。夜になると、身並ひをして、合宿から抜け出してゐるわしを迎へて、普通の妾となつた。

「うん、もういゝやうだ。今夜も、あの電纜工場で、稼いでゐる位だア」

「うふ、組長は、萬事ぬかりが、ねえな」

「なんだとオ——」わしは、ビリ／＼する神経を、やつとのことと抑へつけた。「ちよつと電纜工場へ寄つてくるから、五分間ほど、ここで待つてゐて呉れ」

わしは、間もなく出てきた。

電纜工場を通りすぎると、その先は、文字どほりに、無人郷であつた。

漆黒の夜空の下に、巨大な建物が、黙々として、立ち並んでゐた。饅えくさい鋪鐵の匂ひが、ブーンと鼻を刺戟した。いつとはなしに一行は、びつたりと寄り添ひ、足音を忍ばせて歩いてゐた。

「うわッ！」

建物の軒下を傳ひ歩いてゐた男が、悲鳴をあげた。皆は、ギョツと、立ち停つた。

「な、な、なんだッ」

「工場に、霧がへるが出るなんて、知らなかつたもんで……」

きまりわるさうな、低い聲だつた。

「ドーン」

二三間先の、鐵扉が、鈍い音をたてて鳴つた。

「ウウ、出たッ！」

「や、喧しいやい！」

わしは呶鳴つた。霧がへるを蹴飛ばした先生は、黙つてゐた。

ひい、ふウ、みツツ……

やつと、第九工場の、入口が見える。

ぼツと、丸い懐中電燈の光の輪がぶつつかつた。

錠前には、異常がない。門衛から借りてきた鍵で、それを外させた。ガチャリと錠の開いたのが、骨

の崩れる音のやうだつた。

「さア皆、懐中電燈を消すんだ」わしは扉の前に突立つて云つた。静かに、中へもぐりこんだら、たとへ、どんな吃驚するやうなことが起らうと、聲を立てちや、ならねえ。よしかッ。懐中電燈も、わしが命令するまでは、どんなことがあつても、黙けるなよッ、折角の化物を、遁がしちまふからな。いゝかッ」

一同は、それぞれ、背いた。

重い鐵扉を、細目にあけて、ブル／＼と慄へてゐる組下連中を、一人々々、押こんだ。最後に、わしが入つて、扉をソツと閉めた。

工場の中は、油の匂ひが、ブン／＼してゐた。そして、鼻をつままれても判らぬほど、絶對暗黒であつた。何かしら、闇の中から、大きな手が出てきて、喉首をグツと締めつけられるやうな氣味の悪い壓力を感じたのだつた。

誰もが、黙つてゐた。番號をかけるわけにもゆかない。わしは、戸口のところから、手さぐりに、一人、二人と、人間の身體を數へて行つた。彼等は、わしの手が觸る度に、非常に驚愕してゐる様子であつた。そして、申し合はせたやうに、隣り同志がビタリと身體を寄せ、手を繋ぎ合はせてゐた。

「十三人」たしかに、全員が、入口に近い壁際に、餌のやうに、ビツタリ、附着してゐるのであつた。それから、時が軸の上を、靜かに移つてゆくのが、誰にもハッキリと感ぜられた。時の經つのに随つて、一秒また一秒と、恐怖の水準線が、ゲイガイと昇つてくるのだつた。

二分、三分、四分、五分——
夢中で、隣りの男の手を、握りしめた。冷たい汗が、腋の下に滲み出して、聽てタラリと肋骨を、駆け下りた。

「キイーツ」

一同は、はッと、呼吸をつめた。

「キイーツ、キイーツ」

呀ッ、いよいよ、泣きだしたのだ。彼等はそれを鼓膜の底に聽いた瞬間、板のやうに全身を硬直させた。

「キイーツ、キイーツ、ぐらッ、ぐらッ」

彼等は、見えない眼を閉ぢた。

「キ、キ、キ、キ、キイーツ」

もう堪りかねたものか、一行のうちから、サッと、懐中電燈の光芒が、射るやうに、高い天井を照した。

「ぐわーッ、ぐわーッ……」

一同は、その怪音のする方を、等しく見上げた。

「呀ッー」

「ク、クレーンが……」

懐中電燈の薄ら明りに、はじめて照し出された怪物は何であつたらうか。それは、あの巨大な鐵骨で組立てられたクレーンが、物凄じい響をあげて、呀ッといふ間に、全速力で一同の頭上を通り過ぎたのであつた。

「ひえーッ」

といふなり、彼等は、折角手にした懐中電燈も其場に抛り出して、云ひあはせたやうに、ベタ／＼と、地上に尻餅をついてしまった。

「電燈を、點けろッ」

わしは、クレーンがまだ動いてゐる裡だつたが、決心をして、號令をかけた。そして眞先に懐中電燈を照して、一同の方へ向けた。彼等の顔は、いづれも、泣かんばかりの表情をして見えた。

「しつかりしろ、探検は、これからだッ」

わしは、一同を激勵した。

皆の懐中電燈が、揃つて點くと、大分場内が明るくなつて、元氣がついたやうだつた。

「クレーンを動かすスイッチが、入つてゐるかどうかを調べるんだ。オイ、政はゐるかッ」わしは、クレーン係の、若い男を呼んだ。

「へえ」と政は、死人のやうな顔を、こつちへ向けた。「どうか、その役割は、勘辨しとくんない」

さう云つて、彼は、手を合はせて、こつちを拜んだ。

「莫迦いふな」わしは叱りつけた。「手前が、調べねえぢや、係りて無えコチトラには譯が判らねえぢやねえか」

尻込みする政を、兩脇から引立てて、捜査に取懸つた。

「このスウキツチは、開いてゐる」一同が入つた入口の側の壁上で、その入口から六七間奥まつたところに大きいスウキツチが取附けられてあつた。その硝子蓋の上から指しながら、クレーン係の政が呻つた。

「このスウキツチが、開いてゐるなら、クレーンの上へ、電氣が行きつこ無いんです」

「だが可怪しいぞ」とわしは云つた。「クレーンは確かに動いたんだ。クレーンはモートルでしか動けないんだ。このスウキツチが、開いてゐて動く筈はない。開いてゐるやうでも何處か、電氣が通ふやうになつてゐるんぢやないか。よく中を開けて調べて見ろ」

カチャ／＼と音をさせて、スウキツチの硝子蓋を開いてみたが、それは普通のスウキツチが、明かに開かれた状態になつてゐて、外にインチキな接續は發見せられなかつた。

「たしかに、このスウキツチは開いてゐます」政は泣き聲で云つた。

「よし、では念のために、クレーンの上へ昇つてみよう」わしは云つた。

「なに、クレーンへ昇る——」

一同は、互に顔を見合はせて、恐怖の色を濃くした。

「政、昇れ！」

「いやア、救けて下さい」政は、ボロ／＼涙を出して、喚くのであつた。

「ぢや、わしが先登に昇るから、直ぐうしろから、ついて来い。いゝカツ」

わしはさういふなり、壁際へ進んで、クレーンに攀ぢ昇る冷たい鐵梯子へ、手をかけた。

「矢張り、クレーンのスウキツチも、開いてゐます」

三人の男にさんざん世話をやかせ、漸くわしのあとから、クレーンの上まで擔ぎあげられた政は、モートルの横の、配電盤をひと目見ると、怖ろしさうに、さう云つた。

「さうか。確かに、それと間違ひが無けりや、降りることによしよう」

わし達は、また困難な鐵梯子を、永い時間かゝつて、一段一段と、下りて行つた。

下まで降りきらない裡から、残つてゐる連中は、クレーンの上のスウキツチが開いてゐたか、どうかについて、尋ねるのであつた。

「政に見て貰つたがな」わしは一同の顔を、ずツと見廻した。

「クレーンのスウキツチも開いてゐたよ」

「それぢや、いよくあのクレーンは……」そこまで云つた職工の一人は、自ら恐ろしくなつて、言葉

を切つてしまつた。

「……電氣の力で動いたのでは無い、といふことになる」と私は、代りに、云つた。

「誰が、動かしたんだッ」

「上つて、四方に氣をつけて見たが、隠れてる人間も居なかつた。なア、源太、友三、雲的」

「さうだ、さうだ」

「もつとも、人間一人で動くやうなクレーンぢやない」

「ああ、すると誰が動かしたんだ」

「組長さん。もう我慢が出来なくなつた。どうか、ここから、出して下せえ」

「俺も、出るッ」

「いや、出ることならぬ」わしは呟つた。「クレーンを動かした者が、判らぬ限り」

「組長さん、そりや無理だよ」源太が泣き聲を出した。「ありや、生きてる人間のせむぢやないんだ」

「なんだとオ——」

「あのクレーンには、何か怨靈が憑いてゐて、そいつがクレーンの上で、泣いたり、クレーンを動かしたりするんだ」

「ああッ——」

それを聞くと、誰もが、痛いところへ觸られたやうに、跳び上つて駭いた。

「おお、組長」雲的が云つた。誰かが、外で喚いてゐるやうですぜ」

「なに、外で喚いてゐるッ」わしは、豫期しないことに吃驚して云つた。なるほど、多勢の聲で、何やら喚いてゐるのが、遙かに聞こえるのであつた。「ぢや、みんな、外へ出よう」

一同は、ワツといつて、入口の扉の方へ、先を争つて駆け出した。ガラ／＼と、重い鐵扉が、遠慮會釋なく、引き開けられる物音がした。

「おう、組長 大變だア」甲高い聲で叫ぶものがある。

わしは、ギクリとした。

「組長」わしの胸倉に縋りついたのは、電纜工場の伍長をしてゐる男だつた。「おせいさんが、大變だッ」

「なに、おせいが、一體どうしたといふんだ」

「おせいさんが——」伍長は、苦しさに言ひ澁んだ。「おせいさんが、熔融爐へ、眞逆に、飛びこんでしまつた。」

「熔融爐へ、飛びこんだ、といふのかッ」

わしは、それを聞くなり、おせいの働いてゐた電纜工場めがけて、矢のやうに駆け出した。

わしのことには、組下のもや、惨事を報せに來た連中が、バタ／＼と追ひついてくるのであつた。電纜工場の入口を一步入ると、凄慘極まりなき事件の、息詰まるやうな暑氣が、感ぜられたのだつ

赤 外 線 男
た。皎々たる水銀燈の光の下で仕事をする人々は、技師といはず、職工といはず、女工といはず、場内の一隅に据ゑられた、高さ五十尺の太い熔融爐の周囲を取巻いて、一齊に上を見上げてゐた。熔融爐の側には、松の樹を伏したやうな大電線が、長々と横はつてゐたが、これは忘れられたやうに誰一人ついてゐるものは無かつた。

「駄目だア、何にも見えねえ」

「着物の端も、残つてゐねえよ」

そんなことを叫びながら、熔融爐の頂上に昇つてゐたらしい男工達が、悲痛な面持をして降りて来た。白い手術着を着て駆けつけた醫務部の連中も、形のない怪我人に對して、策の施しようも無く、皆と一緒に、まごまごしてゐるだけだつた。

「どうも、お氣の毒でしたが」工場長が、わしの傍へ近づくと、興奮した語調で云つた。「氣がついたときは、おせいさんが、もう、熔融爐の、殆んど頂上まで、昇つてゐたんです。でも、それと氣がついて、（停める、下りろ）と、下から叫びましたが、何も聞えない風で、アレヨ、アレヨと云つてゐるうちに、火焰の中へ飛びこまれたやうなわけ……」

わしは、云ふべき言葉もなかつた。

104
「おせいさんは、覺悟の自殺を、やつたらしいですよ。どうした譯か判りませんが」この工場の組長が、續いて口を挟んだ。

そこへ、ドヤ／＼と皆を掻きわけて、前へ、飛び出した者があつた。

「ああ、死んぢまつた。おせいさん、俺を残して、何故死んでしまつたのだ」

氣違ひのやうに喚いてゐるのは、クレーン係の政だつた。

「オイ、政。どこへ行くんだ」政に追ひ縋つてゐるのは、雲的や源太だつた。

「おお、おせいちゃん、おれも、直ぐ行くよオ——」

「おい、待てと云つたら」

政は、恐ろしい力を出して、源太を投げとばすと、呀ッといふ間に、熔融爐の梯子の上へ、ヒラリと飛び上つた。

工場の人々は、まだ生々しい慘事のあとに續いて、どんなことが起らうとしてゐるかを、早くも悟つて、戦慄の悲鳴をあげた。

「早く、あの男を捉へろ！」

「引ずり下ろせ。あいつは死ぬつもりだぞ！」

「誰か、助けてえ——」

わしは、身體を動かした。邪魔になる人を押しのけて、熔融爐の梯子の下まで来たときに、一足早く、雲的の奴が、梯子に手をかけてゐた。

「うぬッ」

わしは、雲的を、つきとばした。

「わしが助ける」

鐵梯子に掴つて、上を見ると、政は、氣息奄々たる形であるが、早くも半分ばかりの高さまで登つてゐた。わしは、ウンと、腰骨に力を入れると、トン／＼と、手拍子と足拍子と合はせて、梯子をスルスルと攀つていつた。見る見る政とわしとの距離は、短縮されて行つた。もう一息で、政の身體に手が届くといふところで、わしはツルリと、左足を滑らせた。ワツといふ溜息が、下の方から、聞えてきた。もう餘すところは、五六尺しかない。ワンワン、ガヤガヤと、焦躁さうな群衆の聲が聞える。わしは、速力をグツと速めた。

氣が氣ぢやなく、上を見ると、政はすでに熔融爐の縁から上へ、上半身を出してゐる。機會は、今を措いて、絶対に無い。しかしわしの手は、まだ三尺下にしか届かない。

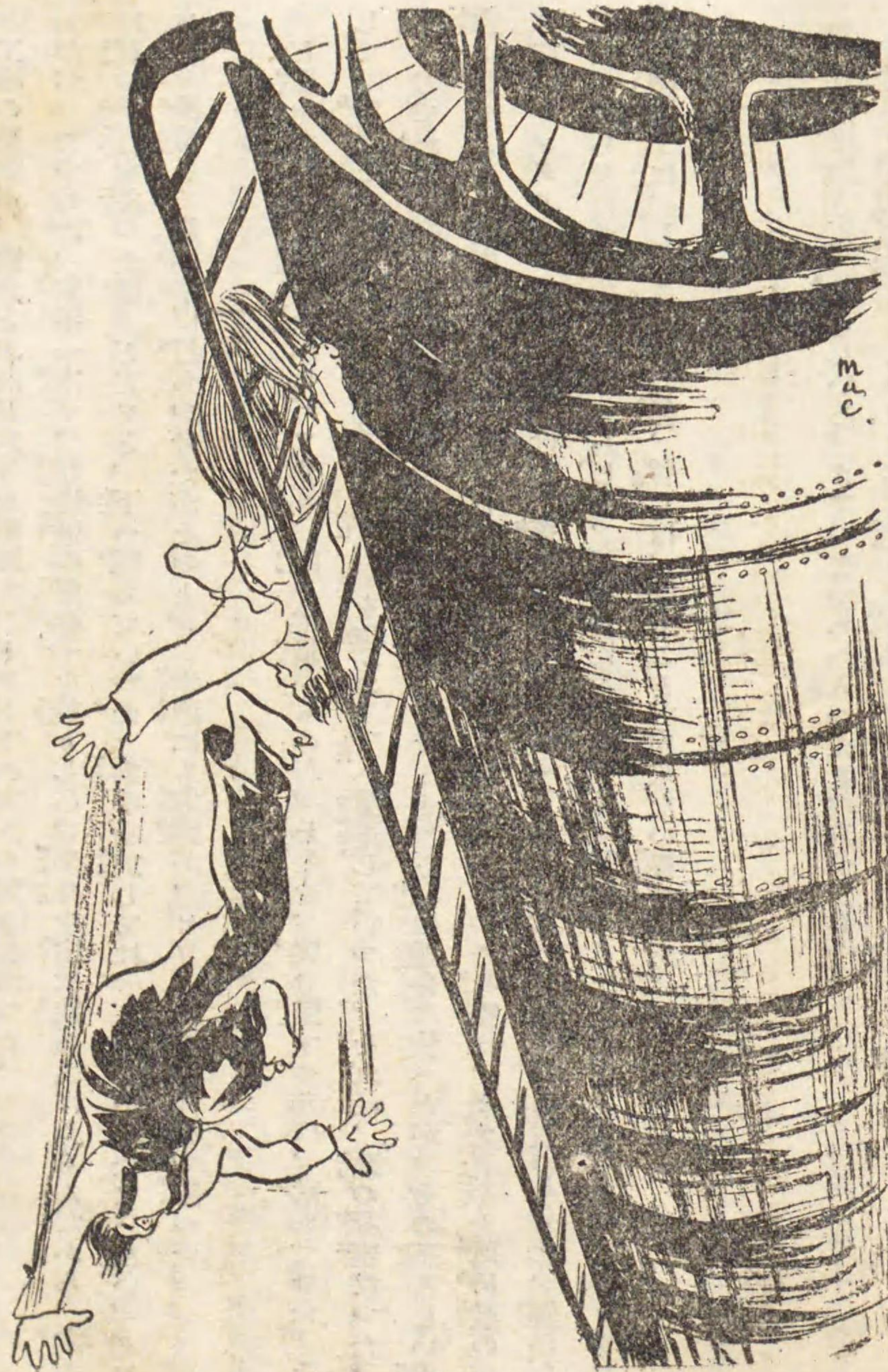
ワンワン、ガヤガヤの聲も、耳に入らなくなつた。

政は身體を、くの字なりに、ぐつと曲げていよいよ飛びこむ用意をした。

「やッ！」

懸聲諸共、わしは、身體を宙に浮かせて、左手をウンと、さしのべると、ここぞと思ふ空間を、グツと掴んだ。――

手應へはあつた。



工場の屋根が、吹きとぶほど大きな歓聲が、ドツと下の方から湧きあがつた。だが、こつちは、右手一本で、熔融爐の鐵梯子を握りしめ、全身を宙に跳ねあげたもんだから、左手に政の足首を握つた儘、どどツと、下へ墜ちていつた。右手を放しては、こつちが、たまらない。グワんと、横腹を、鐵梯子に打ちつけたがそのとき、幸運にも右脚が、ヒョイと梯子に引つ懸つた。

(しめたツ)

と思つた瞬間、頭の上からバツサリ、熱くて重いものが、わしを、突き墜すやうに、落ちてきた。そして、呀ツといふ間に、ヌラヌラと、顔や腕を撫でて、下へ墜落していつた。それは、政の身體だつた。辛うじてわしが掴んだ政の身體だつた。(これを離しては……)と私は懸命に忪へたが、その恐ろしい重りに勝つことが出来ず、遂にツルリとわしの指の間から脱けてあいつの身體は、ヒラ／＼と風呂敷のやうに、コンクリートの床を目懸けて、落ちていつた。いや、全く、政の身體は風呂敷のやうに、舞ひながら、墜ちて行つたのだつた。わしは、どうしたものか、急に笑ひたくなつて、クツクツ、ウフウフと、鐵梯子に、しがみついた儘、暫くは、動くことが出来ない程だつた。

6

「これは横瀬さん。珍らしいね。さア、こつちへ入つたり、入つたり」

わしは、珍客の來訪にあつて、だ、廣い、合宿の舎監居間の一室へ招じ入れた。

「今日は、何の御用かな」わしは尋ねた。

「實は一つ聽いていたことがあるのでして……」横瀬は、例のモジヤモジヤ頭髪に五本の指を突込むと、ゴシゴシと掻いた。

「どんな話かしらぬが、言つてごらんせえな」わしはチラリと、置時計の方を見たが、もう午後十時に近かつた。

「ぢや、聽いて貰ひますが」さう云つて横瀬は、蓑を一本、口に銜へた。「これは、俺の知つてゐる、或る男の、素晴らしい計畫なんだ。ねえ、その男は、自分の情婦を、若い男に失敬されちまつたんだ。いや、おまけに、情婦といふのが、若い男の胤を宿しちまつた。い、でですか。これが普通の場合だつたら、旦那どのの胤だと、胡魔化せるんだが、生憎と、その旦那どのといふのは、女に子を産ませる力がないことが醫學的に判つてゐるのだ。それで、胎の子を、胡魔化しやうもないので、若い二人は秘かに會つて泣きながら相談した。い、智慧も見付からぬ裡に、女の身體はだん／＼と隠せない程、變つてくる。たうとう仕方なしに、胎の子には罪なことだが、墮胎をすることに決心をした。若い男は、墮胎道具と藥品を、さるところで手に入れて、女を呼びだした。二人は非常に人目を忍ぶ事情にあるといふのが、これが鳥渡でも、旦那どのの耳に入れば、二人とも殺されてしまふに、きまつてる。そこで誰にも知られぬ秘密の逢ひ場所といふのが必要だつたが、それは、たつた一つあつた。どこだと云ふと、若い男の勤めてゐる工場のクレーンの上だつた。若い男は、クレーンの運轉手なんだ。工場が引けてしまふ

と、あの廣い内部が、がらん胴だ。幸ひ女も、工場の案内を知つてゐた。といふのが、その女も工場に働いてゐたのだ。女は戀しい男に逢ひたいばかりに、眞暗な工場に忍び入り、非常に高い鐵梯子を女の手で昇つたり、降りたりしたのだ。さて墮胎手術も、勿論その高いクレーンの上で、やることになつた。若い男は教はつて來たとほり、道具を女の身體に、挿し入れて、或る藥液を注入した。それは或る時間の後になつて、成功したことが始めて判つた。しかし女は、暫くの間、工場を休み、病臥しなければならなかつた。だが折角の二人の苦心も水の泡だつた。といふのが、且那どのが、女の様子から、疑惑を生じたためだつた。その男は非常に嫉妬深い奴だつたが、人一倍、利口な男なので、それと色には出さず、さまざまの苦心をして、情婦をめぐる疑雲について、發見につとめた。鬼神のやうな其の男は、なにもかも知つてしまつた。二人の身邊から、歴然たる證據も擲んだのだつた。それより、ずつと前、且那どのは、大體の輪廓を知つたので、憎むべき二人に對して、どんな復讐をしようかと、畫策した。その結果、考へ出したのは、世にも恐ろしい二人の自滅計畫だつた。彼は、二人が墮胎を計つた第九工場といふのに、(夜泣き鐵骨)といふ怪談を植ゑつけた。その實、彼がコツソリ、夜中になると、工場へ忍びこみ、自分で、クレーンをキイ／＼云はせたのだ。最後に、彼自身が、化物探検隊の先登に立つて眞偽を確かめたが、上と下とのスウキツチが、どつちも開いてゐるのに、クレーンが、轟々と動いたといふので、これはいよいよ、怨靈の仕業といふことに極まつた。その實、その且那先生が、先に立つて、一々スウキツチを外して置いたのだ。怨靈の仕業といふことになる、一番戦慄を感じたのは、若

い男と、例の女だ。二人とも大いに思ひ當るところがある。といふのは、自分達が手を下して闇から闇へ送つてしまつた胎兒の怨靈のせりに違ひないと思ひこんでしまふ。さア、かうなると、且那どのは、計畫は、いよいよ思ふ壺に嵌つていつたといふわけだ。探検の結果、これは怨靈の外に、理由がつかないと決定した夜のこと、且那どのは、夜業をしてゐる情婦のところへ行つて、遂に引導の言葉を渡してきた。それは、のつびきならぬ證據を手に入れたので、明日になつたら、警察へ告發するぞと脅したのだ。情婦は、思ひ餘つて、自殺の意を決し、自分の働いてゐる工場の熔融爐に飛びこんで、ドロ／＼に熔けた鉛の湯の中に跡方もなく死んでしまつた。こんどは、若い男の番だつた。且那どのは、探検隊の中に、その男を入れることを忘れなかつた。若い男を、ジリ／＼と苦しめてゆくのが、たまらなく快感を喫つたのだつた。若い男は、クレーンが獨りで動き出す大恐怖の前に、永い間、ひき据ゑられてゐた。更に、戦慄を禁じ得ないクレーンの上へ、引張り上げられたり、又降ろされたりした。そこへ、突如として、女の自殺を聞いた。それには且那どのも遽でた位だ。若い男は、女の飛込んだ熔融爐目懸けて、駆け出して行つた。彼も女の跡を追つて、この爐の中で死なうと決心した。さう思ふと、彼は脱兎のやうに、熔融爐の鐵梯子を、かけ上つたのだ。友人の一人が助けようとして、後から上らうとすると、そこへ、且那どのが、飛び出して、彼をつきとばした。そして、且那どのは、恨み重なる男のあとにつづいて梯子を上つて行つたのだ。これを見てゐた人々は喝采した。それもさうだらう。いやたつた一人を除いてはネ。そいつは、工場の隅から、コツソリこの場の光景を眺めてゐた俺によく似た男さ、はッはッ

はッ。だが、その男にも、旦那どのの復讐が、どのやうに行はれるのか、見當がつかなくつた。ひよつとすると、旦那どののは、わざと梯子昇りの速力を落として、残念ながら、追ひつけなくて、若い男を殺してしまつた！と云ひわけするのかと思つてゐたが、見てみると、どうやら、さうではない。いや、それは、鬼のやうに恐ろしい計畫だつた。旦那どのの考へは若い男が一旦飛び込んで、熱鉛のため赤爛れに爛れたところで若い男の死骸をひつぱり出すことにあつた。俺は旦那どののが、梯子の上で嬉しさうに笑つてゐるのに感付いた唯一の人間だつたかも知れない。若い男は、彼の手を離れて、コンクリートの床の上に叩きつけられたが、二た眼と見られた態ぢやなかつた。旦那どののは、別に咎められもしなかつた。

「面白い話だなア、若けえの」わしは、靜かに云つた。「だが一つ腑に落ちねえことがあるから尋ねるが、探検隊が工場の暗闇の中にあるとき、クレインが轟々と動いた。直ぐ灯をつけたが、下のスウキツチは外れてゐた。いくら其の悪人が器用でも、電氣なしで、あのクレインは動かせないだらうぜ」
 「そんなトリツクに氣がつかない俺ではないよ。その旦那どののは、クレインを動かすスウキツチと、同じ型の、ソレ乙型スウキツチよ、あれを工場の栗原さんから借りて、暗闇で音をたてずスウキツチの開閉をすることを練習したんだ」

「出鱈目を云ふな」

「出鱈目ではない。では、證據を出さうかね。その旦那どののは、工場の入口と、スウキツチまでの距離

と、その取付けの高さを正確に測つて来て、この舎監居間の前の廊下に、それと同じ遠近に、借りて来たスウキツチをひっかけ、眞夜中になると、暗闇の中で、練習をしたのだ。嘘と思ふなら、舎監居間の戸口から六間先き、廊下から六尺の高さのところに、二本の釘跡があるが、その寸法と、工場のスウキツチの位置とを較べて見ねえ。びつたりと同じことだ。それから二本の釘の距離は、その旦那どのが借りてゐたスウキツチの二つの孔の間隔と同じことだが、實はそのスウキツチは製作の際に間違へて、孔の間隔を廣くしすぎたので、この廊下の釘の距離も、普通のスウキツチには見られない特別の間隔になつてゐる筈だ。こゝらも、宿命的な證據といへば言へるだらう。ウン、ぎやーッ」

わしの手には、お喋り探偵の脳天を叩き破つたハムマーが、血にまみれて、握られてゐた。それは、彼氏がお喋りに夢中になつてゐる間に、卓の蔭から、コツソリ取出したものだつた。だが、此の男を殺してしまつたお蔭で、隠忍十年、殺人癖から、遠去かつてゐた此のわしの身體には、久しく眠つてゐた悪血が、一時に飢ゑに目覺めて、湧きあがつてきたやうだ。わしの名か？「片眼の岩」と云やア、ちつとは人に知られた吾儘者だアな。(完)

三角形の恐怖

それぢや今日は例の話をいよ／＼することにしますかな。罪ほろぼしにもなりますからね。さうです。罪ほろぼしです。私の若い時のね。いや艶つぽいことなんか身に覚えはありませんから、アテられるなんて事はありませんよ。それは罪は罪だと思ひますよ、今でもね。さうですもう二十年も昔になりませうか。先帝陛下が御崩御になつて中野の先の浅川に御陵が出来た頃の話なんですよ。

其の當時私にW大學へ通つてみました。随分若かうござんしたよ、今見たいにこんなにデクデク肥つちやるませんが、中肉中背といふ奴で頬つぺたも赤くて、櫻の蕾かなんそのやうに少しふくらんでましたよ。亡くなつた姉のお友達に電車の中なぞで行き會ふと、

「宗夫さんはいつ見てもコドモさんですわねえ」

と懐しがられたものですよ、やあこんな風なことは言はない御約束でしたね。これは失敬。

其のころ私の家は東中野にありました。中野の邊を省線電車で通りますと淀橋の瓦斯タンクより右の方へ三十度ばかり傾いたところにこんもりとした森が見えますが、あの森の直ぐ下でした。御承知の通り關東一帯に特有な大きい杉の森でして、近所では他のどこの場所よりも高い梢を持つてゐまして、遠

方から見ると天狗の巢でもありやしないかと思はれる位でした。私の家は、その塔の森と呼ばれる眞暗な森と、玉川上水のあとである一筋の小川を距て、向ひ合つてゐました。どつちかと言ふと一寸陰氣な、そして何となく坊主頭に寒い風が當るともいつたやうな感じのするところでした。

ですから學校に居る間は大学生の中にもこんなふざけ方をして喜んでゐる無邪氣な奴が居るかと思はれるやうに陽氣に振舞つてゐましたが學校がすんでから電車を東中野驛で捨て、それから家まで五六丁ほどの道のりを歩いて行くうちにいつとはなく考へ込んでしまふのです。歸つて来て小川の縁に立ちかふさるやうに擴つた塔の森を仰ぐと今までの快活が砂地に潮がひくかのやうにすつと消えてしまつて、眼の下に急に黒い隈が出来たやうな氣になるのでした。

さうなるといつまでも黙りむつとりとして其の日報はつて来た數學の定理の證明を疑つてみたり、其の頃流行の犯罪心理學の書物に讀み耽つたり、啄木ばりの短歌を作つたりしてゐました。

そんな調子の生活の中から私は遂に一つのトツピックスをめつけ出したものです。それは例の犯罪心理學の書物と、自分の勉強してゐる數學との両方から偶然に醸成して来たものであつたのです。私の考へては人間が脅迫の觀念に襲はれる場合に其の對照となるものは、平常其の人間がついつかり忘れてゐたとか、氣をつけてゐなかつたものに偶然注意が向けられた結果急に其のものに對する注意が鋭くなつて遂に一つの脅迫觀念が萌え上つて行くのであつて、其の對照となるものが單純で、且つ至るところに存在してゐるもの程、脅迫觀念を加速度的に生長せしめるのではないかと思つたのです。いや思つた

どころか次の瞬間には必ずさうに違ひないと考へました。さうなるとその儘では抛つておけないやうな気がして、早速これを實驗して事實の上にも明かな結果を出してみたくなりました。

私はそれから色々「單純で、至るところに存在するもの」であつて、人間が「うっかり忘れてゐるもの」をあれやこれやと考へて見ました。考へてゆくうちに私は一つの面白い目標にカチリとつき當りました。

「三角形！ さうだ。」

三角形は三つの線分で作らなければならないこと、出来る最も簡単な空間であります。私たちのやうに數學をしよつちう勉強してゐるものには三角形なんて忘れようとしたつて忘れることの出来ないものですけれど、數學に縁の遠い人なら此の最も簡単な空間であるところの「三角形をいつかり忘れてゐるかも知れないと思ひました。それに三角形の現はす奇異な感情は、圓とか五角形とかのあらはすところとは餘程趣きを異にしてゐて、如何にも我が意を得たる絶好の對照物だと思つたのでした。

私は小さい頃から南京豆の入つてゐるあの三角形の袋が好きでした。駄菓子屋の店先などに丸い箆の中に打ち重ねて盛りあげられた南京豆の三角形の紙袋を見ると買はずには通り過ぎることが出来ない位でした。あの下の方へ細つそりとした鋭角はノウノウとした氣分である子供の食欲を引きつけずには置かないのでした。鋭角と子供の食欲との間には必ずや或る眞理が横はつてゐると私は思つてゐたのです。こんな日頃の感じが今の場合のヒントを與へて呉れたのかも知れません。兎に角私は「三角形の恐怖」

といつたやうなものを或る人間に抱かせてみようと思ひました。

さうなると此度は試驗臺になる人間を見付けなければなりません。それからと言ふものは學校の行きかへりに「三角形の恐怖」を容易にひきおこしさうな人物を一生懸命で物色したものです。十日ほどの辛抱のうち私は頃合ひの犠牲者を到頭見付けることが出来ました。これが例の細田弓之助といふ人物です。この細田氏の名前が弓之助であることや、その時三十三歳であつたことは後に例の新聞記事が出た時始めて知つたやうな譯なものでした。三十三歳とは見えぬ位細田氏は私の拜見した當時からふけ込んでゐました。背は高く、後を向くと肩が寒さうにいかつてゐました。別に寒い日でもないのに青い顔に黒いマスクを懸けて私と同じやうに中野驛におづ／＼と落付かぬ様子で降り立つたのを見つけたのが恰度例のことを念じてから十日目でした。

私は細田氏が東中野驛の附近に家を持つてゐて呉ればよいと思ひました。其の人が特に其の日だけたまたま此の驛に降りたのであつたら其の住居の方へ追ひかけて見てもあまり遠いところなら私の實驗を行ふ上に於ては不便が感ぜられるに違ひありませんでした。が幸にも細田氏はあの驛を下りて私の方とは反對の側に行つたところなんですけれども驛から二丁ばかりのところにあつて可成り大きな家を構へて居りました。これは段々わかつた事ですが、細田氏の當主の次男であつて、當主は數年間からここに居を構へてゐられたのでした。

私は先づ此の實驗を行ふに當つて出来るだけ細田氏は行動を觀察して其の性格を理解したいと思ひま

した。又其の職業も私のやうに理科や工科の人であつたり、或ひは畫家であつても困ると思つて細田氏の行く先々にも度々ついて行きましたが、都合のよい事に細田氏は無職で毎日何をするといふ事もなくブラ／＼してゐる身分で、たまに出掛ける先は病院であつたり、買物であつたりして、友人も案外少いことが判りました。

大體そんなことが判ると私はいよ／＼この犠牲者に對して實驗を行ふことに取りかゝりました。恰度學年試験が漸く済んで一寸ヶ月の休暇が私に與へられてゐました。私の探偵したところによると、其頃細田氏は毎朝神田の白十字會病院まで注射をうけに行くといふことが判つてゐましたので、私は躊躇するところなく事を始めました。

最初の日には私はわざ／＼下町で買ひ求めて來た當時流行の正三角形の皮製墓口を犠牲にすることにしました。この墓口を細田氏の歩む道路上に捨て、置いて拾はせようといふ考へです。私は其の日豫定の時間に三角形の墓口を懷中に忍ばせて細田氏の邸の方へ出向きました。細田氏の宏壯な構の前には広い空地があつて其の中を一本の綺麗な道が三十間程續いてその向うに小ぢんまりとした借家が兩側に立ち並んでゐました。驛へ出るには、細田氏はどうしてもこの道を歩かねばなりません。

神経質の細田氏が病院へ出かける時間は大體午前九時三十分を決つてゐて、必ず其の時間には紋切型に氏の長身が太い御影石の門に現はれるのでした。私は細田氏に拾はれることを信じ乍らも萬一他の御用聞きなぞに拾はれることをも覺悟の中に入れて定刻二分前に門前十歩ほどの路上に其の三角形墓口を

落しておきました。そして直ぐさま身を翻へすやうにして門前につゞく広い空地の片隅に佇んで細田氏の姿の現れるのを今や遅しと待つてゐました。

果して間もなく細田氏は例の力なさうな姿を門前にはあらはすと、スタコラと白い路をすゝみ出ましたが、どんな無神経ものゝ眼にでも氣がつかずゐない赤い三角形の墓口はやす／＼と細田氏の注視の標となり、氏の桐の下駄は憂と鳴つて、三角形墓口の前に止りました。直ぐ拾ひ上げるだらうと豫想した事ははづれて細田氏はステッキでちよい／＼と其の墓口をいちつて見ましたが、突然顔をあげて邊りを見廻しました。勿論私の姿も目に入るに違ひなかつたので私はつと横の路地の方へ大急ぎで飛び込んでゆきました。私は細田氏が何か大聲をあげて私を呼びはしないかと思ひましたが、一向聲もきこえず、いつ迄たつても元のやうに靜かでした。

それから五分程過ぎたので私は路地から顔を出して窺ひますと、細田氏の姿はもうありませんでした。私はすつかり計畫が當つたのに雀躍りしながら、さりげなく墓口を棄てたところに近付いてみますと、其の墓口は側の溝の中に轉つて居ました。それは多分ステッキで上から押して見て何にも入つてゐないと知るとステッキの尖でこの溝へ弾き込んだものにちがひありませんでした。私はとも角も其の墓口を拾ひ上げて逸早く其場を立ちのくと共に、細田氏の眼底に、この毒々しい赤い三角形が刻み込まれたことを信ぜずには居られませんでした。

斯うしておいて其の翌日は、細田氏に三角形の原質的な記憶を呼び起さしめるために同じやうな時間

に出向いて、あれから少しはなれた道路の上に、小さいセルロイド製の三角定規を落して置きました。細田氏は例の如く急ぎ足に出て来ましたが今日は少しも立ちどまりもせず、下駄で蹴とばしもせず、棄てられたセルロイド製の三角定規の側を過ぎて行つてしまひました。その三角定規が細田氏の眼にうつらなかつたのだか、或ひはそれが充分意識せられ、私の思ひどほりに昨日の記憶を呼び起して不審な氣持を抱き乍らも何氣なく立ち去つたのであるか、一向判りませんでした。

これでは折角の計畫も駄目だと思つたので、翌日はもう少し薬を強くきかせることに決心いたしました。この爲めに私は眞黒な羅紗紙を小さい乍らも鋭い角を持たせるやうに切りぬきまして、其の上に新聞紙から「呪」といふ字を苦心の末、やつと三つ見付けて来て、これをその三角の片隅に三つの文字が三角形をなすやうに貼りつけたものを作りました。これを懐にして出かけた私は大膽にも、細田氏の石の門のすぐ前にいかにも目につきやすく落しておきました。そのあとで例の路地からいまにも出て来るであらう細田氏の擧動を少しでも目から放さないやうにしようと思ひました。

この露骨な企ては到頭豫期以上に成功したのです。細田氏は門のところへ、ツカ／＼と出て来るや否や、いきなり飛び上るやうに身を退いて、例の三角形の切抜きのある地上を見つめたてはありませんか。私は一寸残忍性を帯びた微笑をせずには居られません。細田氏は四邊をキヨロ／＼と見廻しましたが、身を屈めて例の黒い三角形を取上げると、クルリと後へ向いて再び門の中に消えてしまつたのです。それから五分たつても十分たつても其の姿は現れませんでした。

私は思ひの外にうまく行つた事を喜びました。醫科の助教教授連が學用モルモットを殺す時の氣もちに似た慘虐的快感に燃え立つたのでした。細田氏が十分間経つても姿を現はさないのは恐らく氏が自分の室にかへりあの呪ひの三角形を見て前日のことを思ひ浮べ外へ出る氣にならないのだらうと思ひました。あの分では細田氏は前日の三角定規も確かに認めたのに相違あるまいといふ事が考へられもしました。あの笑い神の持ち主が、こゝまで来ればもう一寸やそつとは、此の三角形の脅迫觀念から逃れることはできまいといふ事も思ひ合はせることが出来ました。

科學に縁遠い人間に、三角形に對する恐怖を抱かせることの出来た私は、もうそれで所信の點を充分確かめ得たわけですから此所で手を引くのが當り前でした。しかしいつの間にか私の興味はかういふ概念的なことよりも、細田氏といふ一個の人間を操ることの理實的興味に變じてしまつてゐたものと見えて、私は更にそれからそれへと三角形の恐怖の段取りを進めて行つたのです。それが爲めに到頭後に御話するやうな取返しのない事件をひきおこしてしまつたのでした。

兎も角、それ以來といふものは細田氏の病院通ひがバタリと中止されました。私は邸前の路地や、空地の片隅に佇んだまゝ無駄な數日を送りました。表からは勿論のこと裏の木戸からも細田氏の姿は一寸も現れることがありませんでした。私は今用意して来た恐怖刺戟の種が數日間も氏に供給せられないために、こゝまで搬んだ計畫が途中で妨げられてしまふのではないかと思つて大いに氣をくさりました。が、よく考へて見ますと、あれからのちは私自身が手を下さなくとも、細田氏は自分でいつでも到る所、

身のまはりに三角形の空間を見出して獨りて三角形の恐怖を加速度的に増大させてみたに違ひはないのです。

たとへばですね、時計の指針は一日に數十回に渡つて鋭角を形作ります。窓から陽が斜に入れば三角形の影が澤山山來るわけです、用箋を繰れば偶然に枠が傾斜をして紙の縁と三角形をなしてゐることも多いとは言ひ切れぬことです、萬年筆の尖も三角なら女中のひたひも三角形をなしてゐるのでせう。それからそれへと限りなくこの最も簡単な空間は細田氏の前に展開して氏の恐怖は地獄を駆けまはつてゐたこととせう。

細田氏が家から一步も出ないといふ事が判ると私は更に手段を講じて氏を又別の方法で脅迫することを忘れませんでした。配達された郵便物の上に無気味な三角のマークをつけることも少々冒険ではありましたがやつて見ました。これは帽子もかむらず勝手口の傍で草でもむしつてゐるやうな恰好をすれば、郵便配達夫は何の疑ひもなく郵便物を私に手渡して呉れます。また細田氏の窓に三角形の扉を飛ばせて引つかけたり、下働きの子供たちに紙でつくつた三角形の帽子を被らせて庭で遊ばせたり、いろいろなことを試みました。

しかし折角の試みも細田氏が外に姿を現はさないので、その恐怖がどの位まで氏に影響してゐるかを明らかにすることは六ヶ敷いことでした。これが活動寫真かなにかなら私が變装でもして邸の中に入り込むのですが、それ程大膽な事は出来ない。學生らしい弱氣も充分にあつたのです。こんな譯で呼ば



ども答へずといつたやうな有様に私は少し興味を失ひかけて、邸前の空地にあらはれることも何時とはなしに疎かになつて行きました。

ところが長々と育まれて来た呪ひは、遂に最後のカタストロフを導き出すことになつたのです。それはもう三月も暮れ、四月に入つて學校の授業も一兩日中には始まらうといふ日でした私に残り少くなつた休暇をせめて一日でも有効に使ひ度いと思つて珍らしくも、私の先輩にあたる須永助教授を、染井の家に訪ふために、少し遅い朝飯をしまふと、東中野驛の方へブラ／＼と歩いて行きました。あれで三四丁もありませうか、クネクネとした路を通り切つて其處は驛まで一本道になつてゐるところまで來ましたとき、見るともなしに向うを見ますと、一寸始めは氣がつかかなかつたのですが、相貌こそやつれたれ常にかはらぬヒヨロ長い細田弓之助氏がこつちへセカ／＼と歩いて來るではありませんか。私は今少しで大きな聲を立てるところでした。驚いたことに細田氏はすつかり瘦せてしまつて、其の顔は髯こそすつてあるが顔の下にある骨のかど／＼がはつきり見えるほど頬はこけ落ち、前よりも三倍も大きくなつたかと思はれる其の眼はいやに血走つてゐました。

私は相手が既に私を知つてゐるかどうかを考へました。若し細田氏が邸の前に不審な舉動をして徘徊する私を窺越しにでも見覺えてゐるものとすれば、私が彼に近付いたとき大きな聲でも立てられてこの學生は曲者だから、ふん縛れ！」など、喚かれてもしようものなら大變だから、逃げた方がよいと思ひました。さうで無くて細田氏が私を例の三角形事件と結び合はして承知してゐないのなら、私は平然

と狂犬の如き氏の横をすれちがつて通るのがよい。たとひ理由なくとも、今向うからやつて來る氏の顔を見て逃げ出したのでは雖のやうになつてゐる敏感な氏は瞬間に萬事を悟つて誰彼の容赦なく、忽ち狂犬の如く咬みつくことであらう。さう思ふと流石の私も進退谷まつて、いつの間にか往來に立ち停つたのでした。

其の時でした。不意に横丁から笛と太鼓と鉦との騒々しい破れかへるやうな音響が私の耳を敲きました。つづいてイキナリ姿を現したのは近所の寄席の番組がはりでもを觸れて歩くらしい廣告屋の爺さんで、背中には赤インキで染めたビラを負ひ腹に釣つた大きな太鼓の前には三角の廣告旗を澤山つけ、背中のうしろからのび上つた竿の先に身體を全體を蔽ふかのやうに擴げてとりつけられた紅白だんだらの花傘の上に乗って、一面に赤い三角旗を樹てまはしてゐました。

私は一瞬間このグロテスクな闖入者に驚かされましたが、直ぐ眼前の敵である細田氏の姿に眼をうつしました。其時吁と思ふ間もなく細田氏はクルリと背後を見せるが早いか蝙蝠傘を擴げたやうな恰好をして向うへ逃げ出しましたが、直ぐ左手にあつた喫茶店へ大邁で飛び込んだものです。

私はやつと事情が呑み込みました。それはかうなんです、「三角形恐怖症」に罹つてゐる細田氏は、チンドン屋の三角旗に膽を潰してしまつたのです。しかし何も知らない廣告屋の爺さんは、細田氏の恐怖の標である三角形の旗を身體中にヒラ／＼とひらめかして別荘將軍の如く向うへ押しすゝんで行くではありませんか。私は急に身體が軽くなるのを覺えました。そしてカラ／＼と笑ひたくなりました。

實に其時です。細田氏が今遁げ込んだ喫茶店から、白いエプロンを締めた女給が戸口へ眞青な顔をして飛び出して來ましたが、
「大變です！ 誰か早く來て下さアーい」
とバタ／＼足踏みをし乍ら兩腕を頭の上に差しあげて狂氣のやうにうち振りました。絹を裂くやうな若い女の聲に喧躁の渦巻の中にあつたやうな流石の廣告屋の爺さんも驚いてあとをふりむくと喫茶店の戸口へ馳けつきました。續いて近所から人がバラ／＼と飛び出して來て喫茶店の方に集つて來ました。若い給仕女は何か譯のわからぬことを喚き乍ら戸口から家の中の方を指さします。人々はドヤ／＼と入つて行きました。

これは只事ではない。私はあの中へ飛び込んだ細田氏が出て來ないのが不思議に思はれました。しかし次の瞬間には、これは細田氏がどうかしたのに違ひないと思ひました。私は又何日かのやうに残忍性の興味が身體中から噴水のやうに湧き出て來るのを感じずには居られませんでした。さうなると奇妙にも勇氣が出て來て、私は脱兎の如く、駈けつける近所の人の袖の下をくゞつて、喫茶店の中に飛び込みました。あゝ、しかしそれは何といふ物すさまじい光景であつたことでせうか。

この喫茶店の室内裝飾は實に奇怪を極めた表現派様式のものであることが一目見て判りました。其處には不思議な形に割れた三角形がその室の到るところに怪しい立體面を築き上げてあました。室の壁紙は白と黒と黄との疊一枚位もあらうと思はれる三角形ですさまじい宇宙をつくつてあました。七色とりどりの酒瓶が並んでゐる帳場の棚は、これも鋭角三角形でとりかこまれてあました。

それよりも一層驚かされたのは此の室の片隅に細田氏が仰向きに倒れ手足は蜘蛛の如く放射形に強直され、蒼白の顔には爛々たる巨大な白眼をむき出し、齒は食ひしばられて唇を噛み、見るもむごたらしい最期を遂げてあました。驚いたのは、そればかりではありません。細田氏の屍の側には四角なテーブルが、對角線のところから三角形をなして眞二つに割れて轉つてゐるのでした。

私ははげしい戦慄に襲はれました。そして三角形恐怖事件に關する今までの悉くの事柄が浮み出て脳髓の中を馳けまはるやうに覺えました私は、其の三角形に割れたテーブルが、表現派好みの三角形のテーブルを二つ並べ合はせてあつたのが轉つて二つに割れたやうに見えたのだといふことを知る餘裕もなく、飛ぶやうに喫茶店を出ると一直線に家へかへりました。そして自分の机の前に身體を投げ出すと共に、此のあさましい試みが生んだ慘劇の中に、間接ながらとりもなほさず殺人者である自分を見出して、はげしい自責と恐怖とに身を震はせました。

それから時計は徐かに廻りました。夕方に配達された夕刊には「カツフエで大往生」と題して「細田弓之助(33)が喫茶店「黒猫」で頓死したが、原因は病み上りの身で餘り激しく駈け出した爲、心臟麻痺を起したものでらしい」とあつたのです。この記事を讀んだ私は、懊惱のたへ切れない苦しさを少しも軽くしようと冀つて、晝間出掛けようと思つた先輩の須永助教授のところを訪ひ、一切を告白して適當な處置を教へて貰はうと決心しました。

外へ出てみますと其の日の惨劇を忘れたやうな静かな夜の幕がふかぶかと下りてみました。例の喫茶店さへ、どこに死人があつたかといふやうな賑かさて、陽気な若い男の笑ひ聲が高く大きく街路へまで響いてゐました。私は少しは氣が軽くなつて、其の前をすり抜けるやうに通り過ぎて、驛に出来ました。染井の須永先生の書齋に通された時は、もう九時を廻つてゐました。私は先生の前にポタ／＼涙を落しながら、例の三角形恐怖の試験をはじめのイキサツから今日の惨劇を見るに至るまでの事を緊張裡に細々と告白しました。須永先生は短い口髭を指尖でもみながら靜かに傾聴されましたが、私の言葉が終ると、低い聲で軽々と笑つて、

「君は此頃ちと神經衰弱のやうだよ。若い身空で、そんな小さいことをくよく／＼心配してゐると、君の姉さんのやうな病氣に乗ぜられるかも知れないよ。日本全電力を火山を利用する火力發電に悉く改めてしまはうといふ大計畫を抱いてゐた日頃の君とも思へないぢやないか。そんなことは心配する必要はちつともないよ。」

と言つて呉れました。私は常日頃尊敬する須永先生からこの軽々とした評言を聞くことが出来て喜んだのは當然です。それでも多少の悔恨を持つて家に歸りました。いやまだ少し話の先があるのですよ。其の翌日のことでした。差出し人の書いてない手紙が私宛に参りました。これを母がいぶかしさうに二階の私の部屋に持ちこんで来たときは、思はず、ハツとしました。多分どこからかの脅迫状でもあらうと思ひましたが、たつた一人生き残つた母親へ心配を懸けたくないと思つたので、それはそ／＼つかしい

親友A——の筆蹟にちがひないと話して安心をさせました。

母が階下へ降りてから、早速とは／＼封を切つて見ますと、中には用箋が四五枚綴ぢた手紙が出て来ました。それは随分と亂暴な筆蹟で書きなくつてありましたが、文章の最後には差出人の名前がちゃんと出てゐるではありませんかそれに驚いたことはこの差出人は昨日死んだ細田弓之助其の人なのです。私は其の手紙をもう焼いてしまつたので今日貴方にお見せするわけに行きませんが、大體こんな意味のことが書き綴られてゐました。

宗夫君。

私の生命は今日に迫つてゐる。それは私には良く判る。そして今を除いては私が君に呼びかける時も又とあるまい。

私は最近になつて君が、昔私の捨てた戀人のたつた一人の愛弟であるといふ事を知ることが出来たのだ。それを今まで知らなかつた私は萬事にどの位驚き續けたことであらうか。しかし今となつては何事も全て遅いのだ。

もはや御察しの通り私は八年ほど昔君の姉さんである時子と戀に陥ちてゐたのだ私は二十五で、時子は二十だつた。二人の戀は偶然なところから結ばれて秘密裡につゞけられたので私達の間のことは恐らく君の母君とても御存じあるまい。

私は二十五といつても、全くお坊つちやんであつたし、時子はどうかといふと其の病氣の所以もあつたのであらうか、年よりもずつと進んだ氣持を持つてゐた。私は五つ下の彼女が私に振舞つた年上らしい熱情を今までもはつきり思ひ出すことが出来る。

茲へ書くのも恥かしいことだが無反省な若い心を持つてゐた私は不圖した事から時子の胸の病を知つて驚いた。それと同時に餘りはげしすぎるやうに思はれる彼女の熱情がたへられない程いやに思はれて来て私に遂に彼女と別れる氣になつた。

忘れもしない今から八年前の今日のことだ。いつもはわざと住居から遠くはなれて秘密な戀を味ひ喜んだあの佃島で私ははつきり切れ話を持ち出した。時子の概きがどんなであつたか、それは想像に委せる。私は時子を砂の上につき仆して逃げたのである。其のとき、時子は發作に襲はれて激しく咳きこみながら叫んだ言葉がある。それは「デルタ、デルタ」といふのだ。其のさきは咳がはげしくなつたのでどうしても言へなかつたのだらう。私はそれでも逃げた。しかし彼女が別れのときに苦しい息の下から言はんとした意味はよく私にわかつてゐた。

デルタといふのは君も知つてゐる通り「三角洲」といふ事だ。私達はこの會合の場所である佃島が三角洲であるところから、「デルタ」と目頃呼んでゐた。

時子の言ひたいことは私の心の靜まつたとき今一度このデルタへ来て呉れ、思ひ直して是非来てくれといふことを言ひたかつたのだ。

しかし私は遂に行かなかつた。私はもつと無邪氣な少女を戀の相手に欲しかつたのだ。私は時子が翌年死んだことを聞いた。それ以來私は何故か非常に憂鬱になつてしまつた。いろいろの名醫に診てもらつたがどうもはつきりせず、身體はやせる一方だ。私は此の年まで結婚は遂にしなかつた。いやこれにも時子の呪ひが被つてゐるのかも知れない。

ところが先月の事だ。私は家の前でつゞけさまに三日間、ものこそかけれデルタにちがひなき三角形のさま／＼なものを見出さねばならなかつた。私は時子の呪ひの總勘定日が近づいたことを知つた。いや其の上にならなかつたといふものは時子の顔が窓の外にあらはれたりいろ／＼と變なことがかりが重つた。時子の顔と思つたのは、その弟である君の顔だといふ事に懸て氣がついた。しかし其の時私は、時子の弟が、あからさまに時子の呪ひを奉じて私を脅かしつゝあるといふ新しい事實に戦慄しなければならなかつた。

私は實に苦しい。君の家も調べさせてわかつたから今日にも突然君を訪ねて一切を話さうかといふ氣にもなつてはゐる。しかし面と君に向ふだけの勇氣は中々起りさうにもない。

今日は朝から七年前のデルタの上で別れたことを思ひ出してゐると、どうやら今日は自分が死にさうな氣がしてならない。このまゝ死んで私の罪が一層重なるわけだから、今のうちに一寸認め君へ送つておきたいと思つたのである。

たゞ一つ心掛りは、どうして君が時子の呪ひのデルタを探し出して私を脅かすやうになつたかと

いふ事である。しかしこれとて今は聴いても何の役にも立たぬことなのであるが……。

四月九日 細田弓之助

私は此の手紙を讀んで亞然としました。私が十七歳のときに胸の病で別れた美しい姉がこんな秘密を抱いて死んだとは、始めて聴く事實でした。また細田氏が偶然私の選んだ試験臺であり乍ら、亡き姉を捨てた戀人であつた事は一層不思議なことでした。細田氏は私が事情を知つて、氏を三角形で脅かしてゐるものだと死ぬまで思つてゐたこととせう。何はともあれ、細田氏の死去がのがれられない呪はれた運命の仕業であることを知つた私は、どんなに心が輕くなつたこととせうか。それからといふものは私に見違へるやうに家の中でも快活になつて何事も知らぬ母親を驚かしたり喜ばせたりしました。あの陰氣くさい塔の森さへ暴風雨の前に立つ巨人の像のやうに雄大に仰がれるやうになつたこととせした。

私の長い話はこれで大體御しまひなのです。が例の癖で最後に一寸だけ言はして貰ひたいことがあるのですよ。それは此の話の中で貴方も御氣付きのことだらうと思ひますが、いくら私の姉が上手に細田氏のことを隠してゐたつて生みの母に一度も疑はれずに來たといふのは随分をかきな事だと思ふんですよ。私は此の頃ではどうやらこの事件の本當の内容が判つて來たやうに思ふんです。

私の臆測が若し間違つてゐなかつたとするならばですね、私はやつぱり細田氏を三角形に脅かして間接に殺したことになるのです。つまり私の立てた説が本當に物凄く價値を現はしたことになるのですね。あの手紙ですか。あれはあの晩尋ねて行つた須永先生が、私のことを大變心配して、どうにかして若

い身空の私に元氣をつけさせようと思つて、大いそぎであの手紙を創作したのぢやないかと思つてゐます。

それに一つ根據のあることは、母の話によると、實は姉の生きてゐた頃、姉は大變須永さんを褒めてゐて、誰か悪口を言ふとしまひには泣を出して泣いた位だといふ事です。あの手紙の中にある細田氏のことといふのは實は須永さんの創作にして、且つ須永さん自身の體験の一部を漏してあつたのではないかと思ふのです。遺憾なことに須永さんもそれから數年後、英國へ留學して、あの地で奇妙なパクレリアに取憑れて亡くなつたので、そんな事に氣のついたときにはもう事實を須永さんから聴きたゞすことも出來なくなつてゐました。

さうなると私は罪を背負はねばならぬことになりませんが、そんな事はどうでもよいといふ氣がしてゐます。いや貴方が今御覽の通り、これで體重が十九貫ありましてね、至極呑氣に生きてゐます。昔のやうな安價なセンチメンタリズムに陥るには、今のところ餘りに健康すぎると言ふわけなんですよ。ハハハ、ハ、ハ、ハ。(了)

西湖の屍人

1

銀座裏の酒場、サロン船を出たときには、二人とも、ひどく酩酊してゐた。私は私で、黄色い疎らな街燈に照らされた馴染の裏街が、まるで水の中に漬つてゐるやうな気がしたし、帆村のやつは帆村のやつで、黒いソフトを名猿シドニーのやうに横ちよに被り、洋杖がタンゴを踊りながら彼の長い二本の脛をひきずつてゆくといつた恰好だつた。

私はそれでも、ロマンチストだから構はないやうなものの、かれ帆村なるものは、商賈が私立探偵ではないか。帽子の天頂から靴の裏底まで、およそリアリズムであるべきだつた。しかるに今夜、彼はそれ等の特徴を見事ふりおとして、身體中が隙だらけであるかのやうに見えた。もし彼に怨恨のある前科者どもが、短刀逆手に現れたとしたらどうするだらうと、私は氣になつて仕方がなかつた。

すると、背後から大聲でもつて、警告してやりたい程、矢鱈無性に不安に襲はれた。この嘔氣のやうにつきあげてくる不安は、あながち酩酊のせゐばかりでは無いことはよく判つてゐた。近代の都市生活

者の九十九パーセントまでが知らず識らずの間に懼つてゐるといはれる強迫観念症の仕業にちがひないのだ。

帆村が蹣跚めくのを追つて、私が右にヨタヨタと寄ると、帆村は意地わるくそれと逆の左の方にヨロヨロと傾いてゆくのだつた。銀座裏は時刻だから、いたづらに廣々としたアスファルトの路面がのび、兩側の家はヒツソリと寝しづまり、さまざまの形をした外燈が、半分夢を見ながら足許を照してゐた。酔つ拂ひにとつて、四ツ角は至極懐しいものである。三間先のコンクリート壁體を舐めるやうにして歩いてゐた帆村は、四ツ角を見付けると嬉しさうに兩手をあげ、まるでゴールのテープを截るやうな恰好をして、蹣跚けていつた。そのとき私は後からそれを眺めてゐて、急にハツとしたのだつた。

——その四ツ角へ、別の横丁から、をかした奴がノコノコやつてくる！

その姿は、本當には薩張り見えないのだ。それにも拘らず、見えない横丁に歩いてゐる人間の姿が見えたやうな氣がした。いや、矢張りハツキリと見えたのだ。それは不思議なやうで、別に不思議はないことだ。私達のやうに永年都會に棲んで、極度に神經を敏感以上、病的に削られてゐる者は、別に特殊な修練を経ないでも、いつの間にか、ちよつとした透視ぐらゐは出来るやうになつてゐるのだつた。これはいつも、さういふ話の出たときに、私の言ふ話であるが、試みに諸君は身體の調子のよいときに、ポケットの懐中時計をソツと掌のうちに握つて、

(はて、いま何時何分かなア——)

と考へてみたまへ、すると目の前に、白い時計の文字盤が朦朧とあらはれ、短い針と長い針の傾きがアリ／＼と判るのだ。さうして置いて、掌を開き、本當の文字盤を見る。果然！一分と違はず二つは一致してゐる——これでも諸君は信じないといふか？

四ツ角では、帆村ともう一人の黒い影とが、纏れあつてゐるのだつた。

私は、應援してやりたい氣持一杯で、ペイヴメントを蹴つて駈けたのであるが、駈けるといふよりは、泳ぐといふに近かつた。

「ほほほ僕は、いい生きてゐるでせうか。」

と帆村の前に立つ怪しの男が、熱心に尋ねてゐる。

帆村は、その男に胸倉をとられたまへ、

「ウウ、ううウ。」

と低く呻つてゐるばかりだつた。

「ちよいと、僕の身體を觸つてみてください。この邊を觸つてみて下さい。」

泣かんばかりに彼の男は喚くのであつた。そして帆村を離すと、ベリ／＼と音をさせて、われとわがワイシャツを裂きその間から屍のやうに青白い胸部を露出させた。私は、初めてその男の姿をマジマジと觀察したのだつたが、思つたよりは遙かに、若い男だつた。年齢のころは廿四五でもあらうか。だが非常に焦悴してゐた。皮膚には一滴の血の氣もなく下脛がブクリと膨れて垂れ下り、大きな眼は乾魚の

やうに光を失つてゐた。

「きみは、おとお面白いことを云ふ。」帆村が口のあたりについてゐる涎らしいものを手の甲で拭ひ乍ら云ふのであつた。

「生きてゐるかア？ ウンここにあるのは、きみイの胸ではないか、だッ。」

帆村は腰をかがめ、指先を自分の眼の前にチラ／＼ふるはせて云つた。

「では、僕の手を握つてください。」

「よオし、握つた。」

帆村はよろけながら、怪青年の手を執つた。

「その手は、僕の身體に繋つてゐるでせうか。」

「ばば馬鹿なことを云ひたまへ。ついてゐなくて、どうするものかッ。」

「僕が喋るときには、この唇が動いてゐるでせうか。」

「なに、唇が……。パクン、パクンあいたり、しまつたりしてゐるぢやねえか、こいつひとを舐めやがつて。」

帆村は、氣合をかけると、

「ええいッ。」

と青年の頭をガーンと、どやしつけた。

青年は痛さうな顔一つしない。

が、彼はたちまち恐怖の色を浮べて喚きだした。

「おお憎むべき幻影よ。わが前より消えてなくなれ。消えてなくなれ！」

彼は两眼をクワツと見開き、この一見意味のない臺辭を嘔きちらしてゐたが、躓てブルブルと身震ひをする、パツと身を翻して駆け出した。

「それツ、逃がすな！」

と叫んだ帆村の聲は、いつの間にか不斷の、あの胸のすくやうな名調子に變つてゐた。

「よオし、擱へてやる！」

と私は呶鳴つた。

(これは冗談ごとではなくて、なにか事件かもしれぬ) 私の酔ひは、やつと醒めかかつた。

私は兵士のやうに身を挺して、怪青年の背後に追ひすがつた。右の肘をウンと伸すと、運よく彼の肩口に手が觸れた。勇躍。

「ヤッ！」

と飛びかかつた。

「無念！」

ひつばづされて(酒精の祟りもあつて)身體が宙にクルリと一廻轉した揚句、イヤといふほど腰骨を

うちつけた。ぢつと地面にのびてゐるより外に仕方がなかつた。帆村が勇敢にも私の身體を飛び越えて、追駈けていつたのがぼんやりわかつた。だが、こつちは全身がきかないのだ。どこに自分の腕があり、どこに自分の足があるのだから、皆目見當がつかなかつた。氣がついたのは——此際香氣な話であるが——なにかしら、馥郁たる匂ともいひたい香が其の邊にすることだつた。

(麝香といふのは、こんな匂ひぢやないかしら。)

そんな風なことを思ひながら、夢をみてゐるやうな氣持だつた。

突然、意識が鮮明になつた。朝霧が風に吹きとばされて、あたりが急に明るく晴れてゆくやうに……

(こんなものを、頭から被つてたぢやないか。)

私は、眞黒い布を、顔からとりのけて、上半身を起した。眞黒い布と思つたのは、洋服の上衣だつた。(さうだ。怪しい男を擱へたつけが、彼奴の上衣なのだ！)

怪しい香も、その上衣から發散することが判つてきた。それにしてもいゝ匂ひだが、なんといふ異國情調的な香なんだらう。私の手は無意識に伸びて、その上衣のポケットを、まさぐつてゐた。

(おお、なんだか、入つてゐるぞ！)

掌に握れるほどの大きさのものだつた。出してみた。透かしてみた。そして撫でまはしてみた。何

だか壘のやうだ。

突如！ 近くで私の名を呼ぶ聲がする。私はムツクリ起上つた。

横丁をすりぬけて、飛鳥のやうに駆出してゆく人影！ ヤッ、彼奴だ！ 彼奴が引返してきたのだ！

「元氣をだせ！ 走れ、早く！」

と帆村は私の方へ投げつけるやうに叫んで、怪人物の跡を追った。そのあとから、眞夜中ながら彌次馬のおしよせてくる氣勢がした。私は彌次馬に追越されなくなかつたので、舊地に駆けだした。今度は大丈夫走れるぞと思つた。

その鼠のやうな怪青年は、目にとまらぬ速さで逃げまはつた。街燈が黄色い光を斜になげかけてゐる町角をヒヨイと曲るたびに、

「ソレあすこだ！」

と、怪青年の黒影が、ぱつと目に入るだけだつた。私達は彌次馬とは、ずっと間隔ができてしまつた。そしていつの間にか、丸の内寄りの、濠ちかくまで來てゐるのに氣がついた。

「あッ、しめた。袋小路へ入つたぞ。彼奴が、ひつかへしてくるところを抑へるんだッ。」

帆村の聲に、私は最後の五分間の力走をつづけた。果然その袋小路の入口へきた。

「待て！」

帆村は、その入口に忍びよると、倒れるやうに地に匍つてそつと下の方から、袋小路をのぞきこんだ。三十秒、四十秒、五十秒、帆村は動かない。

三分も経つてから、帆村は塵を拂つて立ちあがつた。彼は私の耳許で囁いた。

「コートの襟を立て、巻煙草を口にくはへた酔漢が二人、腕を組みあつて、ノツシ、ノツシと、袋小路に紛れこんだ——勿論、帆村と私とだつた。」

その袋小路は、ものの五十メートルとなかつた。兩側に三軒づつの家があつた。右側は、みな仕舞屋ばかりで、すでに戸を締めてゐる。左側は表通りと連続して、古い煉瓦建の三階建があつて、カフェをやつてゐるらしく、ほの暗い入口が見える。その奥は、がっちりした和風建築の二階家で、これも戸が閉つてゐる。この袋小路のつきあたりは、お濠だつた。

そんなわけで、起きてゐるのはカフェばかりだつた。

私達は、カフェ・ドラゴンとネオンサインで書かれてある入口を覗いてみた。

「まア、いい御機嫌ね、ホホッ。」

誰も居ないと思つた入口の、造花の蔭に女がゐた。僕は帆村の腕をキュツと握りしめて緊張した。

「君、君とは、まだ飲ませるだらうな。」

「モチよ、よつてらつしやい。」

「おいきた。友達甲斐に、もう一軒だけ、つきあつてくんろ、いいカツ。」

帆村が、私の顔の前で、酔拂ひらしくグニヤリとした手首をふつた。私にはその意味がすぐわかつたのだつた。

入口へ入らうとすると、

「おツとつとツ。」

急に帆村は、私の腕をもち、つか／＼とお濠端まででると、前をまくつて、シャイシャイ音をたてて小便をした。帆村のやつ、小便にかこつけて、お濠の形勢を窺つてゐることは、私にはよく判つた。入つてみると、そこは何の變哲もないカフェだつた。廣いと思つたのは、表だけで、裏に奥行のな家だつた。帆村は先登に立つて、ノコ／＼三階まで上つた。各階に客は四五人づつゐるが、私達の探してゐる相手らしいものの姿は、どこにも見當らなかつた。

「なに召上つて？」

入口にゐた女給が、三階までついてきた。

「ビールだ。で、君の名前は？」

「マリ子で、いふわ、どうぞよろしく。」

イトトン・クロツプのお河童頭がよく似合ふ子だつた。前髪が、切長の涼しい眼とスレスレのところまで垂れてゐた。なによりも可愛いのは、その、發育しきらないやうな顔だつた。

「おいマリちゃん。」すかさず帆村が、彼女の名を呼んだ。「ここ、特別室があるんだらう。地下室か、なんかに、そこへ案内しろよ。」

「地下室なんて、ないわよ、この三階がスペシャルなんぢやないの、ホホツ。」

と、やりかへして、マリ子は下へ降りていつた。

煙草の箱を探さうと思つてポケットへつきこんだ指先に、カチリと硬い物が當つたので、私は思ひだした。

「おい、戦利品だ。」私は、帆村の脇腹をつついて置いてから例の男の上衣から失敬したものを、卓子の下にソツと取り出した。

「なんだか、薬壘のやうだね。」萬事を了解したらしい様子で帆村が、低聲で云つた。

「レットテルが貼つてある。ボラギノール。」と私は辛うじて、薬の名を讀んだ。

「ボラギノールつて、痔の薬ぢやないか。」

帆村は、謎々の新題にぶつかつたやうな顔付をして、一寸首を曲げた。

そこへマリ子がバタ／＼階段をあがつてくる氣勢がしたので、私は帆村に、あとを聞いてみる餘裕もなく、その薬壘をまた元のポケットに収ひこんだ。

小石川の音羽に近く、鼠坂といふ有名な坂があつた。その坂は、音羽の方から、小日向臺町の方へ向つて、登り坂となつてゐるのであるが、道幅が二メートルほどの至つて狭い坂だつた。登り口のところではさうでもないが、三丁ほど登つたところで、誰もがこの坂にかかつたことを後悔するであらう。そ

れといふのが、この名うての坂は、そのあたりから急に傾斜がひどくなつて、足が自然に動かなくなる。そのうへに、路がだんだん泥濘つてきて、一步力を入れてのぼると、二歩ズル／＼と滑りおちるといふ風だつた。それを傍の棒杭に掴つてやつと身體を支へハア／＼息を切るのだつた。気がついてあたりを見廻はすと、これはそも如何に、高野山に紛れこんだのではないかと駭くほど、杉や樺の老樹が太い幹を重ねあつて亭々と聳え、首をあげて天のある方角を仰いでも僅か一米ートル四方の空も見えないのだつた。そして急に冷え冷えとした山氣のやうなものが、ゾツと脊筋に感じる。そのとき人は、その急坂に鼠の姿を見るだらう。その鼠は、あの敏捷さをもつてしても、このぬら／＼した急坂を駆けのぼることができないで、徒にあへいでゐる——これが鼠坂といふ名のついたはれであつた。

この坂の、のぼることも降りることも躊躇される、その中途に、さらに細い道が横に切つてあつて、その奥に朽ちかかつた門柱が見える家があつた。その家の門は、月のうち、二三日を除いて、滅多に開かれることがなかつた。門の鈴がリリリンと冴えた音をさせる日は、大抵月の上旬にきまつてゐた。もし氣をつけて垣の間から窺つてゐるならば、訪客は夜分にかぎり、そして年齢のころは皆、四十から下の比較的わかい男女であつて、いづれも相當の身姿をしてゐることが判つたであらう。

帆村探偵も、その夜の客に交つてゐたのだつた。

彼は階下の待合室で、順番を待つてゐた。一座には、袴をはいて頤の先に鬚を生やしてゐる男が、しきりに心靈の物理學について論じてゐた。その隣りには、半年前に夫を喪つたといふまだ艶々しい未亡

人だの、その姪にあたるといふ若い女だのが居流れてゐた。帆村はひとり離れて下座にゐた。手を伸ばすと、寒さうに光つてゐる廊下が觸れる。その廊下を出ると幅の狭い段梯子が、二階へつづいてゐた。

「ボワーン」

と小さい銅鑼をうつたやうな音響が、その段梯子の上から流れてきた。

「貴方の番ですよ。」

と、頤鬚のある男が、お喋りを中止して、帆村の方に合圖をした。

帆村は恭しく頭を下げると、しびれのする脚を伸ばして立ちあがつた。

階下の明るさにくらべて、段梯子のうへは、暗闇にちかかつた。彼は手さぐりに、のぼつて行つた。

最後の段をのぼりきると、目の前には異様な光景が浮びあがつたのだつた。

十疊敷ほどの間が二つ、障子があいてゐた。薄ぼんやりと明りがついてゐる。小さいネオン燈が、シエードのうちに、桃色の微かな光線をだしてゐた。床の間を背に、こつちを向いて坐つてゐるのは、婦人だつた。暗くてよくは判らないが若くはない。その隣には、懐中電燈の載つた小机を前にして頭の禿げあがつた老人がゐた。もう二人、背廣姿の若い男がゐて、これは婦人の前に畏つてゐた。

「では大竹さん」と老人は、隣の婦人に呼びかけた「序に、も一つやつてあげて下さい。」

大竹さんと呼ばれた婦人は、無言で肯いた。そのとき横顔がチラリと見えたが、四十を二つ三つ越したかと思はれるブクブクと肥えた中年女であることがわかつた。

それにつづいて二人の背廣男が、丁寧に頭を下げた。

「後のかた、まことに済みませんが、も一つやりますから、少々お待ち下さい。」

老人の静かな聲に、帆村もまた無言で應諾した。

老人は席を立つて、婦人の前にピタリと坐つた。右手を婦人の額にあげてゐたが、やがてソツと引く

と今度は掌を組み、胸のまへで上下に強く振つた。

「昭和四年二月十八日没す、俗名宗清民の靈……」

老人の皺枯れた聲が終るか終らないうちに、

「ううツ、ああア。」

と、大竹女史が呻聲をあげた。

「それ出ました。聲をおかけ下さい。」

と老人は手をあげて二人に合圖をすると、元の小机の前にかへつていつた。

「宗先生ですか。」

聲をかけたのは、三十四五の男の方だつた。

「わしは宗ぢや。今忙しいから後にこい。」大竹女史が目を瞑ぢたまま、男の聲で答へた。

「先生、こつちは曾我貞一です。神田仁太郎を連れてあがりました。」

「曾我貞一に、神田仁太郎？ そんな名は知らぬぞ。」

男はそのとき何やら早口に云つたのだが、なにか外國語のやうでもあり、なんの意味か判らなかつた。しかし大竹女史は、喜びの表情をあらはして、答へた。

「わかつた。なるほど曾我と神田か。」と云つたが、そのあとで急に顔を曇めて、「わしは胸が苦しくてならん。」と云つた。

「それは先生、曾我貞一と名乗る男は一寸云ひ淀んだが、先生は御臨終の苦しみを續けていらつしやるのです。目をお醒まし下さい。」

「なに臨終だア？ 莫迦をいひなさい生きてゐるものを擱へて、臨終とは何ごとかッ。」大竹女史は男のやうな険しい顔付をして叫んだ。

「先生は、もう疾くの昔に死の世界へゆかれました。もう三年も前に亡くなられたのです。」

「わしが死んだ？ 死んだものが、お前の顔を見たり、かうやつてベラベラ喋られるかい。ハツハツハッ。女史は、目を瞑ぢたま後へ反りかへつて笑つた。隣の老人が駭いて、女史の身體を後から支へた

ほどだつた。

「いえ先生は既に亡くなられました。今日はそれをお教へして、死後の御立命をおすすめに來たのです。先生には死んだやうな氣がなさいませんか。」

「さういはれると、どうも、腑におちないこともあるんだが……。女史は、首をすこし曲げて、何事かを考へてゐる風だつた。

「宗先生、試みに、御自分の體を觸つてごらん下さい。」

女史は、自分の胸のあたりに兩腕を組むやうにしてそこらを撫でるのだつた。

「わかりますか、先生、胸のところ、乳房があります。」

「ほほウ、これはをかしい。」女史は自分の乳房を着物の上からギュツと握りしめて不審氣であつた。

「先生は、幅の広い帯をしめて居られる。太腰のまはり、柔かい膝、そして先生の頭には、豊かな黒髪がある！」

曾我貞一の言葉につれて、女史は手を動かして、或は腰のまはりに恐ろしさうに觸れ、膝を押してゐたが、最後に兩手をあげて、房々とした束髪を抑へたときに、

「キヤツ！」

と一聲喚いた。女史は極度に興奮してその場に立ちあがらうとするのを、隣席の老人は笑ひながら後から抱きついて止めた。

「呀ッ、これは女の身體だ。女の身體だッ。おお、わしの身體を、何處へやつた。わしの身體をかへせ！」

女史は、裾の亂れるのも氣がつかず、われとわが身を、かき捲つた。

「先生、合點がゆかれましたか。」曾我貞一が憎いほど落付いた態度で云つた。「先生の身體は、もう亡くなつてゐるのです。それは、先生の靈を生前の世へお迎へするために使つてゐる靈媒の御婦人の身體な

のです。お判りですか。」

「なに、靈媒？ これはわしの魂が乗り移つてゐる靈媒の婦人の肉體だといふのか。ああ……。女史は頭をかかへて、其の場に俯いた。やがてその下から泣き聲が洩れてきた。獸の叫びごゑに似た怪しい響をもつた泣き聲だつた。

「ああ、いつの間にか、わしは死んでゐた！」

女史は、懺きのあまりか、容易に身が起せないやうであつた。

「どうです。今日は、その邊で止めておいては……。隣席の老人が、二人に注意した。

曾我貞一は、連れの神田の興奮に青ざめたやうな顔をチラリと見たうへで、老人に、止めることを頼んだ。

老人は、再び大竹女史の前に膝をつくと、何やら呪文のやうなものを唱へ、女史の額のへんを二三度、撫でるやうにした。

女史は、元の女らしさに立歸つて、靜かに上體を起した。そしてケロリとした顔で、一座を眺めると、やや氣まり悪さうに、はだけた前をかきあはせたのだつた。

二人の背廣男は、このとき丁寧なお辭儀をすると、席を立つた、場慣れてゐるらしく、始終ベラ／＼喋つた曾我貞一といふ男、それに反して一語も發しないで、唯興奮に青ざめてゐたやうな神田仁太郎と呼ばれた若い方の男——帆村はそれをぼんやりと見送つてゐるやうな顔付をしてゐたが、その實彼の全

身の神経は、網膜の裏から、機關銃を離れた銃丸のやうに、兩人目懸けて落下してゐたのだつた。

「そのときの若い方が、昨夜、銀座裏で逢つた彼の男なのさ。」帆村は、抽出のなかから新しいホープの紙函をとりだすと、さう云つた。

「神田仁太郎といふ男だネ。」さういつて、私は、帆村の室にかかつてゐるプロバツクの裸體畫が、正午ちかい陽光をうけて、眩しさうなのを見た。

「あの袋小路には、カラクリがある。」

「どんなカラクリだい。」

「そいつは判らん。だが追々わかってくるだらう。」

「神田仁太郎のことなら、小石川の、その何といふのか心靈實驗會みたいところで訊けばわかりやしないか。」

「既にさつき調べてきた。」帆村は苦りきつて云ふのだつた。

「無論、住所は二人とも出鱈目だつた。」

「あの神田といふ青年は、なんだつて、あんな恰好で銀座裏なんか現れたのだい。あれは神田氏だけの問題なので、氣が狂つたとか或ひは酔拂つてゐたとか（ここで私はクスリと忍び笑ひをしなければならなかつた）さういつたことだけなのか。それともあれが、もつと大きな事件の一切断面だとも云ふ

のかい」

「もちろん事件だ。」帆村は言下に答へた。「わかるくすると、われわれの想像できないやうな大事件かも知れない。」

「そんなことは、どうして判るのかい。」と私は、帆村が迷惑かも知れないと思つたが、率直に尋ねた。

「それには色々の理由がある。」帆村は、やつと氣がついたやうに、一本の紙巻煙草をぬき出して、口にくはへた。「まづ、あの怪青年の顔だ。あんなに特徴のある立派な顔は、珍らしいと思ふ。あれで憔悴してゐなかつたら、貴人の顔だよ。それから例の心靈實驗會だ。遂に一語も吐かなかつた怪青年と落付いて喋つてゐた曾我といふ男との間に、ほのかに感ぜられる特殊の關係、それにあの不思議な實驗だ。また銀座裏で怪青年が僕になげつけた言葉は、戦慄なしに聴くことはできない。何か怖ろしいことが、現に發生してゐる。」

「君は、僕の嗅いだ目の醒めるやうな匂ひのことも忘れちやゐないだらうネ。」

「うん、あれは僕の想像に、裏書をしてくれるやうなものだ。」

「ボラギノールの薬壺は？」

「ボラギノールの薬壺！ そいつは僕の眼前に見えるタツタ一本の繩だ、この一本の繩があるばかりに、僕はたちまち今日から何をなすべきかといふことを教へられてゐる。」

「明日から當分、午前九時から午後一時まで、君はこの事務所へきて、僕の代りに留守番をしてゐてくれたまへ。」

「それで君は？」

帆村はそれに答へず、煙草に火をつけると、パツパツとうまさうに吸つた。

「君はカフェ・ドラゴンの女給がだいぶん、氣に入つたやうだつたネ。」帆村は、人の悪さうな笑をうかべて、私を揶揄つた。

「ああ、マリ子のことかい。」私は、しらばつくれて、云つてやつた。「あの子は、この事件に無關係だと思ふがネ」

「マリ子のごとは、そつとして置いて。」と帆村は急に顔面をこぼらせて云つた。「あの古煉瓦建のカフェ・ドラゴンだが今朝起きぬけに、あの濠向うの仁壽ビルの屋上へ、測量器械を立てて、望遠鏡で測つてきた。」

「ほほう。」私は彼の手廻しのよいのに駭かされた。

「だが遺憾ながら、昨夜目測した室の面積に、煉瓦壁の厚さを加へただけの數値しか、出てこなかつた。つまり、隠し部屋があるだらうと思つたが、間違ひだつた。」

私は感歎のあまり、黙つて頷いた。

「その代り、すばらしい拾ひものをした。」

「む、なにを拾つたネ。」

「カフェ・ドラゴンと、泥船が澤山舫つてゐるお濠との間に、脊の高い日本風の家がある。ところがこの家の二階の屋根にすこし膨れたところがある。鳥渡見たくらゐでは別に氣がつかないほどの膨らみだ。トランシットでビルディングの上から仔細に觀察してみると、その膨れた屋根は隣のカフェの煉瓦壁のところまで止つてゐる。僕の眼は、煉瓦壁の上をスルスル匍つてカフェ・ドラゴンの屋根に登つていつた。すると其處に、大きな煉瓦積の煙突があるのだ。ところが此の煙突の根元へ焦點を合はせてみて判つたことだが、灰色のモルタルの色で、この煙突だけは、つい最近出來たものだといふことが判つた。これは面白いことだ。あの二階家を建てたためにあの煙突ができたとはどうだらう。その次には、二階家につける筈の煙突を、どうしてとらにつけたのかと考へてはどうであらうか。さらにも一つ、日本建の二階家になぜ煙突が入用なのであるかと考へては、いけないであらうか。」

帆村は陶酔的口調で私に聽かせてゐるのではなく、彼自身の心に聞かせてゐるのであることが明かだつた。

「すると、そのあたりに、怪青年が隠れてゐるといふんだね。」

「うん、一度入つた者は、いつかは出てこなければならぬ。さうだらう。あとは根氣競べだ。」

青年漢于仁は、今日も窓のそばに、椅子をよせて、遙かに光る西湖の風景を眺めてゐた。

空はコバルトに晴れ、雲の影もなかつた。このごろは毎日お天気つづきだつた。

湖の左手には、黛をグツとひきのぼしたやうに、蘇堤が延々と續いてゐた。ややその右によつて寶石山の姿がくつきりと盛上り、保叔塔らしい影が、天を指してゐた。いつ見ても麗しい西湖の風景だつた。

だが、いつ見ても變らぬ風景だつたことが、漢于仁には物足りなかつた。それにこの室の窓は、非常に厚い壁を距てた彼方に開いてゐたので、自然視界が狭く、窓下を覗くことも叶はなかつた。

この室は、漢于仁の故郷であるところの浙江省は杭州の郊外。萬松嶺の上に立つ、直立二百尺の樓臺のうちにあつて、しかもその一番高いところにあつた近代風の試みから、この室の天井は、厚い曇り硝子を貼りつけてあるので、日中は朝から晩まで、陽の光がさし、硝子を透して大空の青さが見えるやうであつた。

せめてこの室の南側に、もう一つの小窓でもあいてゐたらそこから、風致上よろしくはないかも知れないが、錢塘江の賑やかな河面が、近眼の彼にも、薄ぼんやり見えたことであらう。

(何故、自分の先祖は、この樓臺の頂上に、たつた一つの小窓しか、明けなかつたのだらう)

漢于仁は、今から一千年も前に、この地を選んで、大土木工事を起した吳王の意中を測りかねた。だが當時は、唐の壊滅をうけたあとの亂國時代のことだから、いつ吳王を覗つて敵國の軍勢が、攻めよせてくまゐいものでもなかつた筈だ。そのときに、鳴弦樓と呼ばれるこの高塔は、望遠鏡の力を借りて四十

里彼方に蟻の動くのも手にとるやうに判つたことだらうし、よしんば敵軍がこの塔下に迫つて、矢を射かけても、あたりは十尺もあらうといふ厚い壁體だし、開いてゐる窓はたつた一つであるから、一筋の矢を送りこむことも不可能だつたことだらう。そこに先祖の用心があつたかもしれないのだつた。

だが、今となつては、呪ひの小窓以外の、何ものでもない。
「もつとも、私はもう死んでゐる身なのだ。」

漢于仁は、そこで大きな溜息を一つついたのでつた。

帆村探偵が、漢于仁の顔を見たならば、どんなに驚くことだらう。それは、いつか鼠坂の心靈實驗會で逢ひ、それから、眞夜中の銀座裏で突飛な質問を浴せかけたあの神田仁太郎といふ怪青年に瓜二つの顔だつたから。しかし、あれは日本での出来ごとだつた。ここは疑ひもなく、西へ五百里も距つた中華民国は浙江省での話だつた。

漢青年は、またいつものやうに、あの不思議な日以来の出來事を復習し、隅から隅まで緻密な注意を走らせてみるのだつた。

その頃、彼は故郷の杭州を亡命して、孫火庭といふ家扶と共に、大日本の東京に、日を送つてゐた。日本へ渡つたときは、まだ小さい少年だつたので、日本語を覚えるのに餘り苦勞をしなかつた。彼はいつしか、家扶の孫火庭がつけてくれた日本名の神田仁太郎といふ名を愛してゐた。孫火庭自身も日本人らしく曾我貞一と名乗つて、中國人らしい顔色を何處かに振りおとしてゐた。

二人の生活は、出来るだけ質素を旨とした。孫火庭は、支那料理のコックと稱して、方々の料理店を渡りあるいた。そのとき、漢少年を自分の甥だと稱して、一緒につれあるいたのだつた。

この數年は、丸の内のお濠近くにあるカフェ・ドラゴンを買ひとつて、二人は行ひすましてゐた。漢于仁は少年期をたびこして、いつしか立派な青年となつてゐた。そしてその瀟洒たる風采と偉貌とは、おのづから貴人の末であることを現してゐるかのやうであつた。彼は、いつとはなく、銀座や新宿のカフェ街に出入することを覚えてしまつた。彼の男らしい容姿と、豊かなポケット・マネーは、どの店でも女給達をワツワツと騒がせずには置かなかつた。

彼は、孫火庭の忠言も、どこに吹くかといふやうな顔をして、毎日毎夜、東京中をとりまはるのに無中だつた。彼は遂に一臺の高級クーペを買ひこむと、簡単に乙種運轉手の免狀をとり、その翌日からは東京市内は勿論のこと、横濱の本牧海岸、さては鎌倉から遠く小田原あたりへまでもドライブした。その結果、彼は知らず識らずの裡に、スピード狂になつてゐた。時速四十哩などは、お茶の子サイサイであつた。警視廳の赤オートバイに追驅けられたこともしばしばだつたが彼はいつも、鼻先でフンと笑ふと、時速六十五哩といふ砲彈のやうなスピードで、呀ツといふ間に赤オートバイを豆粒位に小さくすることが慣例であつて、この度毎に彼は鼻を高くした。

恰度このころ、彼には鳥渡氣懸りな事件が生じた。それは家扶の孫火庭が、一週間ばかりといふものは、行方不明になつたことだつた。彼に行かれては、漢青年は浮木にひとしかつた。非常に心配して、行

く末をいろいろと思ひ煩つてゐるところへ、孫火庭がヒョククリ歸つてきた。歸るには歸つてきたが、彼は二人の中國人を連れてきた。一人は王妖順といつて、孫と似たりよつたりの年頃で、もう一人は始めからマリ子と呼ぶ、まだ十七八の少女だつた。彼等は外へ宿をとるといふ風もなく、カフェ・ドラゴンに寢泊りするやうになり、王は毎日外出して夜遅く歸つて来る。一方マリ子と呼ぶ少女は、ドラゴンの女給となつたのだつた。

そんなことは、漢青年にとつて大した問題ではなかつた。困つたのは、孫の鼻息が、急に荒くなつたことだつた。彼はことごとくに文句を云つた。さうかと思ふと、彼を數回に互つて、心靈實驗會へひつぱつて行つた。そこで、漢青年はいく人となく、死んだ知友の靈と話をした「死後の世界」といふものが、なんだか實在するやうに感ぜられて來たのだつた。漢青年は「死」といふ問題に、段々と恐怖を覺えずには居られなかつた。人間は、死んだ後でも、死んだことを意識しないものであるものだといふことが、心靈實驗會の多くの實例によつて、判つてきたのだつた。そのことは一層、漢青年を脅かした。彼は、京濱國道を六十哩のスピードで走つてゐて、時々通行人を轢いたり、荷車に衝突して自分も相當の怪我をしたことが何回もあつたことを顧みて慄然とした。ひよつとすると、あのうちのどの事件かて以て、自分には既に死んでしまつたのではなかつたか。

さうした不安が、心の片隅に咲きだすと、見る見るうちに空を蔽ふ嵐雲のやうに擴がつていつた。彼は異常の興奮に發汗しながら、まづ胸部を抑へるのだつた。それから、幅の廣い帯を探し、臀部を撫

で、頭髪に觸れてみた。もしや指の先に、大竹女史の身體が觸つたなら、そのときは萬事休すといはなければならぬ。

いやいや、靈媒は、大竹女史に限つたことはないのだ。中には、男の靈媒もあることだつた。どの靈媒を通じて、自分の靈魂が、娑婆を訪問するかもしれない。さう思ふと、居ても立つても居られなかつた。このごろでは自動車の運轉も控へ目にして、溫和しく閉籠つてゐる自室を出ると孫を呼んで、自分が生きてゐるかどうかを、尋ねてみた。

孫の言葉だけでは物足りないときは、マリ子を呼んで、身體の一部に觸らせた。それでも自信が得られないときは、氣狂のやうになつて、眞夜の街を彷徨し、逢ふ人逢ふ人に、自分が生きてゐるかどうかを判定してくれるやうに頼むのだつた。人々は誰もこの氣狂ひを同情したり、恐ろしがつたりした。

帆村探偵との出會も、その發作中の出來事だつた。

だが、その内に、いよいよ本當に運命の日が來てしまつた。

ハツキリした記憶はない。何年何月何日だつたかも知らない。漢青年が不圖眼を醒ますと、彼は見慣れぬ寢床に睡つてゐたことを發見したのだつた。明るい屋根の下の室だつた。グルリと見廻はすと、五間四方位の室だつた。室内の調度は……。

「おおツ。」

と彼は叫んだ、よく見ると、いちいち、古い記憶のある調度はかりだつた。鶯色の緞子の垂幕「美人

戲球圖」とした壁掛けの刺繡、さては誤つて彼が縁を缺いた花瓶までが、嘗て覚えてゐたと同じ場所に、何事もなかつたかのやうに澄しかへつて並んでゐたのだつた。すると、この室は？

「これは、故郷の杭州に立つてゐる鳴弦樓だ。少年時代に遊びくらしした部屋ではないか、おお、あそこには、懐しい小窓がある。あの外には繪のやうに美しい西湖が見えるのだ。見たい、見たい、生れ故郷の西湖を！」

漢青年はムツクリ起きようとして、ハツと顔色をかへた。手も無い、足も無いのだ。いや身體全體が無いのだ。

「おお、これはどうしたことだ。」

彼は、狂人のやうになつて、あたりを見廻した、室内の光景に、不思議はなかつた。そして、いや、あつた。あつた。寢床の上に、彼の足が、長々と横たはつてゐた。胴もある。おお、手も見えてはいか。

彼は、再び起きようと試みた。

だが、驚いたことに、眼でみると、そこに在るに違ひない手だの脚だのが、動かさうとなると、俄かに消えてなくなつたやうに感じられるのだ。言葉を變へていふと、全身にすこしも知覺が無いとでも言はうか、いや、それとも少し違ふやうだ。

氣がつくと、枕頭に人間が立つてゐる。見ると一人ではない。三人だつた。

その顔には、覚えがあつた。中國服に身を固めた孫火庭と王妖順だつた。もう一人はピカ／＼する水色の絹で拵へた婦人服のよく似合ふマリ子だつた。

「これは一體何事だい。」

と漢青年は呶鳴つた。

「貴方様は、遂に亡くなられました。」

と孫が、いつになく穏かな口調で云つた。

「莫迦を云ふな。お前達がよく見えてゐる。」

「貴方様はお氣付になりませんか。」孫は顔を一尺ほどに近づけて云ふのだつた。「貴方様は京濱國道で、自動車電柱に衝突なさいまして、御頓死遊ばしましたのですぞ。貴方様は幽界にお入りになつて、唯今から幻影を御覽になつてゐます。われわれも、貴方様の靈のうちのこる一個の幻影にすぎません。お疑ひならば、お手をお觸れ下さい。」

さう云つて孫は、漢青年の手をとつた。彼は自分の手がスウと持上つて、孫火庭の身體を撫でてゐるのを見た。しかし孫がそこにゐることは、全く感ぜられなかつた。青年は唇を噛んだ。

「御覽遊ばしませ、王もマリ子も、貴方様の幻影につれて、これから御意のままの御仕へを致すてございませう。それからあの小窓から、外をお眺めなさいませ、楚堤が長く連つてゐるのが見えます。」

漢青年は、氣がつくと、いつの間にか窓邊によつてゐた。それから、西湖の風光が懐しく彼の心を打

つた。かうして、漢青年の幻想生活が始まつた。

彼は、思ひ出したやうに食事をした。死んだものが食事をするとは、變てはないかと考へた。

「それは幻影だ。食事は永い間の習慣だ。そのやうな種類の幻影だ、中々消えるものではない。」どこかで、さう囁く者があるやうだつた。

漢青年は、幻影を自由に楽しんだ。殊に彼にとつて好ましかつたのは、マリ子を傍近く呼んで、他愛のない話をしたりその果には思切つた戯れを演じてみるのだつたが、マリ子はどんなひどいことにも反抗しないで、あらゆる彼の欲するところに従つた。反抗のない生活——そこにも漢青年は、幽界らしい特徴を發見した。

だが、それにも倦きてくると、彼はあらゆるものに注意を向けた。ことに彼を喜ばせたものは、音響だつた。どんな微かな音響であつても、彼は見通すことなく、その音響が何から来るものであるかについて、考へるのが樂しみになつた。ことに、どうしたわけか、この樓臺が震動すると共に起る音響に對して、興味がひかれたのだつた。うつかりしてゐるときには、それを東京時代に經驗した自動車の警笛のやうに聞いたり、或ひは又、お濠の外に重いチェーンを降ろす浚漕船の響きのやうにも聞いた。しかし、のちになつて、それと氣がつき、苦笑がこみあげてくるのだつた。この杭州の片田舎に、圓タクの警笛の響きもないものである。

そのうちに彼は、知覺のまるで無い他人の手足のやうな四肢を、意のままに少しづつ動かすことを練

習にかかった。それは彼の視覚の援助によつて段々と正確に動いて行つた。それは非常に大きい喜びに相違なかつたのである。

この調子で身體がうまく動くやうになつたら、彼は何を措いても、この天井の硝子板をうち破り、その孔から、樓上へ出てみたいと思つた。そして廣々としたあたりの風景を見るときのことを考へて、どんなに嬉しいだらうかと、胸をわくわくさせたのだつた。

ところが或日のこと、漢青年は困つたことに出逢つてしまつた。それは不圖彼が、生前痔疾を病んだことを思ひ出したのだつた。氣をつけてゐると、寢具や、床の上までもその不快な血痕が、黴々として附着してゐるのを發見した。

彼は驚いて、マリ子の幻影を呼ぶと、患部を拭はせた。彼女の言葉によると、その痔疾は、かなりひどくなつてゐるさうである。

それだけならば、漢青年は、我慢をしてゐるつもりだつた。ところが彼は問題を惹起さずにはゐられないことになつたといふのは、幾度もマリ子に、痔の清掃を命じてゐるうちに、いままでのあらゆる彼の暴令に、唯の一度も厭な顔を見せたことのない彼女が、この痔疾の清掃には極度に眉を顰めてゐることに氣がついたからであつた。

漢青年は遂に決心をして、家扶の孫火庭を呼んで、痔疾の治療をしたいと云つた。孫は非常に困つたやうな顔をしたが、

「何分ここは片田舎のことでございますから、杭州へ出まして醫師を見つけて來ます間三日間お待ち下さいまし。」と云つた。

「何を措いても、早くせい！」

漢青年は、家扶を激勵したのだつた。

それから三日目のことだつた。

孫はニコ／＼して部屋に入つてくると、痔の醫師を連れてきたことを報告したのち、

「この醫師は、啞で聾でございますから、何もお話しなさつてはなりませんぞ。」と嚴かな顔付をして附加へた。

そこへ王妖順が、一人の不思議な男を案内してきた。色の褪せた古い型の長衣を着てゐて、いつも口をモグ／＼させては、ときどきチュツと音をさせて、眞黒い唾を嘔いた。それは多分、よほど嚙み煙草の好きな男なのだらう。彼は儼くさい鞆を開くと、ピカ／＼光る手術道具をとりだした。王と孫が、漢青年の衣類を脱がせた。

(マリ子が居てくれればよいのに、マリ子はどこへ行つたのだらう。)

漢青年は、マリ子が今日は少しも顔を見せないのに不審をうつた。

孫と王とが、漢青年の兩脚を抑へつけてゐると、その嚙煙草すきの醫師は、メスを探すやら、ガーゼ

を絞るやらで、ひとりて手ノ手古舞をしてゐた。

漢青年は、退屈を感じて、醫師の顔ばかりみてゐた。ことにそのよく動く唇を呆れて眺めてゐた。

(これは變だな)

と、漢青年は胸のなかで呟いた。寢臺の下でガーゼを絞つてゐる醫師の目は、何事かを彼に訴へるかのやうに、動いてゐた。その場所では、漢青年の脚を抑へてゐる孫と王の視線が、全く届かないところだつた。

怪しい醫師は、警告の目付をしたあとで、唇をビクビクと動かさせた。

漢青年は、しばらくその唇の動くのを見てゐたが、

(呷ッ)

とばかりに、心中驚いた。それといふのが、この怪しい醫師の唇は、煙草を噛んでゐると見せかけて、唇の運動がモールス符號をうつてゐるのだつた。それを一々判讀して綴つてみると次のやうになつた。

「シユジュツゴ、ガーゼヲトツテ、テガミヲミヨ。」

「手術後、ガーゼを取つて、手紙を見よ。」この信號は、繰返し發信せられたのだつた。

164 啞で聾の醫師は、最後に大きいガーゼをあてて、その周圍を絆創膏で止めると、遂に一語も發しないで、部屋を出ていつた。孫も王も、醫師を見送るためにこの室から出た。

漢青年にとつて、チャンスは今だつた。

彼は手を伸ばすと、ガーゼを掴んだ。手を動かす練習をもうすこし遅く始めたのだつたら、彼はこのチャンスをも、むざむざと逃がしたかも知れないのだ。

ガーゼの中には、果して小さく折つた紙片が入つてゐた。彼は口も使つて苦心の結果、その手紙といふのを開くことに成功した。そこには、漢青年の脳髓を痺らせるほどの重大なことがらが認めてあつた。

「今夜、電燈の消えるのを合圖に、天井の硝子板を破つて、脱れいでよ。」

漢青年は、三度ほど讀みかへすと、その紙片を丸めて、ボンと口の内へ入れて、呑みこんだ。

165 脱走せよ、といふ者がある。何者とも知れない。しかしこれも「死後の世界」に於ける幻想であらうか。

これが生きてゐるのだつたら、軽々しい行動は考へなければならぬ。しかし、どうせ死んでゐるものなら、二度と死ぬことはないだらう。無聊に困つてゐる自分のことだ。ではやつつける——漢青年は決心した。

だが、今はまだ日中である。西湖の方を眺めると、湖面がキラ／＼と光つてゐる。屋根の硝子天井の上からは、強い太陽の光線が、部屋中いつばいにさしこんでゐる。脱走しろといふ。夜分になるのは申中だ。

さう思つて、漢青年は窓によりかかつたまま、硝子天井のどの邊を破つてやらうかと上を見た。

そのときだつた。

まさにそのときだつた。

これが、天變地異と、いふものだらうか。

奇蹟！とは、この事であらうか。

信ぜられない！ 信ぜられない！

「呀ッ！」

漢青年が見上げてゐた硝子天井が、

突然眞暗になつた。あの、カンカン日の當つてゐた硝子天井が、

一瞬間に光を失つてしまつたのだ！

漢青年の毛髪は、あまりの恐ろしさのために、まるで針鼠のやうに逆立つた。

「眞逆！」

窓の外を見ようとして振返つたが、そこには同じやうな暗黒があるばかりで、あの繪のやうな美しい

西湖の姿は、どこにもなかつた。

室内全體が、眞暗だつた。

こんな馬鹿げたことはない。漢青年は、自分の視力が一瞬に亡びたのかと思つた。

それとも太陽が、突如として消滅し、世界が眞暗闇に歸つたのかとも思つた。



「ドドドーン」

といふ音響をきいたと思つた。

漢青年は、ハツと気がついた。

「今夜の停電といふのが、これだ。そしてこれには、何か根本的の誤謬がある！」

彼は持つてゐたニツケルの文鎮を、ヤツと天井と思はれる方角めがけて、投げあげた。

ガラ／＼と、硝子天井が崩れる音がした。

その途端に、バツと明るくなつた。

二度目の奇蹟！ 太陽は再び燦々たる光線を硝子天井の上に降りそそいだ。

「畜生！ こんなカラクリに、ひとを騙しやがつてツ！」

漢青年は、壊れた天井の間から大空を見あげると、そこには碧い大空のかはりに、もう一層の天井があつて、この二つの天井の間に燭力の強い電球がいくつも點いてゐるのが見えた。ああ、この偽瞞に

ちたインチキ日光に、青年は幾日幾月を憶れたことだつたらう。

彼は一つ肯くと素早く、西湖を望む窓邊に駆けより、重い花壇を發止となげつけた。ガタリといふ物

音がして、西湖の空のあたりが二つに裂けて倒れた。これは、近視眼の漢青年を利用したパノプマでし

かなかつたことが暴露されたのだつた。

外には、どうやら喊聲があがつてゐるやうな氣勢だつた。

だが、どうしたのか、孫も王もそれからマリ子も上つてくる様子になかつた。漢青年は、片手にハム

マーを掴むとヒラリと寢臺の上に飛びあがり、ヤツと聲をかけると、天井裏にとびついた。彼の全身に

はエネルギーが、はちきれるやうに溢れてゐるのが感ぜられた。

彼の手に握られたハムマーは、天井板を木葉微塵に砕いていつた。彼は勢ひにまかせ、ドンドン上に

向つて出ていつた。

壁土のやうなものがバラ／＼と落ち、ガラ／＼と屋根瓦が墜落すると、そのあとから、冷え冷えとす

る夜氣が入つてきた。漢青年はその孔からヒラリと外に飛び出したのだつた。

「おお、これは。」

それは見覚えのある銀座裏の袋小路に相違なかつた。彼の立つてゐるのは、カフェ・ドラゴンとお濠

との間にある日本建の二階家の屋根だつた。ハムマーで打ちぬいて來たのは、一部がとなりの煙突にぬ

ける換氣孔だつた。それは漢青年をして、杭州にある氣持を抱かせるについて、二階家の中に建築した

彼の密閉室の換氣を行ふ装置だつた。

しかし、いつもの夜の銀座裏と違ふところがあつた。

それは、家の周圍に、幾千人の群衆が集つてゐて、ワツワツと四方へ波のやうに動いてゐたことだつ

た。どこから射つものやら、ときどきヒューツと呻つて、銃丸が耳をかすめて飛び去つた。

「おお、此處にゐましたね、漢于仁君。」

いきなり漢青年の背後から聲をかけたものがあつた。彼はギョツとして、振向くとそこには夜目にもそれと判る人の姿があつた。それは、例の怪しい醫師だつた。

「これは一體、どうしたことなのです。そして君は誰です。」

漢青年の聲は火のやうであつた。

「あなたの祖先の地が、漢于仁君の歸國を待つてゐます。」その怪しい醫師はパキパキした聲で云つた。

「なに！」

「一刻も早く御歸國なさい。だが此所で御覽のとほり、事態は極度に悪化してゐます。遁れる路は唯一つ、お濠をくぐつて、山下橋へ。」

怪しい醫師は、小さい包を、漢青年にソツと握らせた。青年は、その手を無言の裡に、強く握りかへすと、このままソツと屋根の上を走ると見る間に、ひらりと身を躍らせて、飛び降りた。大きな水音がきこえると、彼の怪しい醫師は、暗闇のなかに、ニツと微笑したのだつた。

「昨夜の事件は、當分記事禁止らしいね。」私は、片手を繻帯で痛々しく釣つた帆村に云つた。

「それほどのことでもないが」と帆村はニヤリと笑つた。

「こつちで騒ぎを大きくしたやうなものさ。」

「ボラギノール一壺で、君があんなに器用な真似をするとは思はなかつた。」

「君があんな壺を拾つてくれなかつたら、この事件は今頃どうなつてゐたか、しれやしない。」帆村は、大きく溜息をついてそこに脱ぎすてである支那醫師の服装の上に目を落した。

「だが孫火庭が呼びに来てくれるまでは、気が氣ぢやなかつた。」

「あの風變りな新聞廣告が、きいたのだね。」

「ふふ。」なにを思ひだしたのか、帆村が笑つた。久振りに見る彼の笑顔だつた。

「漢青年は、うまく脱走したかなア。」

「大抵大丈夫だらう。」

帆村は大して心配してゐない様子だつた。

「それにしても、どうして孫火庭は、漢青年に背いたんだ。」

「大きな金と名譽とを握らされたんだよ。」彼は嘔出すやうに云つた。中華民國の崩壊をなんとかして支へようといふ某要人が、孫を買収したのだ。王妖順はその要人の一味だ。もし漢青年が今日のやうに切迫した時局を知つたなら、彼は立ち處に故山に歸り、楊子江と錢塘口との下流一帯を糾合して、一千年前の呉の王國を興したことだらう。それは中國の心臓を漢青年に握られるやうなものだ。だから當分のうち時局の切迫を漢青年に報せず置くことが、必要だつたのだ。さうかと云つて、彼の生命を斷つことは、今日あの邊に巨富を擁してゐる大人連の怒りを買ふことであつて、それは不利益だ。そこで漢青

年を、ソツと幽閉して置くことになつたのだ。それも普通の方法では、漢青年の疑惑を避けることができないから、あのやうな面倒な道具建をし、彼の青年の知覺を鈍麻させて、あの狂言をうつたのさ。これは中國人でなければできない用意周到ぶりだよ。」
「すると、マリ子といふ女は、一體どうしたわけのひとなんだね。」
「あれは、すこしばかり儲け仕事をした女にすぎない、無論中國人ではなく、われわれと同じ國籍をもつてゐるんだよ。事件の中に若い女が一人とびだすと、すぐその女が主人公になつてしまふことが世間には多いが、今度の事件では彼女は一個のワンサ・ガールに過ぎなかつた。殺人がなかつたことと、それとが、今度の事件の二つの特異性だつたとしても、こじつけ迷説を掲げて置くかね。はつはつは。」

赤外線男

1

この奇怪極まる探偵事件に、主人公を勤める「赤外線男」なるものは、一體全體何者であるか？それはまたどうした風變りの人間なのであるか？恐らくこの世に於て、いまだ曾て認識されたことになかつた「赤外線男」といふ不思議な存在——それを説明する前に筆者は是非とも、ついこのあひだ東都に起つて、もう既に市民の記憶から消えようとしてゐる一迷宮事件について述べなければならぬ。これは事件といふには、實にあまりに單純すぎるために、もう忘れてしまつた人が多いやうであるが、しかし知る人ぞ知るで、識つてゐる人にとつては、これ又奇怪な事件である。ことにこの迷宮事件が後になつて、例の摩訶不思議な「赤外線男」事件を解く一つの重大なる鍵の役目を演じたことを思へば、尙更逸することのできない話である。

なんかと云つて筆者は、話の最初に於て、安樂の効能のやうな臺辭をあまりクド／＼と述べたてゐる重厚さに、自分自身でも夙くに氣付いてゐるのではあるが、しかしそれも「赤外線男」事件が本當

に解決されその主人公がマスクをかなぐり捨てたときの彼の大きな駭きと奇妙な感激とを思へば、一見思はせたつぷりなこの言草も、結局大した罪にならないと考へられる。――

さてその日は四月六日で、月曜日だった。

ところは東京で一乗降り降りの客の多いといはれる新宿驛の、品川方面ゆきの六番線プラットホームで、一つの事件が発生した。

それは丁度午前十時半ごろだった。この時刻には、流石の新宿驛もヒツソリ閑として、プラットホームに立ち並ぶ人影も疎らであつた。

あの六番線のホームには、中央あたりに荷物上げ下げ用のエレヴェーターがあつて、その周囲は重なる圍ひが仕切られて居り、その背面には、青いペンキを塗つた大きな木の箱があつて、これにはバケツだとかポロ布などの雑品が入つてゐるのだが、その箱の上を利用して新聞雑誌が一杯擴げられ、傍に青い帽子を被つた驛の賣子が、この間に合はせながら毎日規則正しく開かれる店の番をしてゐる。

このエレヴェーターとレールとの間のホームの幅は、やつと人がすれちがへるほどの狭さであるが、その通路にはエレヴェーターを背にして驛の明いてゐるうちは不思議にもきまつて、必ず一人の若い婦人が凭れてゐるのだ。その婦人は電車の發着に従つて人は變るけれど、其の美しさと、何となく物淋しさうな横顔についてはどの女性についても共通なのであつた。この神祕を知つてゐる若いサラリーマン達の間には、このエレヴェーター附近を「佐用媛の巖」と呼び慣はしてゐた。かの松浦佐用媛が、歸り

くべき人の姿を海原遠くに求めて得ず、遂に巖に化したといふ故事から名付けたもので、その佐用媛に似た美しさと淋しさを持つた若い婦人がいつも必ず一人は居るといふのであつた。

その午前十時半にも確かに一人の佐用媛が巖ならぬエレヴェーターの蔭に立つてゐた。鶯色のコートに、お定りの狐の襟巻をして、眞赤なハンドバックをクリーム色の手袋の嵌つた優雅な両手でチツと押さへてゐた。コートの下には小紋らしい紫がかつた訪問着がしなやかに婦人の脚を包み、白足袋にはフェルト草履のこれも鶯色の合はせ鼻緒がギユツと噛みついてゐた――それほど鮮かな佐用媛なのに、そのひとの顔の特徴を記憶してゐる者が殆んど無いといふ全くをかした話だつた。尤もホームは至つて閑散で、そんなことには超人的な記憶力をもつてゐる若い男たちが幸か不幸かその近所に居合はさなかつたせるにもよるだらう。そこへ上りの品川廻り東京行きの電車がサツと六番線ホームへ入つて來た。運轉臺の硝子窓の中には、まだ昨夜の夢の醒めきらぬらしい運轉手の寢不足の顔があつた。

「呀ッ！」

運轉手は彈かれたやうに、座席から立ちあがつた。彼の面はサツと青ざめた。反射的にブレイキを掛けたが、もう駄目だつた。

ゴトリ。……ゴトリ。……

車輪とレールとの間に、確かな手應があつた。あのたまらなくハッキリした轢音が……。佐用媛がいきなりホームからレール目懸けて飛びこんだのだ！

それから後の騒ぎは、場所柄だけに、大變なものであつた。現場の落花狼藉は、こゝに記すに忍びない。その代り検視の係官が、電話口で本廳へ報告をしてゐるのを、横から聴いてゐよう。

「……といふやうな着衣の上等な點から云ひましても、またハンドバッグの中に手の切れるやうな十圓札で九十圓もの大金があるところから考へましても、相當な家庭の婦人だと思ひます。……ああ、年齢ですか。それがどうも明瞭でありませぬ。何しろ、顔面を滅茶滅茶にやられてしまつたものですからネ。しかし着物の柄や、四肢の發達ぶりから考へますと、まづ廿五歳前後といふところでせうナ。」

係官は何を思ひ出したものか、こゝでゴクリと唾を嚙みこんだ。やがて鶯色のコートを着た轢死婦人の屍體は、その最期を遂げた砂利場から動かされ、警察の屍體收容室に移された。いつもの例によれば、こゝへ誰か遺族が顔色をかへて駆けこんでくるのが筋書だつたが、どうしたものか何時まで経つても引取人が現はれない。告知板に掲示してある外、午後一時のラヂオで「行路病者」の仲間に入れて放送もしたのであるが、更に引取人の現れる模様がなかつた。これだけの大した身なりの婦人で、引取人の無いのは不思議千萬だと署員が噂さし合つてゐるところへ、待ちに待つた引取人が現れた。それは轢死後、丁度十四時間ほど経つた其の日の眞夜中だつた。

それは隅田乙吉と名乗る東京市中野區の某料理店主だつた。彼はそんな商賣に似合はぬインテリのやうに見うけた。警察の卓子の上に擴げられた數々の遺留品を一つ一つ手にとりあげながら、彼はコムバ

クト一つにもかなり明瞭な説明をつけ加へた。轢死人は彼の末の妹だつたのだ。

「このコムバクトですがネ、梅子——これは死んだ妹の名前なのです、梅子はもう五年もこのコテイのものを使つてゐましたよ。ごらんなさい。蓋をあけてみると、この亂暴な使ひ方はどうです。あいつの性格そのものですよ。妹は今年廿四になります、どつちかといふと不良の方でしてネ、それも梅子自身のせるといふよりも私達同胞もいけなかつたんです。何しろ兄や姉が、合はせて八人も居るので、皆、相當樂に暮してゐるんです。梅子は末ツ子でした。兄や姉のところをズーツと廻ると、あつちでもこつちでも『梅ちゃん』『梅ちゃん』とチャホヤされ、『ほら、お小遣ひヨ』と貰ふ金も、十七八の少女には餘りに多すぎる嵩でした。梅子は純眞な子供の向うままに、好きなことをやつてゐるうちに、たうとう不良になつちまつたんです。このごろでは流石の同胞たちも、梅子から持ちこまれる尻拭ひに耐へきれなくなつて、何でもかんでも斷ることにしてゐたのです。轢死をする前の晩も私のところへ來ましたが、又金の無心です。これが最後だといふので百圓呉れてやつたところ、素直に歸つてゆきました。そのときは、よもやこんな慘らしいことにならうとは思ひませんでした。……なんですつて、警察へ來ようが大變遅かつたつて、それはかうですよ。ちよつと私は商賣のことで午後から出て居りまして歸りが遅かつたものですから……。」

顔面は判らぬが、髪かたちに、それから又身のまはりの品物などを一々肯定したので、轢死婦人は隅田乙吉の妹うめ子であると斷定された。乙吉は幾度も係官の前に迷惑をかけたことを謝し、屍體は

持参の棺桶に收め所持品は風呂敷に包んで歸りかけた。

「オイ隅田君、ちよつと待ち給へ。」司法係の熊岡といふ警官が席から立ち上つて來た。

「はいッ。」隅田乙吉は、手にしてゐた風呂敷包みを又卓子の上に置いて振りかへつた。

「君はこんなものを知らんか。」

警官は掌の上に、ヨーヨーを横に寝かしたやうな紙函を載せて、乙吉の方にさしだした。

「これは……？」乙吉の受取つたのは、よく鏡物の標本を入れるのに使ふ平べつたい圓形のボール函で、上が硝子になつてゐた。硝子の窓から内部を覗いてみると、底にはふくよかな脱脂綿の褥があつて、その上に茶つぽい硝子屑のやうなものが散らばつてゐる。

「判らんかね。」と警官は再び尋ねた。「これはセルロイドの屑なんだ。そして燃え屑なんだがネ。」

「どこに御座いましたのですか。」

「これは、君が今引取つてゆかうといふ轢死婦人のハンドバッグの隅からゴミと一緒に拾ひ出したのだ。」

「さあ、どうも見當がつきませんが……。」

どうやら隅田乙吉は、本當に心當りがないらしかつた。で、熊岡警官はそれ以上追究したり、また今とりつゝある上官の處置に異議を挿まうといふ風でもなく、事實その問答はそこで終つたのであつた。

隅田乙吉が屍體を守つて中野の家へ歸つてゆくと、入れ違ひに新聞社の一團が殺到して來た。

「たうとう、新宿の轢死美人の身許が判つたてぢやありませんか。誰だつたんです。」

「自殺の原因は何です。」

「全然素人ぢやないといふ噂もありましたが……。」

當直は、記者に圍まれたなり、ふかぶかと椅子の中に背を落とした。そして帽子を脱いで机の上にとくと、ポリ／＼と禿げ頭を掻いた。

「書きたてるほどの種ぢやないよ。それに轢死美人でも顔が見えなくぢやなア。」

本氣か冗談か判らぬやうなことを云つて、アアと大欠伸した。記者連もこんな眞夜中に自動車を飛ばして駈けつけたことが、のつけからそもその誤りだつたやうな氣がして、一緒に欠伸を催したほどだつた。

しかし、それから廿四時間後に、彼等は同じこの場所に、互に血相をかへて「怪事件發生」を喚きあはねばならないなどは、夢にも思つてゐなかつたのである。

2

それから廿四時間ほど経つた。

同じ警察署の夜更けである。今夜は事件もなく、署内はヒツソリ閑としてゐた。

そのとき署の玄関の重い扉を、外から靜かに押すものがあつた。

ギーツ、ギーツといふ音に、不圖氣がついたのは例の熊岡警官だつた。彼は部厚な犯罪文献らしいものから顔をあげて入口を見た。

「だッ誰かッ。」

夜勤の署員たちは、熊岡の聲に、一齊に入口の方を見た。しかし今しがたまでギーツ、ギーツと動いてゐた重い扉はピタリと停つて巖のやうに動かない。

「うぬッ。」

熊岡警官は席を離れると、ツカ／＼と入口の方へ飛んでいつた。そして扉に手をかけると、グツと手前へ開いた。そこには外面の黒々とした暗闇ばかりが眼に映つた。

「オヤー」

熊岡警官は、何を見たのか扉の間からヒラリと戸外に躍り出た。ボタンと扉はひとり手に閉まる。一秒、二秒、三秒……。空間も時間も化石した。

風船がパンクするやうに戸口がサツと開いた。

「さア、こつちへ這入れ！」

熊岡警官の怒號と諸共、黒インパネスを着た一人の男が轉げこんできた。署員は總立ちになつた。「何だ、何だッ。」

昨夜とは違つた當直の前にその男はひき据ゑられた。帽子を脱いだその男の顔を見て駭いたのは熊岡

警官だつた。

「なあーンだ。君は、妹の轢死體を引取つて行つた男ぢやないか。」

「うん、隅田乙吉だな。見識り越しの刑事も呻つた。」どうしたのか。」

たしかにそれは、隅田乙吉だつた。昨夜の悠然たる態度に似ず、非常に落着かない。何事か云ひだしかねてゐる様子だつた。

「何故、僕を見て逃げようとしたのだ。署の戸口を覗ふなんて、何事かッ。」

「いや申します申上げます。」熊岡警官の追窮に隅田はたうとう聲をあげた。「實は大變な間違ひをやつちまつたんです。」

「うむ。」

「昨夜この警察へ出まして、妹梅子の轢死體を頂戴いたして歸りましたが、まあこのやうな世間様に顔向けの出来ない死に様でございますからお通夜も身内だけとし、今日の夕刻、先祖代々傳はつて居ります永正寺の墓地へ持つて參り葬つたのでございます。」

「それから……。」

「葬ひもすみまして、自宅の佛壇の前に、同胞をはじめ一家のものが、佛の尊さをしあつてゐますと、丁度今から卅分ほど前に、表がガラリと明いて……佛が歸つて來たのでございます。」

「なにーッ、佛が歸つて來た？」警官の顔がサツと緊張した。いやな顔をして背中の方に首を廻した刑

事もあつた。

「死んだ筈の梅子が歸つてきたんです。こりや、てつきり化けて出たのだと思ひ、一同しばらくは寄りつきませんでした。いろ／＼観察したり押問答をしてゐるうちに、どうやら生きてゐる梅子らしい氣がして來ました。そこで寄つてたかつて聞いてみますと、梅子のやつ情夫と熱海へ行つてゐたといふのです。それを聞いて同胞は、夢のやうに喜び合つたわけですが、一方に於きまして、眞にどうも……」と隅田乙吉は下を向いて恐れ入つた。

「莫迦な奴ツ。」と宿直が呶鳴つた。「では昨夜本署から引取つていつた若い女の轢死體といふのは、お前の妹ではなかつたといふのだな。」

「どうも何ともはや……。」

「何ともはやで、濟むと思ふかつ。」宿直はあとでジロリと一座の署員を睨みまはした。昨夜の當直の名を大聲で云つて、(馬鹿野郎)と叩きつけた位だつた。他人の死骸を引取つて行つた奴も奴なら、引取らした奴も奴である。

「昨夜この男がデスナ」と側らの刑事が辯解らしく口を挿んだ。轢死婦人の衣類や所持品を一々點檢しまして、これは全部妹の持ち物に違ひない。このコムパクトがどうの、この帶どめがどうのと本當らしいことを云つていつたのです。ですから昨夜の當直も信じられたのだと思ひます。」

「イヤ全く、あれは本當なのです。」と隅田乙吉がたまりかねて聲をあげた。「あれは出鱈目でなくて間違

ひないのです。妹のものに違ひないのですが、さつき飄然と歸宅した本物の妹も、あれと同じ衣類を着、同じハンドバッグや、コムパクトなどを持つてゐるのです。つまり同じ服装をし、同じ持ち物をした婦人が二人あつたといふ事になるので、これは私どもには不思議といふより外、説明のつかないことなのです。」

これを聞いてゐた一座は、ギクリと胸に釘をうたれたやうに感じた。どうやらこれは單純な轢死事件ばかりとは云へぬらしい。

「しかし隅田」と當直は口を開いた。「兎に角、お前は他人の屍體を處分してしまつたことになるネ。あの轢死婦人の骨は持つてきたか。」

「いや、それがです。實は火葬にしまつたのです。」

「火葬にしまつた？」

「はい。私どもの墓地は相當廣大でございまして、先祖代々土葬といふことにして居ります。で、あの間違へたご婦人の遺骸も、白木の棺に納めまして、そのまま土葬してございませうな次第です。」

「ううん、土葬か。當直は、なあんだといふやうな顔をした。では直ぐに掘り出して、本署へ搬んで來い。警官を立ち合はせるから、その指揮を仰ぐのだ。よいか。」

熊岡警官は、隅田乙吉について現場へ出張することを命ぜられた。

どうも、粗忽にも程があるといふものだ。いくら獨り歩きをさせてある妹だからといつて、顔面が

粉碎してはゐるが、身體の其他の部分に何か見覚えの特徴があつたらうし、また衣類や所持品が同じだといつても、そんなに嚴密に同じものがあらう筈はない。これは警察の方でも屍體を持てあまし、早く處分したいと考へてゐたので、よくも檢はず下げ渡したもので、引取人の乙吉が生れつきの粗忽者であることを知らなかつたせゐであると、當直は斷定した。そして熊岡警官が、婦人の屍體を掘りだして來れば、再検査をすることによつて、どこ誰だか判明するだらうと考へた。

皆が出ていつてから時間が相當経つた。もう今頃は、隅田家の墓地へ着いて暗闇の中に警察の提灯をふつてゐるところだらう。掘りだした屍體がここへ歸つてくるまでには、まだ暇があつた。今のうちに喰べるものは喰べて置かないと、たとひ若い婦人にしても、顔面のない屍體を見ると食欲がなくなるだらうと考へて、當直は夜食の親子丼の蓋をとつた。

二箸、三箸つけたところへ、署外からギリ／＼と電話がかかつて來た。

「當直へ電話です。」と電話口へ出た見習警官が云つた。

「おお。」當直は急いでもう一と箸口の中に押しこむと、立つて卓子電話機をとりあげた。

「はアはア。……うん、熊岡君か。どうした……ええッ、なッなんだつて？ 墓地を掘つたところ白木の棺が出た。そして棺の蓋を開いてみると、中は藻抜きの殻で、あの轢死婦人の屍體が無くなつてゐるッて！ ウン、そりや本當か。……君、氣は確かだらうネ。……イマ怒らすつもりは無かつたけれど、あまり意外なのでねエ……ぢや署員を増派する。しつかり頼むぞッ。」

ガチャリと電話機を掛けると、當直は慌ただしくホールを見廻した。そこには一大事勃發とばかりに、一齊にこつちを向いてゐる夜勤署員の顔とぶつつかつた。

「署員の非常召集だッ。」

ピーツと警笛を吹いた。

ドヤ／＼と階段を踏みならして署員の下りて來る蹺音が聞えてきた。

當直は氣がついて、喰べかけの親子丼に蓋をした。

——たうとう、本當の事件になつてしまつた。隅田乙吉の妹梅子に間違へられた轢死婦人は一體、どこの誰であるか。どうして、地下に葬つた筈の屍體が棺の中から消え失せてしまつたか。

熊岡警官が保管してゐる「茶つばい硝子の破片のやうなもの」は何であるか。何故それが、轢死婦人のハンドバッグの底から發見されたか。

さて筆者は、この邊でプロローグの筆を擱いて、いよ／＼「赤外線男」を紹介しなければならぬ。

3

Z 大學に附屬してゐる研究所に深山樞彦といふ理學士が居る。この理學士は大學の方の講座を持つてはゐないが、研究所内では有名な人物である。専攻してゐるのは光學であるが、事務的手腕もあるといふので、この方の人材乏しい研究所の會計方面も見えてゐるといふ働き手であつた。色は白い方で、背

丈も高からず、肉附もふくらかであつたので、何となく女性めき、この頃もてはやされるスポーツマンとは凡そ正反對の男であつた。

深山理學士が目下研究してゐるものは、赤外線であつた。

赤外線といふのは、一種の光線である。人間は紫、藍、青、緑、黄、橙、赤の色や、これ等の交つた透明な光を見ることが出来る。この赤だの青だのは、ラヂオと同じやうな電波であるが、ラヂオの電波よりも大變波長が小さい。そのうちでも紫は一番短く、赤は比較的波長が長い。長いといつても一センチメートルの千分の一よりもまだ短い。ラヂオの波は三百メートルも四百メートルもあつて較べものにならない。

ところで光線と名付けられるものは、この紫から赤までだけでは無い。紫よりもつと波長の短い波があつて、これを紫外線とよんでゐる。紫外線療法といつて、紫外線を皮膚にあてると、人間の活力はメキ／＼と増進することは誰も知つてゐる。一方、赤よりも波長の長い光線があつて、これを赤外線と呼んでゐる。赤外線寫眞といふのが發達して軍事を助けてゐるが山の頂上から向うの峠を見懸けて寫眞をうつすにしても、普通の寫眞だともあまり明瞭にうつらないが、普通の光線は遮り、その風景から出てゐる赤外線だけで寫眞をとると、人間の眼では到底見透しができない遠方までアリ／＼と寫眞にうつる。人間が飛行機に乗つて、千葉縣の霞ヶ浦の上空から西南を望んだとすると、東京灣が見え、その先に伊豆半島が見える位が關の山だが、赤外線寫眞で撮すと、雲のあなたに隠れて見えなかつた静岡灣

を始め伊勢灣あたりまでが手にとるやうに明瞭に出る。

この紫外線も赤外線も、同じ光線でありながら、普通人間の眼には感じない。つまり人間の網膜にある視神経は、紫から赤までの色を認識することが出来るが、紫外線や赤外線は見えないといへる。

見えないといへば、色盲といふ眼の病氣がある。これは赤が見えなくて、赤い日の丸も青い日の丸としか感じない不幸な人達がある。それは視神経の疾患で、生れつきのものが多い。ひどいになると、七つの色のどれもが色として見えず、世の中がスクリーンにうつる映畫のやうに黒と灰色と白の濃淡にしか見えない氣の毒な人がゐて、これを全色盲と呼んでゐる。軽い色盲でも、赤と青とが判別出来ないのであるから、うつかり圓タクの運轉をしてゐても「進め」の青印と「止め」の赤印とをとりちがへ、大事故を發生する虞れがある。現に十年ほど前英國で、列車大衝突の大椿事をひきおこしたことがあつたが、そのときのぶつつけた方の運轉士は、色盲だつたことが後に判明して、無期徴役の判決をうけたのが無罪になつた。人間の視力なんて、まことに不思議なものであり、又デリケートなものである。そして紫から赤までしか見えないなんて、貧弱きはまる視力ではある。

話が色盲の方へ道草をしてしまつたが、この赤外線といふ光線は、人間の眼に感じないとされてゐるだけに、祕密の用をつとめるとて重寶されてゐる。甲賀三郎氏の探偵小説に「妖光殺人事件」といふのがあるが、それに赤外線を用ゐた殺人法が述べられてゐる。それは赤外線警報器を變形したもので、殺さうといふ人の通路に赤外線を左の壁から右の壁へ、噴水を横にとばしたやうに通して置くのだ。右の

壁の中には光電管といつて赤外線を感じる真空管のやうなものが秘密に仕掛けてある。人の通らぬときは、赤外線がこの光電管に入つて電気を起こし、ピストルの引金をひつばらうとするバネを動かさないやうに止めてゐる。ところがもしこの廊下に人が通つて赤外線を遮ると、どうなるかといふのに、赤外線は人體で遮られ光電管には今まで流れてゐた電気がハタと止るから、従つてピストルの引金を動かさないやうに壓へてゐる力がぬけ、即座にズドンとピストルが発射され、その人間を斃す……といふ中面白方法だ。赤外線だから、その被害者の眼に見えなかつたので、仕方がない。

満洲の重要な橋梁の東橋脚から西橋脚の方へ向け、この赤外線を通し、西の方に光電管をとりつけ、光電管から出る電気で電鈴の鳴る仕掛けを壓へておく。若し匪賊が出て、この橋脚に近づき、赤外線を遮ると、直ちに光電管の電気が停るから、電鈴を壓へてゐる力は抜け、電鈴はけたたましく匪賊襲來を鳴り告げる。これも赤外線が見えないところを利用したものである。

深山理學士の研究問題は、この不可視光線と呼ばれる赤外線が人間にも見える装置を作ることにあつた。彼は、これを近頃流行のテレヴィジョンに組合すことに眼をつけた。

テレヴィジョンは、實驗室に居て、その映寫幕の上へ、例へば銀座街頭に唯今現に通行してゐる人の顔を見ることが出来るといふ器機だ。これが室内の様子を見るときになると、寫眞撮影場で使ふやうな眩しい電燈を點じ、マネキン嬢の顔を強照明することによつて、實驗室でその顔を見ることが出来る。これが普通のテレヴィジョンであるが、それを赤外線では照らすことにし、この實驗室にうつし出さうといふのである。

深山理學士は、あの奇怪な轢死婦人事件のあつた日と前後してこの装置の製作にとりかかつた。

それは丁度新學期であつた。この研究所内も上級の大学生や、大学院學生、さては助手などの配屬の變更があつて、ゴツタがへしをしてゐた。

赤外線研究の彼の仕事も、従來は助手も置かず唯一人でやつてゐたが、今度は赤外線テレヴィジョン装置を作つたり、ロケーションにゆかねばならなくなることも判り切つてゐたので、助手が一人欲しいと豫算を出したところ、元來經濟難のZ大學なので、助手案は一も二もなく蹴飛ばされたが、その代り大學部三年の學生で、是非赤外線研究をやりたいといふひとがあるから、助手がはりにそれを廻さう、當分我慢して、それを使へといふ所長からの話であつた。

それは四月のたしか十日か十一日の午前九時ごろだつた。深山理學士の研究室を外からコツ／＼とノックするものがあつた。

「ちよつと待つて下さい。」

學士は室内から聲をかけた。

五分ほど経つて、學士はやつと戸口に近づいた。

「まだ居ますか？」

と妙なそしてどつちかといふと失禮きはまる質問の言葉を、扉を距てて向うへ投げかけた。——學士

のである。

の出でくるのに痺れをきらして歸つてゆく人も多かつたので、かういふのが學士の習慣だつた。人を待たすことに一向頓着しないのも有名なる學士の習慣だつた。

「はア——」

といふやうな返辭と、カタリと靴の鳴る音が、扉の彼方でした。

學士はそこで澁々とポケットから鍵を出すと戸口の鍵孔に入れ、ガチャリと廻して扉を開いた。そこには思ひがけなくもピンク色のワン・ピースを着た背の高い若い婦人が立つてゐた。

「あ——」

「深山先生でいらつしやいませうか。」若き女性は云つた。

「さうです深山ですが……。」

「あたくし、理科三年の白丘ダリアです。先生のところで實習するやうにと、科長の御命令で、上りましたのですけれど。」

「ああ、實習生。——實習生は、君だつたんですか。おや入りなさい。」

男の學生だと思つてゐたのに、やつて來たのは、意外にも女學生だつた。しかし何といふ遅ましい女性なんだらう。近代の女性は、スポーツと洋装とのお蔭で、背も高くなり、四肢も豊かに發達し、まるで外國婦人に劣らぬ優秀な體格の持ち主になつたといふ話だつたが、それにしてもこの健康さはどうだ。これが女性といふものなんだらうか。深山理學士は早くもこのピンク色の物體が發散するものに當惑を

感じた。

「ダリアといふ名前だが。」と學士は訊ねた。

「失禮ながら君は混血兒なのかい。」

「まあ、いやな先生！」彼女は仰山に臂を曲げ腰をゆがめてカラ／＼と笑つた。「これでも日本人としては純種ですわヨ。」

「純種か！ イヤ僕は、君があまりにデカイもので、もしやと思つたんだよ。」

「先生は、小さくて可愛いんですのネ。」彼女は肥つた露な二の腕を並行にあげて、取つて喰ふやうな恰好を試みせた。

そんなことから、先生の深山理學士と生徒の白丘ダリアとは、何でもづか／＼と云ひ合ふ間柄になつた。しかしこの少女が、まだ十八歳であるとは、學士の容易に信じかねるところであつた。

赤外線研究室は、この先生と生徒によつて、晝といはず夜といはず、亂雑にひつかきまはされた。精密な部分品が、さまざまの實驗を経て一つ又一つ組立てられていつた。二人の熱心さは大變なものだつた。入口の扉にはいつものやうに鍵がかかつてゐた。食事を搬んでくるときと、白丘ダリアが夜更けて自分の住居へ歸るときの外は、滅多に開かれはしなかつた。深山理學士は獨り者の氣樂さで、いつもこの研究室に寢泊りしてゐた。

「アラ先生、まあ面白いことを發見しましたわ。」ネヂ廻しを握つて、器械のパネルに木ネヂをねぢこん

てゐたダリアが、頓狂な聲を張りあげた。
「どうしたんだい。」深山學士は増幅器の向うから顔を出した。
「とても面白いですわ。先生のお顔を右の眼で見たときと左の眼で見たときと、先生のお顔の色が違ふんですわ。」

「變なことを云ひ出したネ。」學士は自分の顔色のことを云はれたので鳥渡いやな顔をした。
「右の眼で見たときよりも、左の眼で見たときの方が、先生のお顔が青つぽく見えますのよ。」
「なアーんだ、君。色盲ぢやないのか。ちよつとこつちへ来て、これを見給へ。」

學士はダリアを引つばつて、色盲検査圖の前につれて來た。それは七色の水珠が、圓形に寄りあつてゐるのだが、色の配列工合によつて、普通の視力をもつてゐるものには「1」といふ數字が見える場合にも、色盲には「4」と見えたりするといふ簡単な検査圖だつた。ダリアの眼を、片つぽづつ閉ぢさせ、澤山ある検査圖を色々とめくつて調べてみた。しかし結果はどういふことになつたかといふのに、ダリアは色盲ではないといふことが判明したのだつた。

「色盲でも無いやうだが……氣のせるぢやないか。」

「いゝえ、氣のせるぢやないわ。先生がどうかしてらつしやるんぢやなくつて？」

「莫迦云つちやいかん。君の眼が悪いのだよ。説明をつけるとかうだ。いゝかい。君の右の眼と左の眼との色の感度がちがふのだ。今の話だと、君の左の眼は、青の色によく感じ、右の眼は赤の色によく感

ずる。兩方の眼の色に對する感覺が跛になつてゐるんだ。それも一つの眼病だよ。」

「さうでせうか、あたし困つたわ。」と白丘ダリアは一向困つたらしい様子も見せずに云つた。「んぢや先生、あたしが今視てゐる右の眼の風景と、左の眼の風景と、どつちの色の風景が本當の風景なんてせうか。どつちかの眼が本當のものを見て、どつちかの眼が嘘を視てゐるのですね。」

「そりや困つた質問だ。」と今度は深山理學士の方が本當に弱つてしまつた。「どうも君の網膜のうしろに僕の眼をやつてみることも出来ないからネ。」

さういつて理學士は考へ込んだ。

こんな調子で、二人はいつの間にか十年の知己のやうになつてしまつた。

白丘ダリアの入所後はやくも五日のちには赤外線テレビジョン装置がもう一と息で出來上るといふところまで漕ぎつけた。

ところが其の朝に限つて、いつもなら午前七時には必ず出てくる筈の白丘ダリアが、十時になつても姿を現はさなかつた。學士は一人でコツコツと組立を急いでゐたけれど、十一時になると、もう氣力が無くなつたと見え、ペンチを機械臺の上に抛り出してしまつた。

(どうして、白丘は出てこないんだらう?)

いろ／＼なことが、追懷された。何か本氣で怒り出したのであらうか。それとも病氣にでもなつたのであらうか。考へてゐるうちに、自分があの女學生に、あまりに頼りすぎてゐたことに氣がついた。ひ